
結婚奴隸五箇条 ～独妻者と暴れ虎に花束を～

壱琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚奴隷五箇条　　く独妻者と暴れ虎に花束をく

【Nコード】

N5148E

【作者名】

壺琉

【あらすじ】

ほむらはるか

穂村悠。ちよっぴり目付きが悪い高校生。いつものように朝起きて、なんだか知らないが縄で縛られていたある日、一人の少女が現れる。悠は少女に意味もわからぬまま婚約届に半強制的にサインさせられ、混乱する悠の前に少女は熱烈なキスをかました。正気に戻った悠が結婚出来ないと言葉を述べた。『さようなら、悠さま。あの世で待っていて下さいね?』独裁者な妻と傍若無人な虎の狭間で、悠の命を賭けた生きざまを描くラブコメディー。

第一項 結婚すべしっ!! (前書き)

最近不調なので、気分転換のため書いた物語です。悪魔と同じく不定期更新になるかと。

あ、ちなみにいきなり15Rなのでお気をつけを。ちょっと自分で書いててかなりヤバイですo(T□T)oまあ、キャラなのでどうか目を瞑って下さいませm(´`)(´`)m

第一項 結婚すべしっ!!

――4月7日。

新学期が始まった。始業式も無事に終わり、高校生活最後の年をどうやってエンジョイしてやろうか友達と語り合う平凡な日々。

そんな日常を繰り返すなか、この日は俺にとって記念日とも言える日付だ。いや、俺と同じ状況なら、世界中の人間がちよっとだけ成長した気分になれるだろう。

4月7日、この日は俺が生まれてから18回目の誕生日。この歳になって祝ってくれるほどの親ばかは居ず、もちろん彼女なんて居ない歴18年だ。

周りから少し変わってると言われている俺も例外ではなく、朝起きたら「はあ、もう18か……」なんて思うだろう。否！ 思うはずだった。

――なのに、なんだコレは？ 夢オチか？ 新手のドッキリだろうか？ それとも寝てる間に宇宙人に拐われて、変な実験でもされてるんだらうか……。

「……」

プニッと自分のほったをつねってみるが、ヒリリと痛むだけ。これで夢オチの可能性は無くなった。宇宙人の実験なら――まあ、

生きてはいないだろう。

寝起きのせいか、頭が混乱してる。幻覚に幻聴がその証拠だ。

「どうかなさいました？」

「いや、別に。お構いなく……」

ニコニコと幸せ一杯の笑顔を見せてくれる、美少女の名に相応しい女の子が、俺の部屋にあるちゃぶ台越しに座っている。もちろん、幻覚だ。幻覚のはずだ。

だって、こんなに可愛い子がこの世に居るとは思えない。つーか俺の部屋に居て、俺に微笑みかけてるのが信じられない。シンジラレナイヨー。

くせっ毛のある金髪のロングヘアー。吸い込まれそうなほど深みのある蒼い瞳。髪や目は西洋人なのに、顔立ちは幼く日本人形のように儚い。

包まれるようなソプラノが、全神経を癒してくれる。まさに男子垂涎モノの少女だろう。

一方の俺は適当におろしてるだけの黒髪、目付きが悪い、仕草がなんか不良っぽい、微妙に変な人、カッコいいと普通の間くらい、バカになりきれてないバカ。などなど、どれもこれも微妙な男子学生。

名前は、えっと……ダメだ、脳が上手く働いてない。

あゝ、穂村悠ほむらはるかとか言う名前だったような気がする。おおう、今18

にして自らの名前を忘れるほどの混乱を強いられているっ。

現実から目を逸らし続けていた事実だが、今をもって向き合う事にしよう。なんか知らんがロープでミノムシみたいにされている。手首から先と首のみが自由、つかそれしか動かせないなら自由じゃないか。

「早く判を押して下さいな？」

「……なあ、俺にはこれが婚姻届に見えるんだが幻覚か？ 幻覚だよな？ 精神科行ってくるから縄ほどいてくんない？」

「ええ、お好きなように。でも——」

少女は言葉を一旦飲み込んで、再び微笑む。

「はやく判を押してほしいな？」

こくん、と小首をかしげて世界中の野郎どもが泣いて喜ぶ魔の上目遣いで、甘えるようにおねだりをしてくる。

「お、おう……」

ま、悪い気はしないし逆らう気なんて微塵もなく、しかも幻覚である為軽い気持ちでサインした。何故他の項目が全て埋まってるのかは置いておこう。

それより早く、病院に行かなくては——。

「ふふ、ふふふっ。えへへ」

少女は薄っぺらな紙を宝物のように胸に抱き締めた。

な、なんだ……？

婚姻届の裏に、小さな紙がくっついていた。アレはそう、上から書くと下に敷いた紙にも同じ文字が写るってやつだ。

ではなんの為に――？

そんなの考えたって無駄って事はわかりきってるから、速攻で中断して、縄をほどいてもらうべく少女に声を掛けた。

「なあ、そろそろ――」

間違えた、かけようとしたんだ。

「愛しています、悠さま……」

「な――っ」

あろうことか、少女はちゃぶ台に身を乗り出して高校生らしからぬ熱烈なキッスをしてきたのだ。

「んっ、ちゅ――」

「……」

されるがままとはこの事だ。もし身体が自由に動けたとしても、口内をうごめく艶めかしい存在にピクリとも出来なかっただろう。

「んん、あふ、ちゅぶ——」

パチパチと秒速30回くらいのスピードで瞬きしても、鼻先って言うか口が完全に密着……どころか合体して、しかも目を閉じて頬を紅潮させ、必死にねぶる少女の姿は消えない。

「——んちゅ、ふあ、んん」

——っかさ。

「——んふう、ちゅる、んちゅ」

長いんだよねー。いつまでやってんだよこいつは？ そりゃいくら幻覚とは言えど、こんな可愛い奴にキスされたら嬉しいけどよ。幻覚のクセに発情してんじゃねえぞ、可愛いくせにつ。

あ、自分で言ってる意味わかんないや。

「ふあっ、んんっ、ぢちゅ——」

なんかもう。

「んくっ、ちゅ、んちゅ——」

いい加減にしてほしいんだが。まだ終わんないのか？ そろそろ顎疲れてきたし、いやまあ必死な姿はスツゴく可愛いけど。

「んっ、あふ、ちゅっ——」

動けないからどうしようもないし、彼女からやめてくれるまで舌

を噛むという野蛮窮まりない方法しかない。故に、悪に染まるかこのまま幻覚少女の暴走を受け止めるか。

どっちも無理そうなんですが……。

「ちゅぶっ、はんっ、んあ——」

舌の感覚無いっつーのに、お相手は悩ましい吐息が漏れてるし。どーしたもんかなあ。

早く消えてくんねエかなこの幻覚。いや、しかし少し惜しい気も。こんな状況俺みたいのには一生無いだろうし。悩む、悩むな。遠足に持っていくお菓子を買うとき、最後の30円がどうしても決まらない時くらいに悩むな。

「ちちゅ、んちゃ……ぷはっ」

お、やっと終わったか？

つつーっと唾液が糸をはり、ぷつと切れるのと同時に少女が目を開ける。荒く、熱い息を吐きながら潤んだ瞳で俺を見上げた。

「もういいはいいいへふか？」

呂律が回ってなくても、意味がわかったからぶんぶんと首を横に振る。

「らめに決まってんらろうがっ」

ちくしょう、俺まで変な喋り方になってんじゃねえかよっ。

「……けち」

もう意味がわからなかった……。

第二項 しちゃったもん勝ち!!

「――と言う訳で、宜しく願いします」

無事、縄はほどかれ少女の熱烈かつ妖艶な口付けから解放された。が、一つ見つめなきゃいけない現実が立ちはだかる。我が眼前で、嫁入りを果たしたかのように三指ついて、お辞儀する少女についてだ。

「……あ、いや」

これを見れば、俺は一生恋愛とか愛情とか芽生えちゃいけない人種になってしまう。それこそ、人類のゴミだめ行きでもオツケーなくらいに。

「一つ良いか？」

「はい？　　なんででしょうか？」

女神も思わず溜め息を吐くような笑顔の少女だが、今はそんなの見てる場合ではない。……やっぱりもう少しだけ見ておこう。

「ぬんっ」

全身全霊を人差し指に込め、緑色の触覚がはえた超人のビームを放たんばかりに、少女に向かって突き出す。

「お前だれだッ!!?」

「……はい? あなたの妻ですが?」

「……ああー」

間違っちゃいない。さっきのも幻覚でないとしたら、俺は確かに自分の意思で婚姻届にサインしたのだから。

「ちなみに、悠さまのお父様とお母様には許可を貰っています」

少女がにこやかに、無邪気に笑って婚姻届をファイルにしまった。国宝でも扱うかのような恐々とした手付きに苦笑してしまう。

——その瞬間。

「はっぴーばーすでい悠!!」

バカ母乱入。

「はっぴーにゅーいやー悠!!」

バカ父乱入。しかもなんか新年迎えちゃってる。脳味噌が目出度いからか?

「そしてっ!!」

バカ父とバカ母は互いに目を配り大きく息を吸い込むと、近所迷惑とか早朝だとかそんなのを一切無視して声を張り上げた。

「結婚おめでとう!!」

二人仲良くかんだのは放っておいてやろう。問題は、その内容だ。発情少女はパチパチと拍手してるし、父母はやりきった顔をして胸をはってやがる。しかもなんだ？ 結婚おめでとうって。

——マジヤバいんですけど。ちょーヤバいって感じなんですけど。マジヤバフジヤマ。フジヤママジヤバ。……ありゃ？

「えっと、結婚てマジ？」

ここは前向きな両親シカトで話を進める事にする。少女は不思議そうに首をかしげて、下唇に人差し指を当て、にぱあっと口の端をつりあげた。むう、可愛いなちくしょう。

「マジもマジです。本気と書いてマジですよ、私は」

言い回しが微妙に古いが、ここもあえてスルーする。無垢な笑顔に嘘偽りがあるようにも見えないから、本当に俺と結婚するつもりなんだろう。

ああ、心が痛い。凄く痛いよ……。別に騙したくて騙した訳じゃない。軽いノリで書いてしまったのは本当の事だが、俺だって起きたら縄でミノムシにされてて、目の前にはあり得ないほど可愛い女の子が居たんだ。混乱だってする、現実逃避だってするさ。だって人間だもの。

——つーことなにか。さっきのキスもマジもんって事か。あ、ちよっと特したきぶ……げふんげふん。

まあ良い。とりあえず現状を確認しろ。そしていつもの俺に戻るんだっ。

「で、どちら様？」

ようやく出た自分らしい口調にホッと息を吐く。

「あ、申し遅れました。私、ベルチェ・リナワーカーと申します。以後、よろしくお願いしますね？」

深々と頭を下げて、リナワーカーさんは姿勢を正す。こうして見れば、さっきの熱烈なき、き——アレをするような人には見えない。って言うか見たくない。たく、純情な青少年になんてハレンチな行為をしてくれやがったんだ。

「俺、微妙に混乱してるから確認して良い？」

「はい、どうぞ」

「えと、リナワーカーさんは——」

「あ、ベルチェで構いません、呼び捨てで。夫婦ですからっ、えへ」

聞き逃しちゃいけない単語が入ってたような、入ってなかったような気がしたが、再びよいしょと隅においやった。

「んじゃ、ベルチェは何でこんな真似を？」

「あなたを愛しているからです」

「……さっきも訊いたけど、俺と結婚するって本気？」

「はい、むしろ望むところです」

——マジか、やっぱりマジかこいつは。なんか全幅の信頼をおいてますよーオーラがこれでもかって飛んで来てるんですよ。ひしひしと感じちゃってるんですよこれが。

いや、待て。そもそもの、そもそものを忘れてたぞ？

「俺、お前の事知らないんだけど」

「知っています」

「じゃ、じゃあ何で結婚なんか？」

「ですから、愛しているからです」

きっぱりとカッコいいくらいに言い切る彼女に、思わずクラツてきた。これは彼女の健気な姿にきたんじゃない。なんでか知らないけど、愛情度がしょっぱなからマックスなのだ。そりやもうメーターをはち切らんばかりに。

俺がベルチェを知らないのを彼女は知ってる。でも俺を愛している……と。ますますわからん。とんだ謎かけだ。

「お前が本気なのは良くわかった。でもさ、なんつーか……悪いな」

「？」

「初対面で結婚なんて普通無理だろ？　それに、そんな簡単に決められる事でもねえし」

「……」

少女は目を見開くと、ギュッと唇を噛んで心痛な面持ちで俯いてしまった。

「……はあ」

なんで今日が誕生日かな。今日ほど自分の誕生日が4月7日だった事を悔やむ日はねえよ。違う日だったら、俺は17で結婚なんか出来なかっただろうから。いや、所詮それも逃げか。俺に出来る事があるとすれば、誠心誠意謝るくらい。てーとあれか、今日を待ち伏せしてって事？　なに、あなたスパイか何かですか？

「……残念、です」

「ああ、悪い……お？」

笑って、る？

顔を上げた少女は酷く無邪気で、残酷で、そして無垢な笑顔をしていた。ずっと、懷から日本じゃ滅多にみない銀光りした拳銃を取り出す。なんであんな物騒な物を持ってるのかは不明だが、とりあえず命がピコンピコンと警報を全力でならしているのはわかる。

「悠さま、サインしてくれたのに……」

左手には、婚姻届の裏についてたっぽい紙を持って――。

言ってる言葉はすげー悲しそうなのに、銃口をつきつけるとは何事だ。しかも満面の笑みで。恍惚とも残忍ともとれる猟奇的な笑顔が俺の心臓をギュッとアイアンクロー。これはもう愛とかじゃなくて、愛憎レベルのような気がしてならない。

「さようなら、悠さま。あの世で待っていてくださいね？」

「……はい？」

息がつまる。いや、この至近距離で拳銃を向けられたら誰だって縮み上がるはずだ。でも俺が注目したのは『そこ』ではなかった。

美しく、可愛らしく残酷に笑う少女の左手。紙に書かれた内容――
|。

「結婚奴隷五箇条？」

「本当はこんな事したくはなかったのですが、この五箇条に従ってあなたを殺さなくてはなりません」

寂しげに、愉快に、高揚を抑えきれないといった態度で俺の額に銃口を押し付けた。ひやりとした鉄の塊。額に触れたそれは、息づくように銃口から冷たい空気を吐き出している。

「結婚奴隷五箇条、第五条に従い、あなたを殺します。お覚悟、よろしいですか？」

よろしくない、よろしくないが……ちょっと待ってほしい。なんだ『これ』は？ 人権とか平穏とか、破っちゃいけないものが沢山

破られてるじゃんかよ。

——結婚奴隷五箇条、俺の人生を混沌につき落とすであろう情けを知らないその五箇条には、俺に圧倒的不利な内容が書かれていた。

「あなたの事は心からお慕いもうしています。ですから、どうか死んで下さい。大丈夫、痛くありません。愛する悠さまに苦痛を与えるような事はしたくありませんから。私も、すぐに後を追います」

ぞくりと、背中に危ないなにかが走ったような気がした。

「そして、今度こそそこで結ばれましょう？」

——これが妖艶で、危険で、殺意と執念と愛憎に溢れた少女との出会いだった。

第二項 しちゃったもん勝ち!! (後書き)

次回、この物語の核となる五箇条について触れていきます。

第三項 専制君主な妻？

——結婚奴隷五箇条。

第一条。夫が妻以外の異性に触れた時、妻は如何なる場合でも一時間夫に抱きつかなければならない。

第二条。夫が妻との約束を違えた場合、夫は妻の言うことを必ず一つきく。

第三条。妻が夫からの愛を感じなくなった、及び如何なる理由からでも、妻以外の異性と二人きりになってしまった場合。妻は夫を『監禁、調教』しても良い。もしくは『第二条』が適応される。

第四条。夫婦は絆を深めるため『寝室、入浴』を例外なく共にする。

第五条。夫が妻に対し『背心、浮気』をした場合、夫は命を賭して償わなければならない。って言うか死ぬ。むしろ殺してやるから覚悟しろ。

以下、注意書き。

——以上の五箇条に例外は一切なく、妻の自己判断にて決定され、下された決定は絶対である。

——妻のみ、五箇条の変更を許可されている。

——夫は五箇条、及び妻に対し『質疑、反論、反抗』は妻が許さ

ない限り不許可とする。

——代わりに夫は妻から永遠の愛を貰えるのだから、文句言うな。

この『結婚奴隷五箇条』は婚姻届にサイン、及び本紙にサインした時点で有効とする。

——以上、ここに『結婚奴隷五箇条』を制定す。

「——ですので、さようなら」

「ちょっと待てッ!!」

おいおい、何でこんな俺に不利っつか、小学生が好きな人に意地悪しちゃう、きやはっ。の超究極体な内容は?!

しかもなんだ? 『第五条』の『背心、浮気』した場合は命を賭してって。確かに、婚姻届にサインした後でやっぱりやめたなんて背心以外のなものでもないが、でもあれは勘違いで——ってそこじゃねえよ!!

「なあ、ここに『って言うか死ね。むしろ殺してやる』って書いてあるような気がするんだが、気のせいかな?」

「いいえ、気のせいなどではありませんよ? 私が書いたのですから。えへへ、素晴らしい内容ですよ。徹夜して考えた甲斐がありました」

やべエ、目がキレてやがる……。

どこを取っても理不尽且つ惨い内容にツツコミたいが、全部置いておく事にする。

「待て待て待て待て!! ちょっと相談しないか？」

「イヤですよ、注意書きにも書いてあるじゃないですか。妻が許可しない限り夫は『質疑、反論、反抗』は許さないって。ね？」

「ね? じゃねえよ!! んな可愛く言ったってこの内容には納得できねえ!!」

「いゃん、可愛いだなんてそんな……」

「いやそこかよッ!!」

「えへ、悠さまが私に可愛いと言ってくださるなんて……」

「いつまで飛んでんだ、早く戻ってこい!!」

頬を赤らめ、くねくねと身体をくねらせて照れているが、銃口はしっかりと俺を捉えている。

「んもう、話ならちゃんと聞いてあげますから大声出さないでくださいっ」

「人を寂しんぼみたいに言うなッ!!」

「……はい？」

——なぜキョトンとした顔で俺を見る?!

「ですが、可愛いと言われて少し感動したので二秒の猶予を与えましょう」

二秒? 二秒って短かつ!! なんも出来ないじゃんか俺。苛めか? 苛められてるのか俺は?!

朝早くから大人気のドーナツ屋に並んで、必死の思いでようやく自分の番になったかと思えば、突然割り込みされて風のように買って行った奴がいて。で、いざ俺が買おうとしたら「今日は先ほどので売り切れです。お帰りください」って言われるくらい苛めだぞ!!

「はい終了です。では——」

やっちまった——ッ!!!!

「可愛い可愛い可愛いチョコー可愛いんですけど!! 国士無双もびつくりするくらい可愛い!!」

「えゝ、そうですかゝ? えへへゝ」

よし、これで暫くは大丈夫だろう。ふっ、ちよろいぜ。

——一旦整理しよう。今俺は絶世の美少女に銃をつきつけられている。このままじゃ確実に天に召される事になるだろう。こんな理由で死にたくない。助かるには二つ。説得するか、彼女の結婚するか。前者は確実に無理だろう。後者については……まあ、まあまああとうしようもないな。

この少女には何の問題もなく、あるのは五箇条と、いきなり夫婦に引いてしまっているくらいだ。や、なくもないか。いきなり銃口突きつけて殺しますよーって宣言してるんだから。その上自分も後を追うと言う。

寝起きバズーカよりも質が悪い。

——って言うか息子が殺されそうなんだから助けろよ、バカ親ども。

「あなた……」「おまえ……」「あなた……」「おまえ……」とひたすらイチャイチャしてるバカ親を睨んでみるが、効果はない。元々期待なんか微塵もしてなかったが。

「よし、わかった！ お前と結婚する」

「えっ、本当ですか！？ 良かった、これで悠さまを殺さないですみますねっ」

キャピキャピと笑い、全身で喜びを表している。銃を懷にしようと、五箇条を大切そうにファイルへ戻した。

——とにかく、バツイチになるのを覚悟で結婚して、あの五箇条を破棄、そして離婚。この流れでいこう。これしかない。ああ、高校生にしてバツイチか……。

彼女居るの？ て訊かれたら、いやあ俺バツイチなんだあって答えにゃなんのか。どんな返した俺よ。

「ではでは、誓いの口付けを」

「さっき散々しただろうがっ!!」

俺、後何年生きられるかな……。

——甘かった。何がつて、俺にも良くわからん。ま、糖分の過剰摂取じゃない事は確かだ。ベルチェに出掛けるからと着替えさせられ、家を出て徒歩10分。辿り着いたのは、周りに建つ家よりも少し小さめの一軒家。二階建てのこじんまりとしたこの家の表札には、なんか知らんが『穂村』と書いてある。

うむ、見なかったことにしよう。

「なあ、まさかとは思うけど……」

「悠さまが何を考えてらっしゃるのかはわかりませんが、私達の新居です」

パンパカパーン、と口でファンファーレを言いながら、無理矢理腕を組んでくる。

「……」

さりげなく外す。

「えへへ」

強引に掴まれる。

「んにゃろ」

少し力を入れてみる。

「ふふ、ふふふっ。新婚さんだ」

それを上回る力でねじ伏せられ、やっぱり腕を組む事となった。
やわらかいモノが二つほどくっついてるのは、どうしたものだろう
か？

「はあ」

マジかよ……。二人で住む？ あり得ないだろ。こいつ頭おかしい
のか？ いきなり熱烈キスしてきたり、二人で暮らす家をちゃっ
かり用意しちゃってたり。用意周到っていうかバカ。それも、今世
紀最大規模のバカ。真性のアホ。最早新人類と言っても過言ではな
いはずだ。

夫を奴隷の如く扱う五箇条なんか作ってるしよ。闇金より質が悪
い。無理矢理逃げるとか、んなもん無効だと言ったら天に召され
るだろう。

マジで、何かの陰謀か？ むしろ「ハッハッハー、お前を不幸に
してやる」的な悪役が出て来てくれる方が嬉しいんだが。そした
らそいつをぶっ殺して終わりなのになあ。

「ああ、俺が甘かった」

「え？　悠さまって甘いんですか？」

興味津々と言った顔で、ベルチェが俺を見上げた。身長にさほど差はないが、大切そうに我が右腕を抱く姿はめっちゃくちゃキュートだ。こんな性格じゃなきやパーフェクトだろう。

「あの、悠さま？」

「ん？」

「舐めても良いですか？」

「……舐めても甘くないぞ？」

なんでわかったの？　と言いたげな表情を浮かべ、ニへへと含み笑いを溢す。

「そうですか。でもきつと、悠さまは美味しいんでしょうね」

「は？　それはどう言う意味で？」

「やん、そんな事早朝から訊かないで下さいよっ。はあはあ……」

お巡りさーん！！　なんかここにハアハアしてる不審人物居ますよー！！　まあ残念な事に俺の奥さんらしいですけどねー、はっはっはっ！！

「ごほん、改めて悠さま。末永くよろしくお願いします」

ぶんっ、と頭が風を切って腰の辺りまで下がった。金色の髪が太

陽の光に反射して、キラキラと輝いている。若干肩が震えているのは、緊張してるせいかな。

——ああ、そうか。こいつは、ベルチェは何にでも一生懸命なんだ。何事にも全力でやっちゃうから、行き過ぎるんだろう。でも、それでも加減って言葉を覚えてもらいたいと思ってしまうのは仕方がないだ。仕方ないで済ませたくないが。

「ベルチェ」

「はい」

顔を上げたベルチェは、俺に名前を呼ばれたのが嬉しかったのかニコニコしている。それくらいで喜ばれたらこっちまで嬉しくなるじゃねえかよ。

「ぶっちゃけ、お前の事よくわかんない。それにあの五箇条だって認めない。でもさ……」

「……」

ベルチェの喉が上下に動き、こくつと唾を飲み込む音がした。心なしに緊張した面持ちで、だが真っ直ぐと俺をそのブルーの瞳で見返してくる。

「お前のこと、嫌いじゃないから」

真っ直ぐで、ただひたすら純粋な好意。その返事にしては情けない返事だったが、実際そう思ってるのだからしょうがない。

でもそう——あくまでも『嫌いじゃない』のだ。

「ちよつと悠！ あんたそんな所で何してんのよ？」

金髪を振り乱し、俺より先にベルチェが反応した。俺達の目の先には、隣の家の前で、ガツと肩幅に足を開いて仁王立ちする少女が居たのだ。爛々と輝く眼光がベルチェを貫き、続いて俺を貫く。

「大河……」
たいが

——鬼のような形相をした、この少女の事が好きなのだから。

第三項 専制君主な妻？（後書き）

大河登場。虎で大河って凄くベタな名前ですけど、大河って名前なんだかっこいいですよー（へーへ）

五箇条については、この先色々な場面で活躍してくださるかと思います。いやあ、自分で書いててなんですが、ベルチェ黒いですね：（へーへ；）はら黒キヤラは初なので、ちよっとおかしな所があるかもしれませんが、目を瞑っていただければと思います。

第四項 独裁者と虎

「悠？ 今行こうと思ってたんだけど。なんでここに居るのよ？
しかも私服？ それにその子——誰？」

みずちたいが
瑞池大河。小学校からの付き合いで、所謂幼なじみ。奇跡のよう
な確率で、今まで小中高と全て同じクラス。活発そうなブラウンの
ショートカットに、170以上ある身長。バンツと突き出したブラ
ウスが嫌でも人目を誘う。本人は嫌がっているようだが、妬む女子
は多いらしい。ブラウンと瞳が鋭く俺を見据え、嘘偽りを許さな
いと輝きを増す。

顔立ちはベルチェのように可愛いではなく、美しいという言葉が
良く似合う。空手部主将なんて物騒な肩書きを持ったために、大河曰
く男にモテないとか。そんな事は全く無いのだが。

「いや、なんつーか……」

「悠さま、あの方とはどのようなご関係ですか？」

にっこり、と死を匂わせる笑顔でギリギリと俺の腕を極める。こ
んなにも笑顔が怖い人は大河以外に俺は知らない。

「えと、こいつは俺の幼なじみで瑞池大河」

「幼なじみ、ですか？」

探るような視線で大河をじっと睨み付ける。大河はそれくらいの視線にはなれているのか、ケロッとしていた。逆に睨み返す余裕まで見せている。

な、なんか、一番出会わせちゃいけない組み合わせだったかもしれない……。

「悠、この子誰って訊いてんだけど？」

一方の大河も、背筋が凍り付くほどの不穏な雰囲気を出していた。パキパキと鳴る指の音が、俺にはどうしても死へのカウントダウンに聞こえてならない。

「私はベルチェ・リナワーカーと申します。私の夫がいつもお世話になっているようで、ありがとうございます」

「ああ？」

ベルチェは表面上は凄くにこやかで、道行く人の頬が緩みきつてたるたるになるくらい可愛い笑顔を浮かべていた。だが、その中にいくつもの先制攻撃が混じっているのを俺は知っている。ベルチェ、恐ろしい子っ。

対する大河も、その事に気付いているらしく、ピクピクと形の良い眉が反応していた。額に浮かぶ青筋は、実は落書きでしたって落ちじゃないよな？ ものすごくそうであって欲しいのですが。

「夫？ あんたいつの間に結婚したのよ？」

大河は物凄く柔らかく言ってくれているが、これは暗に適當言う

とぶつ殺すぜよっていう意味。物騒ったらありやしない。

「だから――」

「いつって、生まれた瞬間から私と悠さまは運命の赤い糸で結ばれているんですっ」

ベルチェはふざけてるつもりはないんだろう。根は行き過ぎてしまっうほど全力で真面目なのだから。

まあ、大河からしてみれば明らかにケンカ売ってるように見えるよな。

「この子正気？ あたしが頭でも一発ぶん殴って戻してあげよっか」

「やめてくれ。んな事したら今度は永眠するから」

大河は去年の全国大会、直前の事故のせいで右腕を骨折。利き手を使えない状態で無謀にも大会に望み、決勝まで勝ちのこったバケモノ。良く言えば、すごーく強い人……人？

人かどうかはさておき、細っこいベルチェなんて一瞬で終わる。終わるとは、絶命という意味での終わる、だ。

「では瑞池さん。私達は愛の巣へと帰ります。ごきげんよう」

皮肉たっぷりの言葉を言い残して、グイグイと俺の腕を引いた。どっかの誰かが身体中から気を発して、今にも髪の毛が金髪になり逆立ちそうだったが。

「ちよっ、待てっ!!」

門をくぐった辺りでベルチェの進軍を止め、肩を掴んで引き離す。これじゃあまりにも大河への説明が足りてない。このまま学校へ行ったら、ボロ雑巾のようにされるだろう。もしくは軟体動物になるか。

——霊長類としてどっちも嫌だ。いくら奴隷でもそれくらいの人権はあるだろう、流石に。

「どうかなさいました？」

「なさいました？　じゃねェっ！　どういうつもりだ！　お前は俺の学園生活をぶち壊すつもりか!？」

「だって——」

ベルチェは目を伏せて、掠れるほど小さな声でぼそつと呟く。
ベルチェの容姿にぴったりな、夢くて、小さな小さな囁き。

——鼓動が、とくんつと跳ね上がる。

「あの人、悠さまに色目使ってるんだもん……」

「はあ？　色目って、大河がか？」

こくつと小さく頷き、肯定の念を表す。

「それは無いっ」

「何で言い切れるんですかッ!？」

珍しく声を荒げて俺に掴みかかって来た。彼女は、底の見えない深い青の瞳に、涙を一杯ためて鼻先がくつきそうなくらい顔を寄せてきた。ふわりと鼻を擦る甘い香りに、一瞬意識を持って行かれる。

「あいつはさ……空手が好きなんだ」

「は？ それと何の関係が？」

俺だって最初はそう思った。それと何の関係がって。あれは丁度大河が全国大会から帰って来た頃の話。

大河は一通の手紙を持っていた。しっかりと封のされた、真っ白な封筒。照れ臭そうに笑って見せ、ラブレターなんだと俺に言った。

もちろん、俺はどうするか訊いたさ。そしたら大河はあっけからんと言いつつ放ったんだ。

『今は男なんかにかまかけてる暇なんてない。空手があたしの恋人』

いや、だからこそ俺も告白出来ずにいる訳だが。もともとそんな度胸、悲しい事に持ち合わせてないし、空手で汗をかく大河を見ていると俺の存在は邪魔にしかないんじゃないか、なんて思えてくるから滑稽だ。俺にもう少し強引さがあれば現在も変わってたと思う。

あの時はどうしようもなく笑えたんだ。バカみたいだった。一人で緊張して、一人で悩んで。一人相撲も大概にしろってんだ。

——そう、大河は最初から俺の土俵には居なかったんだ。

「あいつには空手が命。野郎には興味ねえよ。それにあいつ、自分より強い人とししか付き合わないって言ってたし」

大河に正面からぶつかって勝てる男が、高校生にいるだろうか？
女子と言えど、片腕で全国を決勝まで勝ったバケモンに「勝てる」と豪語出来るほどのアホは居ないだろう。

「それにな、相手が俺ってのもありえない」

なんせ、うちのバカ母がガキの頃から「悠をよろしくね」なんて一日に20回くらい言うもんだから、こういうのには無駄に厳しいのだ。

「……」

ベルチェはまだ納得のいつてない顔だったが、渋々俺から離れてしゅんと肩を落とす。

「私、瑞池さんに謝って来ます。確かに初対面の方に対して礼儀がなっていないかもしれませんから」

にへっと健気に笑って、トテトテと敷居を後にした。

「……別に謝る必要はないんじゃない？」

自分の口から漏れた言葉が、虚しく空気に溶け込む。

――何処かで、キレイなソプラノが大声で謝っていた。

第四項 独裁者と虎（後書き）

大河についてちよつと紹介しました。つか、片手で全国二位って…
：普通に人じゃないですね。この設定じゃないといけない理由が
あったりなかったりあったりあったりするんですが、まあ気にしな
いでください。

だって、あんな五箇条があるようなムチャクチャな小説ですから（；
「――」

第五項 制裁は顔面パンチ!!

「ふう、謝ったらすっきりしましたっ」

そう言って戻って来たベルチェと共に、新しい我が家となる家に乗り込む。なんか流れでここに住む感じになってるけど、抵抗しても無意味だと思うので俺は早くも白旗をあげた。

まず入って目についたのが、小さな玄関。おまけのような収納スペースがあって、玩具の家の玄関を大きくしたような玄関だった。

細い廊下を進み、一つ目の角を右に曲がると木製のドアがある。そこを通り過ぎて更に進むと、二階にあがる階段、階段の奥を左に曲がれば浴室、トイレがあった。

二階は後で見るとして、とりあえずさっき見つけた木製のドアノブに手をかける。

「そこはリビングですよ」

俺の後ろで仔犬のように尻尾をパタパタと振るベルチェが、柔らかな笑みを浮かべた。

「……結構良い感じ」

リビングは和室で、昭和の雰囲気があった。多分、わざとこんな作りにしたのだろう。部屋の中には、六人ほどで囲えるちゃぶ台

が設置されている。

「あ、その下の畳は堀になっていて、冬にはこたつに早変わりするんですっ」

エッヘン、と胸を張るベルチェをスルーして奥にあるキッチンを覗く。こちらは昭和なんて雰囲気吹き飛ぶほど、現代的なキッチンだった。

「もしかして、二階も和室か？」

「あ、はい。二階には三部屋。一つは私の書斎に使わせて貰っているので、正確には二部屋ですね。どちらも和室ですが、お嫌でしたか？」

不安そうに覗きこむベルチェの頭にぽんと手を置いて、鮮やかな髪にさっと指を這わす。

「いや、悪くない」

趣味は良い。ベルチェの事だから、どんなキテレツな部屋かと思えば案外普通だ。

「で、俺の部屋は？」

「結婚奴隷五箇条——第四条」

はい……？

「夫婦は絆を深めるため『寝室、入浴』は例外なく共にする——で

す。恥ずかしいですが……悠さまとならやぶさかではありません」

胸の前で手を合わせて、首まで真っ赤に染め上げる。つかそんなに恥ずかしいならそんな条約作んなやアホかお前は。

「いやいやいや、それは流石にマズイだろ」

主に俺が。寝室なら百歩譲って、部屋の隅と隅で寝れば良いとして入浴って……水着か？ 風呂で水着着用か？

「ですが例外なくと——」

「なら水着、もしくはバスタオルの着用を希望する」

「そんなのは邪道です。日本男児たる者、お風呂は素っ裸で入るのですよっ」

お前は女だ。しかもその目と髪で言われても、説得力なんざありやしない。

「なら俺は近くの健康ランドで温泉通いする。一緒に来たければ来るが良いさ。じじいどもに裸見られても良いんならな」

「うぬぬっ、さすが悠さま。なんてえげつない策略」

監禁とか調教とか平気で書く人に、えげつないなんて言われたくありません。

ベルチェはギリリと奥歯を噛み締めていたが、力が抜けたかのように、はあっと溜め息を吐いた。

「……わかりました、水着の着用を許可します。でも、一緒に入るんですからね!？」

相当悔しかったらしく、うつすらと目に涙を溜めて俺を睨み付けた。ま、こいつが凄んだ所で可愛いくらいにしか思えないが。

——それにしても、入浴すらベルチェの許可が必要とは。予想以上にやっかいだなあの五箇条は。

さっきはさらっとしか……って言うか五条しか読んでなかったから、後でしっかり読んでおくか。今後の人生のために。

浅浜学園の三年二組。俺が今居るクラスがそこだった。まだ新学期が始まってすぐだと言うのに、初日から遅刻。どれもこれもベルチェのせいである事は確かだが、今はそんな場合ではなかった。

家を出る直前、浮気したら殺すとのお告げをうけつつ、ベルチェから結婚奴隷五箇条の内容が書いてある紙を貰ったのだ。

まあ、ベルチェはがここに居る訳ではないがあいつの事だ、盗聴機とか普通に仕掛けてそうだから警戒するにこしたことはない。

気をつけるべきは二つ。女子と身体の一部を触れ合わせない。これを破れば何か一つお願いを聞かなきゃならないとか。どんな事言われるかわかったもんじゃない。

二つ目は、女子と二人きりにならないこと。こっちは三途の川に片足を突っ込むような罰が待っている。一言で表すと、今は平成です。簡単に言うと、監禁、もしくは調教されるのだ。いったいどんな事をされるのやら。怪しい薬とかか？

しかも、死んだほうがマシだなんて言えば、ベルチェは愛が感じられないと言って更にヒートアップするだろう。

「なに難しい顔してんのよ」

「んん？ ああ、大河か」

視界の端に映った影に顔を上げると、前の席に座る大河がバカにしたような目で俺を見ていた。いつもそうだが、今日はいつにも増してイラついてそうだ。

「今朝の子の事？　なんか大声でごめんなさいとか言ってたけど、なんなの？」

「なんなのと言われても……、俺にも良くわからん」

突如として結婚させられ、しかも謎の五箇条にサインさせられていたんだ。答えようがなかった。正直に、妻だ、と言えば手っ取り早いが彼女には絶対に言いたくない。

「良くわからんって、ベルチェさんだっけ？　なんか妻とか言ってたけど……」

「……」

うぐっ、鋭い。いや鋭いっつーか誰でも妻だなんて言えば気になるだろうけど。

顔を伏せつつ、そぐつと大河の様子を窺ってみる。大河は目を細くして、いかにも疑っていますといった表情をしている。

「悠？」

「いやなー」

「なによ？」

どうしよう、どうすれば良い感じに嘘でもなく、本当でもない誤魔化しが出来るだろうか。

——考えろ。考えても無駄っぽいけど、考えるんだ少ない脳味噌で！

「あいつは、そう……」

「脳に障害があるとか言わないわよね？」

「な、うっ——」

「はあ……」

大河は全てを悟ったように溜め息を吐き、俺の額を拳で軽く小突く。

「いつ? いつの間に結婚なんか……。悠って確か今日で18よね?」

「……さっき。や、正確には大河と会う直前」

「直前って、めちゃくちゃ早朝じゃない」

大河は絶対信じてないが、本当なのだからどうしようもない。俺だって何かの冗談か、夢か幻覚だと思ってたんだから。本気で病院にゴーしようと思っていたのだから。

「……えっと」

俺の表情から何かを読み取ったのか、途端に大河が顔色を変える。

「ホントに?」

「ああ」

「マジで?」

「マジだ」

「……」

教室が喧騒に包まれる中、俺と大河の間に微妙に重苦しい沈黙が訪れる。大河はパチパチと瞬きをして、何とか今起こっている事態を理解しようとしていた。

はあ、こいつだけには言いたくなかった。好きだからとかそんな

んじゃなくて――。

「……鉄拳制裁!!」

「ブホ――ッ!？」

自分が少しでも氣にくわないと、実力行使に出てくるからだ。おかげで俺の顔面は強靱になったが、こう毎回毎回日本で一番強いであろう女子高生に殴られる俺の身にもなってほしい。

「あたしはあんたをそんな風に育てた覚えはないっ!!」

――俺だってお前に育てられた覚えはねえよ。顔の皮膚以外は。

第六項 薄幸の少女

結局、大河に全てを説明させられてしまった。仕方ないだろ、俺の机が大河の馬鹿力で悲鳴をあげてたんだから。

——中学校の卒業式の日、俺は初めてラブレターという夢の品物をいただいた。しかも一気に三通も。この頃は大河を異性として好きではなかったし、ラッキーくらに思っていたのだが、大河にラブレターを貰ったのがバレたのだ。

昔から色恋沙汰には厳しい大河だから、なんとか隠し通せるようにしていたのが逆に挙動不審を呼んだらしい。まあ、くれた相手が好だった訳じゃなかったし、もともと断るつもりだったのだが。

結果。中学最後を共にした机を素手で破壊。ラブレターを三通は不純だと言って焼却炉に投下。不純ではないと思う、との意見を言ったら大河の鉄拳で鼻血の大フィーバー。

涙なみだの卒業式が、俺だけ鼻にティッシュをつめた間抜けな卒業式に終わったのだった。

「……なんでサインしたのよバカ」

「なんでって、説明しただろうが」

「もうっ、まぬけ！ アホ！ クズ！ あんたなんか東京湾に沈められちゃえー！」

事と次第によっては、マジでベルチェに沈められそうだから冗談には聞こえない。

大河は落ち着くために深呼吸をしたあと、キッと再び眼光を尖らせた。

「どうするつもりよ？　その、き、キスまでされちゃったんでしょ？」

——ああ、とびっきり濃厚なの一発な。

心の中で返事をしながらも、そこだけは脚色してあるので言葉にはしない。大河は顔を真っ赤にしながら俺を睨んでいる。

まだメドゥーサの方が可愛げがあるだろう。石化？　甘い甘い、大河なら視線を合わせただけで殺せるな。

「って言うかなんで拒まなかったのよ！？」

「だから、ロープでぐるぐる巻きだって言っただろ？」

「……ふんっ」

「ぐへっ」

中指の関節を尖らせた牙拳が俺の額に直撃する。額の骨が陥没するかと思っただが、触ってみる限りではどうやら無事のようにだ。全く、そんなに俺をピカソの絵みたいにしたいのかこいつは。

ズキズキと痛む額を擦りながら、握りしめた拳をいまだに震わせる大河を精一杯の気力で睨みつける。

「殴んな！ めちゃくちゃ痛いんだぞ！？」

「うっさいうっさいうっさい！！ あんたがあんまりにも間抜けだから、ショック療法で治してやろうかと思ったのよ！！」

「お前のショックは強すぎなんだよ！ 治るどころか悪化……悪化ってなんだこのやろう！！」

「自分で言ったんでしょーが！！！」

あ、そういやそうだった。

一通り罵り合って、教室がシーンとしているのに気付き声を潜める。大河の頬が赤いのもそのせいだろう。

バツが悪くなったのか、ふいっと自然な動作で互いに視線を外し、しばらく待ってから再び合わす。ふむう、なんだかいけない事をしている気分だ。

「と、とにかくどうするつもりよ」

「どうするもこうするも……どうしようもねえ」

断れば死、受け入れれば永遠の束縛。どっちも嫌だ。絶対嫌だ。死んでも——いや死ぬのも嫌だ。かと言って永遠の束縛には監禁調教のオマケ付き。ベルチェの性格からして、冗談では済まないだろう。多分、本人も冗談のつもりなんてこれっぽっちも無いはずだ。

真性のアホだからな。いつ、ズブリと背中を包丁で刺されるか分かったもんじゃない。いつそ背中に鉄板でも仕込んでおこうか。

「なっつつさけないわね」

「ためるなためるな。そこまで情けなくはないだろ」

「ふんだ、知らない女に騙された奴が何言っても無駄なんだから」

確かにその通りだから何も言えない。無理に言い訳染みた事を言えば、男のくせにと鉄拳が飛んでくるのだろう。

「ちょ、ちょっと大河？ どうしたの？ 手震えてるよ？」

それは怒りで震えているのだよ。

大河と良く話している朝賀が、背後から大河の肩にぽんっと手をおいた。朝賀^{あさかさち}幸はショートカットのおさがが特徴的で、小動物のよくな仕草のせいかクラスの女子に可愛がられている。所謂マスコットキャラ。性格は典型的なイエスマンで、よく大河にうじうじするなど怒鳴られている。そう、大河にとって怒りと手はリンクしており――。

「黙れ」

「いだっ!!」

大河は基本的に男女問わず手が出るのだ。弾けるような裏拳が大河の肩越しに朝賀に炸裂する。

「びえええん!! 大河に殴られたああッ!!」

「はいはい、よしよし」

鼻に直撃した朝賀は、遠くから見守っていた友達の輪に逃げて行った。一日一回はこんな光景を見ているような気がする。

哀れを通り越して、呆れてきているのだろう。浅賀フレンズも当たり前のように受け入れ、当たり前のように慰めていた。当の本人達からすれば、ちょっとしたデジャブだろう。

「いつも思うんだが、かわいそうじゃないか？」

「スキンシップよ」

とんだスキンシップもあったもんだ。

しれっと言いのける大河の奥で、朝賀は涙を一杯溜めた怨めしそうな目で大河を見ていた。

「？」

俺の視線に気付いた大河が後ろを振り向くと、朝賀はさっと目を逸らす。

哀れだ、今度アメをあげよう。

「授業始まるからここまでにしておくけど、昼休みは覚悟しときなさいよ」

それだけ言い残して、大河は席に戻る。戻るっていうかただ前を向くだけなんだが。

「大河、何でぶんぶんしてるの？」

「寄るな」

「ふぎゅっ」

懲りずに寄って来た朝賀に、本日二度目の裏拳が炸裂。衝撃で背中がのけぞっていた。女子にはそれなりに手加減はしているようだが、それでもかなり痛いだろう。

朝賀、君は確実に俺の次に殴られた回数が多いよ。可愛いそうだから今度アメを二つあげよう。

「うええええん！！ またぶったあああっ！！！！」

「ピーピー泣くな、ウザイから」

「大河がうざいって言ったああああっ！！！！」

学習しようよ、朝賀。

「はあ……」

こんなに授業が恋しいと思うのは人生で初めてだと思う。あと一回、あとたった一回のチャイムで地獄の昼休みが幕を上げる。いたい何をされるかわかったもんじゃない。まさかとは思うが、人類から転職じゃないよな？ 流石にそこまでされると、ただでさえ最近薄れてきた生きる希望が深海へと沈んでいく石ころのように消え去っていくのだが。

「では、今日はここまで。あとは各自で復習するように」

スキンヘッドの見た目ヤクザな地理担当教師がさっさと教室を出て行った。それと同時にチャイムが鳴り響く。

どうしようかなんて思案してる暇はない。何故なら大河は俺の前の席なのだから。

「さて悠々？ さっきの続きとしゃれこみましょうか？」

「回避は？」

「不可！」

バンツと叩きつけるように俺の机に弁当を置いて、くるっとイスを反転させる。大河の昼飯を食うのはいつもの事だが、大河の機嫌が悪い時は出来るだけ回避してきたのだ。

しかし、今日は絶対に無理だった。家に帰った所でバカ母が大河は簡単に家に入れやがるし。もう一つ、ベルチェの家なら——ある意味こっちはもっと危険かもしれない。

だってあの隣の家が大河の家なのだから。つまり、どんなに足掻

きもがこうが意味を成さないと……そういう事っすか。まあ、ベルチェの奴が他の女を簡単に家にいれるとは思えないってのもあるけど。なんだかお隣さん同士で戦争が起こってしまう気がしてならない。小規模ながらも、俺からすればいつ犠牲者が出るかわからない——主に俺。

「で？　ベルチェさんとはどこで知り合ったのかな？」

愛想の良い笑顔が逆に怖い。

「いやそれがさ、ベルチェの奴『お前の事知らない』て言ったら『知ってる』て答えたんだよな」

「知らないことを、知ってる？　は？」

頭上にハテナマークを浮かべる大河の気持ちは良くわかる。俺は知らないのに相手は知ってる、そんな一方通行納得出来る訳がない。

「もしかして忘れてるだけなんじゃ？　ほら、完全に忘れてるとしたら、それは知らないって言ってるようなものじゃない？　彼女が言ってるのは、あんたが自分を忘れてるのを知ってるって意味なんじゃないの？」

「……そうか？」

どちらかと言われれば大河の言ってることの方が、理解出来るような気がする。でも、そうじゃないと言われればそうでもないような気がするし。

ようは考えたって無駄って事だな。

「ま、考えたって無駄ね」

大河も俺と同意見らしい。彼女は弁当をつつきながらほっと息を吐いた。話が一段落したらしいので、俺も買っておいいたパンにかぶりつく。

うん、味気ない。買っておいでなんだが、非常に面白味のない味だ。

「ねえ……」

「んあ？」

大河は弁当に目を向けつつ、呟くように声を絞る。カチカチと箸が弁当箱に当たる音が、やけに大きく聞こえた。

「ベルチェさんってさ、可愛いよね」

「ん、ああ。見た目はな。でも性格は最悪だぞ？ 何がと言いたくないから訊かないでくれな」

見た目が可憐で弱々しい少女だけに、あのミスマッチとも言えるギャップが異常に目立つ。外見で勝手に判断してる俺が悪いんだが、もう少し自分を抑えてもらいたい。特に、ところ構わず発情したり、自分好みの男の子に調教もとい教育しちゃえくきはっ、みたいなテンションを。

あれさえ無ければ、俺だってこんなにも鬱にはならないのだ。人格とさよならするか、肉体とさよならするか。これぞまさに究極の

選択。魂を守るか肉体を守るか。どこぞのファンタジーな住人だ俺は。

「そう、かな？　なんかあたしにはさ、あの子は一生懸命なだけなように思えるんだよね」

「まあ確かに、それはわかるけど」

「悠って、一生懸命な人好きよね」

——そんな事大河に言っただろうか？　一生懸命な奴とか努力してる奴とかを嫌いになる理由なんてない。そういう奴が好き、つまりタイプかどうかと訊かれれば。

「……」

ちらっと大河を見してみる。とりあえず今好きなのはこいつな訳で、大河を基準に考えてみるしかない。

——ああ、いい。

「そうだな。ベルチェは苦手だが嫌いじゃねえし」

「……も、がん……る、けどな」

ほとんど空気に溶けてしまっているような、小さな声で何事かをぶつぶつとぼやいていた。良く聞き取れなかったが、特に気にする事でもないので放っておく。

「そういえば朝どうする？　あたしはどっちでも良いけど」

「んゝ、でもベルチェがなあ……」

「あんた絶対一人じゃ起きれないでしょ」

つか、多分寝られないと思う。色んな意味で。結婚奴隷五箇条によると、寝室は一緒にしなきゃならないらしいし。律義に従うのもどうかと思うが、逆らえばマジで殺され兼ねない。あいつの目はいつも本気だからな。冗談だったらどれほど嬉しい事か。宝くじ当たるよりも嬉しいはずだ。当たった事無いから分からないが。

「――多分、大丈夫だと思う」

「……そつ。なら良いけどさ。あたしも最近ちょっと面倒になって来てたのよね」

今までは良く朝が弱い俺のために大河が起こしに来てくれていたのだ。や、頼んだ訳ではないし大河から始めた訳でもない。

小学生の頃、大河が学校に行く途中で俺の家に寄って行く時必ずと言って良いほど俺は寝ていたのだ。

それでバカ母は何をトチ狂ったのか、大河を起こしにやるようになって。何故かそれから大河が起こしにくるようになったんだ。

ま、最近じゃチャイムを連打するだけ連打して風のように去って行くのだが。

「あ、そうそう」

「なんだよ」

何かを思い出したかのように大河はニッと笑って、箸でビシッと俺を指す。

「――襲うなよ？」

「誰をだッ!？」

こっちは幼なじみ以上になれなくてちよっただけ悩んだりしてるのに、大河はまるで気にした様子がない事実にくゅッと胸が痛んだ。

……やっぱ、無理なのかなあ。大河はモテないとか言ってるけど、実際はすげーモテるし。

第六項 薄幸の少女（後書き）

幸さん登場。自分でも結構好きな人です。なにより書いてて楽しい（〇ー〇）ベルチェも大河も楽しいですが、幸が一番楽しいかと（^^；皆様にも気に入っていただければ嬉しいです。

第七項 蒼い瞳の仔ウサギ

午後の授業が終わり次々と部活な家路につく生徒が続出する中、俺はイスに座ってぼーっと外を眺めていた。

どうにも帰る気になれない。家に帰ればベルチェが待ち構えてるはずだし、バカ母の方に行けばベルチェに愛が感じられないと言われ監禁されるのがオチだろう。ああ、なんて不幸な俺。

「おっす、悠。まだ帰んねえのか？」

「……なんだ、雄也ゆうやか」

ニカッと俺の机の前で笑うスツキリした顔立ちの男子生徒——永井雄也は、サッカー部のキャプテンにして、チームの司令塔。モテ男とは雄也のためにあるような言葉であり、ラブレターを貰わない日の方が少ないらしい。

爽やかな笑顔と、試合中の凛々しい顔のギャップが人気のようで、男の俺から見れば賛同しかねる意見ではある。

それに何でこんなクラスの人気者が、地味男な俺に声をかけてくるのかも良くわからん。雄也曰く、俺が良い奴だからだとか。良い奴って漠然と言われると、なんだか馬鹿なされているようで腹立たしいのは俺だけだろうか。

「ははっ、お前くらいだぜ？ オレが声かけてそんな適当な反応す

るのは」

「自惚れんな畜生め。お前なんか、その他大勢の野郎と変わりねえよ」

「かつ、最もだ。ちょっと調子に乗りすぎたな」

雄也はニヤツと白い歯を見せ、俺の机をバシバシ叩いた。人の反応がそんなに面白いのだろうか？

世間一般にイケメンと呼ばれる人間の思考回路は意味不明だ……。しかもこいつ、ものすげーアホな性格してるし。

「で、なあに黄昏てんだ？」

「誰が。ただ帰りたくないだけ」

「ふーん、親とケンカか？」

俺が首を振ると、雄也は怪訝な表情で首をかしげる。ぼんやりと口を開け、思考の迷路に入ってしまったているようだが、こんなアホ面のどこに魅力を感じるのか俺には理解出来ない。

……女心って、難しいな。ま、わかってるんだったらこんなに苦労してないだろうけどよ。

「雄也は？ 部活どうした」

「ん？ ああ。また来ててさ」

大きなスポーツバックから一枚の封筒を取り出す。ハートマークのシールで封をされたそれは、窓から流れてくる風でひらひらと踊っていた。

——また貰ったのかよ。飽きないねえ女子も。

つかず離れずを保っている、俺と女子達の距離感からすれば、高校生活において、ラブレターなど一生拝む事はなかったと思う。そういう意味では有難い存在……なのか？

「んで？ 何回目？」

「この子は……四回目」

雄也は基本的にラブレターを貰っても、返事うんぬんを全くしないのだ。何故だかはわからないが、そのせいで同じ人間から何通もくるんだとか。自業自得のくせに、同じ奴からくるとげんなりする雄也の優越感が妬ましい。俺も短い人生一度で良いからやってみたいもんだ。

「いい加減返事してやれよ、可愛いそうだろ」

「可愛いそう、ね。オレは手紙一通程度で伝えられる気持ちだが、本当の『好き』だとは思わないがな」

一瞬だけ真剣な眼差しになったが、すぐにいつものアホ面になって俺の肩をポンツと叩く。

「ま、お前も誰かに告白すんなら手紙なんていう邪道じゃなくて、正々堂々といくんだな」

「……覚えとくよ、モテ男くん」

フツと笑った雄也は、カバンを肩に担いで教室を出て行った。

「――正々堂々、か。それが出来れば苦労しないんだけどな。案外、ラブレターなんてこっ恥ずかしい物書いてる奴も同じ気持ちだったり……」

窓から校庭を見下ろし、走り込みをしている空手部に目を向ける。トラックをぐるぐると回る列の先頭、一際声を張り上げる少女がそこには居た。

「……大河」

窓に手の平を合わせ、重い息を吐く。硝子に触れた息は、季節が季節なだけに白く曇らせる事はなかった。あれをキュキュツてやりの好きなんだよなあ、キュキュツて。

「ん？」

走り込みが終わったらしく、空手部は中央に集まりストレッチを始めた。男女合わせて大勢居る中、一人の少女が校舎を見上げている。

――紛れもない、大河だった。

「……」

小さく手を振ってみる。

「――!!」

大河は遠目でわかるほど驚いたような顔をしていたが、しばらくするとここからでもわかるくらい満面の笑みで手を振り返してくれた。それこそ、腕を旗に見立てて大きく振り回すように。

「……」

こんなしょうもない行動が、どれだけ人をドギマギさせているか本人は気づいているのだろうか。

――心が弾んだのは、そう言う意味じゃ必然だったんだ。

重い重い足を引きずりながら、家路へとつき新居の前で立ち尽くす。どうしても入る気にはなれない。それ以前に自分の家だとは思えないのだ。

しかも――隣は大河宅。今朝ばったり会ったのだって偶然じゃなくて、あの時間にこの場所に居れば、学校へ行く大河に遭遇するのは当然。遇、怒、殴、死、滅。一連の動作が目には浮かぶようだ。悲しい事この上ない。

「はあ、何で帰るのにここまで鬱にならにゃならんのだ」

納得出来ない。どっかで嘲笑う神のくそ野郎に一発かましてやら

なきゃどうにも収まりそうにない。

いや、こんな事を考えてるから天罰が下ったのかもしれないが。だからと言って、てめえみたいな性悪に祈ってやるものか。

溜め息混じりに門を通り、ノブに手をかけて一気に開ける。

「えぐっ、えぐっ……」

「……ふんっ」

なんか変なのが見えたような気がしたので、力一杯ドアを閉めた。

い、今のはいったい……？ どころなくベルチェに見えたような気がしたんだが。しかもなんか玄関に正座したまま号泣してたような。ま、まさかな。いくら変人職を極めたあいつでもそこまで変……変って言葉で片付けたくないけど、頭のネジが九割緩んでガツタガタの頭蓋骨でもまさかそこまで性根はアホじゃないだろう——と思う俺がここに居る訳で。

「……よ、よし」

震える手で再びノブに手をかけ、思い切ってドアを開け放つ。

「悠さまあああっ!!」

「——くぼっ」

何者かって言うか、涙と鼻水で顔をぐしゃくしゃにしたベルチェが飛び付いてきた。腹部にぶつかってきた衝撃で、出ちゃいけない

モノが出そうになったがなんとか飲み込む。食道をどうやって通ってきたのかは謎である。

「ざみじがっだですう〜〜！！！」

「こ、こらっ、服に顔を擦り付けるな汚れるだろ！！」

ベルチェは摩擦熱で発火しないかと心配になるほどの速さで、ゴシゴシと俺の胸の辺りに頬擦りをしていた。

「一人は寂しいです、私は悠さまと二人が良いです……」

その仕草があまりにも必死で、無垢な愛情からくるものだとわかり——わかってしまい、何も言えなくなってしまった。

いや、ただ単純に可愛いと思ったのだ。背中の手を回し、ギュッと抱き締めたい衝動を抑えるのに必死で、汚れるとか恥ずかしいとかそんなちっぽけな事に気を回してる余裕が無かったただけなのだ。

「ベルチェ」

ベルチェの震える肩にそっと手を置き、反対の手で頭を撫でる。

「お前は——っ」

自分が今何を口走りそうになったのかわかり、慌てて口を一字に結ぶ。なんだか普通に話すように『可愛いなあ』と言いそうになってしまった。今のベルチェはそれだけ可愛らしく、愛嬌に溢れている。見ていて恨めしくなってしまうほどに。

「……悠さま？」

不思議そうに見上げるブルーの瞳と目が合ってしまい、咄嗟に目を逸らす。

ヤベエ、クるなああつ。

心臓にバキyunバキyunどころか、ズガンズガンとアハトアハトレベルの鼓動が押し寄せる。痛いというより、もう破裂しそうだった。血管は膨張し、血の巡りがドクドクと急かすように送り込む。

——無駄な抵抗は止せ。抱き締めたいなら抱き締めてしまえ。妻なんだから別に良いじゃないか。大河？ なにそれ美味しいの？

内蔵どもの叫びが理性を蕩けさせる。腕は石のように固まり、ふわふわと宙をさ迷っていたが、親鳥が巣に帰る如く金糸に包まれた小さな頭に収まった。

「どうかなさいましたか？」

「い、いや、なんでもない」

動揺を誤魔化すべく、きよんとするベルチェの髪を優しく撫でる。

「えへへ」

彼女は顎を撫でられた仔犬のように目を細めた。誤魔化すどころか、気持ち良さそうな表情に俺の胸はドッキンドッキンするばかり。

っーか、なに自然に頭撫でてんだ俺は？

あまりにも犬チックなベルチェに、何事もないように手が出てしまった。基本的に動物好きな俺からすれば、当たり前前の行動なのだ。これを言うと言われるのは目付きが悪いせいだろう。

「悠さま？」

「ん？」

「愛していますよ？」

「うっ、あ、おう……」

今朝までは何ふざけた事言ってるんだこいつは？　なんて思ってたのに、今のは酷く胸に突き刺さった。

そういや、今日はベルチェの事ばかり考えてたなあ。

ぐるぐる、と。身体のある渦が、乱れ始めたような気がした。

第七項 蒼い瞳の仔ウサギ（後書き）

今気付いたのですが、七話までできていまだに一日たっていないですね（T|T）プロローグが長いのは毎度の事ですが、いい加減になおさないと先に進まない…（―――；）
まあ、なんとかなるか（へーへ；）

第八項 お約束な妻

二階にある俺の部屋……ってか、俺とベルチェの部屋に戻ると、いつの間にやったのか我が家にあったはずのタンスがちやっかり部屋の隅に置かれていた。服もぼちり入っていて、微妙に気味が悪い。

「……なんだかなあ」

某有名なセリフが口について出る。俺用タンスの隣にベルチェのらしきタンスと、化粧棚。あれだけ接近していたのに化粧をしていたのがわからなかったのは、相当なナチュラルメイクだったからなのか。

——俺、ここで寝るのかあ。

中央にはダブルベッドが一つ。一つ、一つだけ。つまりアレか？ 同じ部屋だけではなく、同じベッドで寝ると？ ベルチェさんはそうおっしゃっているのでしょうか。

「悠さま？ お着替えは終わりましたか？」

「ん、おう。もう良いぞ」

ガチャツと控え目にドアを開けて、照れ臭そうに笑うベルチェが部屋に入ってくる。

ラベンダーの香りが——うおぷつ。

おそらく、と言うか確実にベルチェからだろうけど。色んな意味で今はヤバかった。俺だって高校生しかも彼女無しだったのだ。いや、今でも彼女いない歴を訊かれれば18年と答えるが。

だってベルチェは彼女とかのステップをいくつもとばして、いきなり妻だし。なんかめっちゃくちゃ、色々と複雑な意味で誘われてますしね俺ってば。

18の男子がこんな美少女の二人きり。しかもなったばかりとは言え、曲がりなりにも夫婦なのだ。こう、危うい何かが込み上げてくるのも否定出来ない。

ベルチェがこんな細っこくて、可愛くなきゃこんな気持ちにもならないのに。

人間、なんだかんだ言って容姿は大切なんだ。

「夕御飯が出来ましたが、食べます?」

ベルチェは後ろでに組んで、つけている薄いピンクのエプロンをほれほれと強調していた。ニヤニヤしてるのは、可愛いとか言ってもらいたいからだろう。

悪いなベルチェ。現実はそんなに甘くないのだよ。

「お前が作ったの?」

「……………そうですよ」

不満たらたらだったが、唇を尖らせながらも、めげずにまだエプロンの強調をやめない。それよか更にエスカレートし、意外に大きい胸をグイグイと突き出すようにして、なんとか見てもらおうと頑張っている。保育園で書いた似顔絵を誉めてもらおうとしてる幼児のようだ。

可愛いな、ベルチェ。

仕方ないから心の中で誉めてやる事にした。ベルチェに伝わらないのは惜しいが、俺はテレパシーじゃないので諦めてもらいたい。

「そっか。なら食おう、腹減った」

「……」

愕然とした表情で石化でもしたように、ピシッとベルチェの動きが固まる。

そ、そこまでショック受ける？

「むむ」

あまりにも動かないので頬をつついてみる。プニプニしていて気持ち言いけど、やはりベルチェは動かなかった。

なんかここまで動かないと逆に怖いな。しかも今にも死にそうな顔のまま固まってるしよ。

「……ふ」

今度は耳に、優しく息を吹き掛けてみた。

「……っ」

ピクッと肩が反応し、若干頬に赤みがさす。が、まだ固まったまままだ。

「強情なやつめ」

しばらく吐息を吹き掛けてみる。ピクピクと肩や頬、それに腰の辺りが反応しているがそれでもベルチェは再起動しない。既に顔は湯気が出そうなほど真っ赤でも、どんなに身体がピクピク動こうがベルチェは固まっていた。

まさか、これは褒めるまで動かないとか？ 無視されたのがそこまで胸に突き刺さったのか？

「……エプロン、似合ってるぞ」

自分にしか聞こえないほど小さな声で、独り言のように呟いてみる。

「えへへ、そうですかあ？ くふふ、ふふふっ」

ふ、復活した！！ しかもなんかすげー笑顔だしっ。

両手で口を押さえているが、零れる笑みは止まる所を知らない。ベルチェは「ふふ、ふふふ」と静かに笑って、目を細める。

「じゃあ、下で待ってますから早く来て下さいね。早くですよ」

物凄い上機嫌で、鼻歌混じりに部屋を去って行った。身体が弾んでいるのはスキップしているからだろう。ただ『似合ってる』の一言でそこまで喜ぶとは……もしかして操作しやすいとか？

ベルチェの操縦法がわかればそれなりに五箇条を無効にする事が出来るはずだ。勝機はここにあるっ。

「もしかしたら、解放も有り得るかもしれない……」

ようやく見い出せた光は、儚いほどに小さな光だったけど。無いよりは増しだと思いうしかない。

大河の事もあるし——やるっきゃねえな。

一階の居間に向かい、テレビなどの家具がほとんどない部屋でベルチェが料理を運んでくるのを待つ。ちゃぶ台以外、ここまで物がないというのも逆に落ち着かないものだ。

まあ、超絶美少女と二人きりの時点で落ち着けるはずもないんだが。同学年だろうが何だろうが、ベルチェほどの奴は見たことないし。

——っていうかあいつ、学校どうすんだ？ まさかある日転校生としてやって来るんじゃない。有り得る、有り得すぎるだけに恐ろしい。

ベルチェが同じクラスだなんて、地獄という他ないだろう。もしそうなれば24時間監視されてることになるのだから。

「お待たせしました、ご飯ですよっ」

おぼんに乗った料理を、ベルチェが丁寧に並べていく。箸なんてそのままじゃなく、箸置きを使うしまつだ。これだけでも真面目な性格が良くあられている。

「……？」

な、なんだ？ 鼻が痛い。なんか目もたまねぎ切ったみたいに染みるし。

ちやぶ台に乗っている料理の数々に目を通してみることにした。まず目の前にあるのは、ほっかほかの白米。一粒一粒が輝いていて、めっちゃくちゃ美味そうだ。

次にサラダ。トマトやキャベツ、ゆで卵などバランス良く盛り付けられている。これにも特に問題はない。

「いてっ」

突如突き刺すような異臭に襲われ、慌てて鼻をつまむ。まるでアソモニアを間近で嗅いだような、臭いとかそんなレベルじゃない。文字通り、痛いのだ。

——な、涙が止まんねえ……。

「? どうかしました?」

「いや、なんか鼻と目が痛くて」

なんなんだこの異様な臭いは。異様つつーか毒ガスと催涙ガスを撒き散らしたような空気は。この部屋何かに汚染でもされてんのか?

「あとはお魚と……」

よいしょ、とキレイに焦げ目のついた魚をちやぶ台に置き醤油をちよびっとかける。

「最後はスープですっ」

——奴はやって来た。今までずっとまともだったのに、最後の最後で、ある意味お約束の料理がやってきた……誰も待ってなんてないのに。

「な、ななななんだこれ!??」

「なにつて、スープですけど?」

何を当たり前の事を、と怪訝な表情で首をかしげる。ベルチェはスープと言ったが、これが世間で言われるスープなら俺はこの世界にスープなんて毒物の存在は認めない。

一面の紫。コプコプと時折ガム風船のように膨れ上がり、ピチャツと音をたてて毒々しい煙をあげる。その瞬間、目と鼻が同時多発テロに襲われるのだ。これはもう兵器とかそういった類いの物だと思う。

——絵本に出てくる魔女の釜に入ってるやつに酷似してるな。

お約束だ、お約束すぎる。真面目なやつほど実は料理が下手って、もしや真面目度に比例して料理の下手さが変わるのか？ だからベルチェの料理はこんなにも人を軽く殺せそうな色をしてるのか？

いや、だがスープ以外はまともだし。

「それでは、いただきますしょう」

「お、うっ。い、いただきます」

飲まずとも、近くにいただけで徐々にHPを削られる毒沼スープは後にするとして、とりあえず一番旨そうな白米に箸をのばす。ドキドキと期待と不安と不安が入り混じるような視線を浴びつつ、口に運ぶ。

「……美味しい」

——驚くほど普通に美味しい。や、白米を不味く作れと言うのも無理な話だが。

「ホントですかっ？ えへへっ、頑張った甲斐がありました」

お兄さんは他のをもっと頑張ってほしかったよ。スープとかスープとかスープとか——。

続いて、こんがりと焼けた魚。つぶっと柔らかく箸を刺し、身をわけて口に放り込んだ。

「……ぬあにつ!?!」

わ生だよっ!?! 生ですよこれ!?! どうやったんだ? 皮はこんなな美味そうに焼けてるのに、身は完全に生じゃん。半生とかじゃなくて、生だよ?!

「どうです?」

「どうですか?! むしろお前の頭の調子はどうですか?!」

「――はい?」

「絶好調ですかそうですか?」

ベルチェのキラキラと輝く瞳を前に、言葉を詰まらせる。裏切れない、俺にはこの目を裏切ることとは出来ない。

無理矢理飲み込んで、笑顔をつくって見せる。

「えへ、良かったあ」

彼女も自分の箸で魚をつつき、パクツと食べた。はむはむ、と良く噛んでこくつと喉が上下する。

「うん、美味しいっ」

マジですか? これ、生だぞ? ベルチェの家じゃ焼魚は皮だけ焼いて、身は生で食べる習慣でもあったのか?

良く良く見るとベルチェの魚だけ身までしつかりと火が通っている。つまり……俺のだけ奇跡って言葉を使わないと説明出来ない確率で、生焼けって事ですか？

——そんなバカなっ。

「んくんく。？　悠さま？　食べないんですか？」

「あ、ああ。食べるぞ」

毒沼スープと奇跡の生魚以外はな。

第九項 恥じらい知らずな妻

飲んだら絶望そのものを実感してしまいそうなスープと、偶然とたまたまが重なった奇跡によって生だった魚を残して夕食を無事に終えた。

まさか飯食ってる途中でさえ命を賭けなきゃならないとは思ってもみなかったけど、終わり良ければ全て良しとも言おうしな。いや、終わりの特に良い訳ではなかったけど。

ベルチェには小食なんだと言って誤魔化したのが、残されたショックを隠しきれない表情で「そうですか……」と呟いた彼女の顔は忘れられない。

「——可愛いって罪なんだな」

ベルチェが寂しそうにするだけで、悲しそうにするだけで深く俺の胸を抉るのだ。スゲー愛情を感じるだけに反動も大きい。

俺の部屋兼ベルチェの部屋のタンスから、ハーフパンツとTシャツ、それに下着を取り出して一階にある浴室へと向かった。

脱衣所で服を脱いで、洗濯機に放り込む。自分で洗いたいところだが、きつとベルチェが無理矢理にでも洗いたがるのだろう。

年頃の女の子に自分の服を洗わせるのは気が引けるけど。

カラカラと戸を開け、少し熱めのお湯で身体を流す。基本的には湯船に浸かる派なので、シャワーを使ってる間にお湯を溜めておくのは忘れない。

シャンプー、リンス、ボディークリームに石鹸。きちんと整頓された数々の風呂用品に苦笑しつつ、ありがたく使わせてもらう。

「全く、至れり尽くせりだ」

湯船にお湯が溜まった所で、シャワーを止めて、右足からゆっくりと湯船に浸かった。湯気が浴室内に充満していて、視界が真っ白なくらいほかほかだ。これならサウナの真似事も出来るだろう。

「あゝ、癒される」

んー、何か大切な事を忘れてるような。

何が頭に引っ掛かり、俺の本能が微弱ながらも警鐘を鳴らしている。

なんだったか。凄く大切に、人としての尊厳を守るための何かがあったはずだ……。

「悠さま？ お湯加減は如何ですかあ？」

「――ッ!？」

あああああ、これかあ……。

「えへへ、私も入りますね」

曇りガラス越しに、スルスルと服を脱いでいるシルエットが見える。バスタオル、もしくは水着の着用を約束させたから嬉し恥ずかしびっくりハプニングは無い、はずだ。

ヤベっ、油断してたからタオル持ってきてねえ。くそっ、このままじゃマイサンがいたいけな少女の前に晒されてしまうじゃないかつ。

台の上に置いてあった入浴剤を引ったくるように掴み、開け口など無視して力ずくで開け湯船に入れる。急いで両手でバシャバシャと混ぜ、濁り湯にした。

これで湯船から出ない限りは大丈夫なはず。

「悠さま、入りますよ」

火照った身体に冷たい空気一瞬が触れ、湯気でほとんど見えない視界に白い何かが目についた。

——ちゃんとバスタオルつけてるっばいな。

どうやらベルチェは、さっきまで俺が座っていたイスに座って髪を流しているようだった。ふんふんふん、と愉快的な鼻唄が聞こえてくるが、今はそんなのに耳を傾けてる場合ではない。

「お背中流しましょうか？」

「いや、いい。もう俺終わったし」

「そうですか？ 残念ですう……」

声色だけでそれなりに落ち込んでいるのがわかった。それ以前に、一緒に風呂に入ってるのに恥じらいというものが一切感じられないのはなんでだろう？

ベルチェの事だ、神経が麻痺してるって可能性も捨てきれない。

「ん、タオルが邪魔で身体が洗えないや……」

バサッと、湯船の縁に何かが掛けられる。白くて水分を一杯吸った、本来はほわほわとしている物。

——マジッスか、ベルチェさん！

確かにバスタオルをつけたままじゃ洗えないけど、それじゃあ意味がない。幸い湯気でほとんど見えないのだが、それでももつと何かあるだろ。

目を瞑ってて、とか後ろ向いててとかさ。

「バカっ、タオル外したら意味ないだろ！！」

わかっていても言わずにはいられないのが俺なのだ。

「ええっ？ だってタオルつけたままじゃ洗えないんですもん。うふふっ、この後のにゃんにゃんに備えてちゃーんと磨いておきますからねっ」

にゃんにゃんってナンデスカ……！？

「……っ」

頭に血がのぼったらしく、頭がかくつと落ちそうになる。このままじゃ本当にのぼせかねない。もしそうになったら――。

びっくりしたベルチェは慌てて俺を湯船から引き摺り出す。身体を冷ますため浴室から出す、アンド俺のボディ―公開。七割の確率でベルチェに観察される。いや、されてしまう。ちよつとだけ悪戯しちゃえ。

ベルチェ、何だか変な気分。

――そのままにゃんにゃんに移項。

だからにゃんにゃんってなんだ！？ 知りたいけど知りたくないのは何でなんだっ！？

「べ、ベルチェ？ タオル持ってたらしない？」

「タオルですか？ 持ってますよ。はい、どうぞ」

にゅつと差し出された泡まみれの手からバスタオルを受け取り、さつと装着する。

これで一安心だ、ああ良かった良かった。

ほつと息を吐いたのもつかの間、ベルチェからの第二波が攻撃を仕掛けてきた。

「失礼しますねっ」

どこかうキウキを伴った声と一緒に、病的に白い足が俺の隣に入ってきた。その後、もう片方の足。そして水位が上がり若干お湯が零れる。

フニツと、肩に当たる感触がやけに生々しい。

——ぐぬぬっ、なんなんだよこの娘はッ！！ 普通入ってこないだろ？！ 健常者じゃ異常者の気持ちは理解出来んっ！！

「ふふっ、悠さま」

甘えたような声でぽむっと腕が何かに挟まれた。スベスベしていて柔らかく、それでいて弾力もあるなにか。な、ナニか。なななな、なんだろうか。

んん？ いや待て、スベスベっておかしくないか？ 何がくっついてるのは大体想像出来るが。

恐る恐る視線を下げて、目を細めベルチェの姿を確認した。彼女は金色の髪をゴムで束ねて、恍惚とした表情で俺の左腕に抱きついている。

狭い湯船に二人、立ち上がれば振り払えるだろうが湯船に浸かっている限りは無理だろう。

そして更に視線を落とすと、完全に露出した肩。更にその下にはぶかぶかと浮かぶ——。

「お、おまつ、おまつ、おまままつ」

「はい？ おま？ ……ま、まりも」

「も、もずく。ってしりとりじゃねェよ！！ 何でお前タオルつけてねェんだこのボケッ！！」

——ああ、ふらっときた。毛細血管が破裂しそうです。

「く、くも？」

「も？ またもかよ……ってだからしりとりじゃねェッ！！ 何でタオルつけてないんだよ？！」

「何でって、悠さまが使うって言うから」

自分のかつ！？ お前は自分のタオルを俺に渡しちゃったのかこのボケナスがっ！？

「うおおお……っ。頭が割れる……」

「だ、大丈夫ですかっ！ 頭大丈夫ですか？！」

「どういう意味だちくしょうめ。つか、お前のせいだっつの！！」

やっべ、マジで危ないわこれ……。

ふらふらする頭を抱えながら、音速で浴室を出て一息で身体を拭き服を着る。

良く頑張ったと思う。この状態で、良く服が着れたと思う。

でも、もう無理っぽいです。

「くあっ……」

背中に強い衝撃が走り、誰かの絹を裂くような悲鳴が頭の奥深くに響いていた。

第十項 激烈まいんど

パタパタと何かを扇ぐような音に乗って、静かな風が頬を撫でた。後頭部には柔らかい感触がしてどうにも心地よい。

「ん、あ……」

ゆっくりとまぶたを開けば、目の前には緩い笑みを浮かべるベルチェのアップが視界一杯に映った。ぼんやりとする頭で必死に思考を巡らせ、何故こんなとんでも状況なのか考える。

そっか、俺逆上せたんだっけか。

どうやらベルチェがずっと扇いでいてくれたらしい。身体の気だるさはまだ残っているものの、大分楽になっている。後頭部にある感触は、きつと膝枕されてるからなのだろう。

「目、覚めました？」

「ああ、さんきゅ。助かった……」

「もう、心配したんですからね？」

口調は怒っているが、ベルチェの表情は今までにないくらい穏やかなものだった。何か良いことでもあったのか、笑みを絶やさない。ほんのりと頬を染めて、真っ直ぐに俺を見据える瞳が熱く煌めいていた。

うつ、可愛いじゃねえか。

——パタパタ、と。

笑顔を見せつつも扇ぐ手は止まらない。俺の頭を冷ますと言うよりも、自分が扇ぎたくて扇いでいるようだ。そこまで人に奉仕するのが好きなのだろうか。

「……春、ですね」

居間の隅で寝ところがる俺と、膝枕をするベルチェ。少しだけ開いた窓から流れこんで来る、春の夜風が無性に気持ち良い。

雲が一切ない夜空には星がほとんど見当たらず、それが微妙に寂しい。が、代わりに三日月が明るく顔を覗かせていた。ゆらゆらと、まるでゆりかごのように光が揺らいでいる。

——なんだろう、前にもこんな事があったような気がする。夜、ではなかったと思う。あれは確か、春のような暖かではなく、冬のように突き刺す寒さ。ふわりと柔らかく身体を受け止めてくれる真っ白な雪。一点の曇りもない蒼。

「悠さま」

「うん？」

逆向きのベルチェの顔が、ぐっと近付いた。潤んだ瞳が優しくな光を放ち、小さなピンク色の唇は誘うように濡れている。吸い寄せられるような艶に視線が外せない。

大河、なんかごめんっ。俺、色んな意味でやばいっす。

「今日一日……いえ、悠さまは学校に行ってらしたので約半日ですか。半日一緒にいて、改めて思いました」

「……」

花や木々をも魅了するかのような、サキュバスなど足下にも及ばない魅惑の笑みを浮かべてベルチェは俺の頬に手を当てた。

慈しむように俺の頬を撫でる小さくて冷たい手に、ドクドクと心臓が頭に血を送りカツと熱くなる。

我ながら、現金な性格をしてるなあ。普段なら既に飛び起きて、何してやがんだと文句の一つでも垂れている事だろう。ただ、今は頭もぼーっとするし、身体もダルい。そんな、些細な理由を持ち上げるだけ持ち上げて、調子が悪いのだから仕方ない。ベルチェのせいで逆上せたのだから仕方ない。そう結論付けたがっている自分が居る。

……眩しいな。

俺なんかに比べて、ベルチェは眩し過ぎる。監禁とか調教とかほざく異常者だが、こいつの真ん中にあるモノは純粹で純白だ。俺なんか、こんな事で流されてしまえって思ったのに。

「私は、あなたと生涯を共にする運命にあります」

「なっ、なに言って——！」

これがまた冗談に聞こえないのが恐ろしい。事も無げに言っ

けるベルチェには後悔や不安などは一切見受けられないのだ。

そうなるのが『当然』だと。

——『運命』。言うだけなら簡単のたった一言を信じて疑わず、彼女の蒼い瞳は幸せに満ち溢れていた。

「……」

俺はいつたい彼女に何をしたんだろう？　なんでこいつにここま
で言わせたのだろうか。もしかしてひよんな事から命を救ったとか
？　でも命を救うような大きな出来事が、ひよんな事からなんて有
り得るはずもなく……。

「悠さまがどう思って私と結婚したかはわかりません。でも、私に
はわかるんです」

「な、何を……？」

若干怖かったが、訊かないとそれはそれで後悔しそうな気がした
から一応利いておく。

「私は悠さまの妻で、悠さまは私の夫。これはもう確定事項なんで
すよっ？」

どうしてこいつは、こうも簡単に齒の浮くセリフを言えるんだろ？

「ですから……」

——その時、強く、純粹過ぎる想いを感じた。溜め息が漏れてし

まうほど、無垢な願い。

「一生、私だけを見ていて下さい」

それだけに酷く歪で、無邪気で、人が受け止めるには重すぎる想
いを作り上げたのかもしれない。

実際俺なんかには勿体無く、強すぎる心を受け入れるだけの器を
持ち合わせてはいないのだ。

「もしも他の女性が良いと言うのなら、五箇条などなくたって――」

故に、俺がベルチェを受け入れる事はないだろう。生涯を共にす
るとまではいかないが、俺には好きな人がいて、多分この先、よほ
どのことがない限り変わらないと思うからだ。

大河はそれだけ近い人だし、あいつの良い所も沢山知ってる。好
きになる前まで、大河を好きになっていなかったのを不思議に思っ
ていたくらいなんだ。

――だから、悪いなベルチェ。気持ちは嬉しいが、俺には無理だ。
無理なんだよ。

「あなたを殺して、私も死にますから」

死神の鎌が首筋に当てられているかのような恐怖にかられたが、
目を閉じてやり過ごす。

「……もうっ」

ベルチェは返事をしてもらえなかったのが不満のようだった。

俺は可愛いらしい舌打ちを聞きつつ、瞼に差し込む光が何かに遮断され何かが近づいてくる気配を感じていた。

「ん……」

吐息が鼻先に当たり、唇に柔らかいモノが押し付けられる。

「私は……本気ですから」

「……」

わかってるよ。わかってるからこそ、お前が怖いんだ……。

「本気、ですからっ」

当たり前のようにつむがれるこの一言に、どれだけの想いが込められているのだろう。

——行き過ぎた愛情は、どれだけお互いを傷付けているんだろう。

「……」

何か言わないといけないのに、言葉は喉の奥に鋭く突き刺さっていた。

しばらく二人でぼんやりと月を眺めていた。まだ夏でもないのに風鈴が恋しいのは何でだろうか。肌寒くなってきたところでベルチェから寝ようとの提案があり、寝室へと移動する。

改めて見ると、なんだかエロい。ダブルベッドに枕が二つ仲良く並んでいて、シワ一つない薄い掛布団が敷かれていた。

「悠さま、あの、寝ないんですか？」

暗い部屋の中で、窓から差し込んだ月の明かりがベルチェの瞳と髪を照らしている。これを神秘的と言わずになんと言おうか。

「いや、お前先に入れ」

「え、や、わ、わかりました」

自分で決めたくせにいざ一緒になるとかなり恥ずかしいらしい。彼女は胸の前でぐっと手を握り、意を決したようにベッドに潜り込む。

にゅっとカンガルーの子供のように顔だけ出して、布団の端をちょこんと掴んだ。拗ねたような唇がふわっと笑い、熱でもあるんじゃないかと思うほど顔を赤らめる。

可愛い、いや今更だが可愛い。兵器だと思う。ベルチェがサミットに居れば、にこにこしてるだけで世界平和なんて軽く達成出来そうだ。核ミサイルだってベルチェを前にすれば、あまりの愛らしさに慌てて方向転換すると思う。

「――えへへ」

意味もなく微笑んだベルチェは、じつと俺を見つめ照れ臭そうに頬を掻く。

「……」

こうしているのもなんなので、とりあえずベルチェの居る方反対側からベッドにもぐり込んで、ベッドから落ちるギリギリに寝っ転がった。

「……」

「……」

うっ、居たたまれない。風呂入った時はあんなにウキウキしてたくせに、ベルチェも黙ってやがるし。俺、なんでこんな事してんだろ。

「起きてます？」

「お、おうっ」

「へへっ、ですよね？　こんなん、寝れる訳がないですよね」

わかってやるんじゃないやねえよ。良い迷惑だっつの。

天井をぼーっと見つめていたが、隣でもぞもぞと動くのを感じそつとベルチェを盗み見てみた。

――が。

「悠さま」

直ぐ様そっぽを向く。いいや、向かざるおえなかったのだ。飼い主に甘える仔猫みたいに、ベルチェがすりよって来たのだから。幸せそうに、嬉しそうに、相変わらずの無邪気な笑顔で。

あんなの見てたら理性なんて一瞬で吹き飛ぶ。もしそんな事になってみる、それこそ責任だのなんなので大変な目にあうのは必然だ。あー、まあ、既に大変な状況だが。

「寄るな触るな変な声だすな」

「えへ、悠さま顔真っ赤です。可愛いっ」

細っこい指先がぷにぷにと俺の頬をつつく。つんつん、つんつんと楽しげにやるベルチェになす俺は術無い。顔が熱いのはホントだし、今のベルチェは普段の数万倍可愛いのだから。

「んー、でもちよっぴり悔しいんでこうしちゃいます」

何が悔しいのか良くわからんが、彼女で俺の手を取ると口元に持つていき。

——カプツ。

噛みついた——。

「いだっ」

「ふふふ」

「な、なにしやがるボケ！　　噛むな！　意味不明だろうがっ」

「はみはくなって」

「……噛んだまま喋るな」

始めこそ歯を立てて食い千切らんばかりの力で噛んでいたのだが、ちよつとかわいそうに思ったらしくはむはむと甘噛みに変わった。

や、そっちも違う意味でヤバいんですが。どうしてくれるんでしょうか？

俯き加減プラス、イタズラを思い付いた子供みたいな上目遣いが脳髓に染み込んで、脳が細胞をピンク色に変えようと奮闘している。我が脳ながらいい迷惑だ。どうせならもっと違う事に頑張ってもらいたかった。

「はるかさまはおひやですか？」

「……もういい。お前って最初も自分の気がすむまでしてたからな」

犬で言う、お腹を見せて好きにして下さい状態。だがまあ、これは決して諦めたのではない。ポジティブな譲歩なのだ。そうだ、そうに違いない。そうじゃないならなんだって言うんだ畜生っ。

「むふ？　　けっこうおふき？」

「好きじゃねえ!!」

「うふっ、はふかさまもすきもほでふね」

意味はわからなかったけど、貶されてるのは確実だろう。一発ぶん殴ってやろうかとも考えたが、自分の人差し指も被害にあうのでやめておく。

「ふう、なんだかおひつひまふ」

俺の葛藤などいざ知らず、ベルチェはおしゃぶりを得た赤ん坊の如く和んでいた。

第十項 激烈まいんど（後書き）

更新少し遅れちゃいました（――；）さて、ここいらでベルチェの本質が見えてきたかと…。素晴らしく頭のイカれた彼女にも色々あったりなかったり。ちなみに、ここまでがベルチェ編プロローグです。次話からは大河編。そしてそして、ようやく本編って感じでしょうかね。まあ、前作から読んでくださってる方が多いようなので、もうわかってると思います…。相変わらずのプロローグの長さ！？

第十一項 朝這い？妻。

——雪が降っていた。

少年は一面を埋め尽くす雪の上に、大の字で寝そべっていた。

少女は、少年を不思議そうに遠くの物陰から見ている。

——冷たくないのかな？

素朴な、他から見ればどうでも良い好奇心に負け、少女は少年に問う。少年は一瞬だけ少女に目を配ったが、すぐに曇天の空を見上げて不機嫌そうにもらず。凄く当たり前で、誰もが気付いているように気づいていないこと。

——雪なんだから冷たいに決まってるだろ。

で、でも汚れない……？

——汚れたら洗えば良いだろ。服なんてそんなもんだ。

少女は当たり前のように言いわけする少年の事を目を丸くして見ていたが、泣きそうな笑みを浮かべて少年の隣に寝そべる。

——うん、そうだね。その通りだよ。汚れたら洗えば良いんだよ、ね。

少年は、自分の隣で空を見ているこの不思議な雰囲気を持つ少女を横目に見ていた。少女もまた、当たり前前の事を当たり前前のように

教えてくれた少年の事を意識していた。

「……夢、か」

凄く久しぶりに見た気がする。この夢を見た後は、必ずと言って
良いほど胸が締め付けられるのに今日は少し気分が楽だ。これも大
河のおかげなのかもしれない。

——っていうか、何か身体が重いんですが……。

ふと自分の布団を見下ろしてみると、不自然なほどにこんもりと
盛り上がっている。大きく上下しているのは、俺のせいではない。

「……」

隣で寝ていたはずのベルチェの姿はない。そして、何かに乗っか
られているような感覚。大きく上下する布団。

ま、まさかな。いくら相手がベルチェだからって、そんなバカな
こと。

恐る恐る自分の布団を捲ってみる。

「何してんだこのバカ……」

案の定というかなんと言うか。ベルチェがすやすやむにやむにやと幸せそうな寝息をたてながら、俺の身体の上に文字通り全乗っかりで寝ていたのだ。上半身だけでもたれかかるように乗っかってるならまだしも、全身がびったりとくっつくかのように乗っかっている。つか良く寝返りの時に落ちなかったな。

年頃の少女としては、それなりに発育の良い身体がずっしりと全身に押し掛かっていた。ずっしりと言っても、人の重さからすれば羽のように軽い。全身が華奢であり、柔らかさを兼ね備えていた。常人より体温が高いのか、小さな体軀から熱が伝わってくる。

「むふふ、むふふふっ」

「な、なんだっ？」

突如ふにやっとベルチェの顔が歪み、壊れた人形のようにくすくすと笑い出す。いったいどんな夢を見ているのか、そもそも本当に寝てるのかもさえ疑問である。

「うふふ、悠さま」

「……怖っ」

なんか怖くなってきたので、この状況を打破する事にした。もぞもぞとベルチェを起こさないよう身体を動かすが、がっしりと彼女の腕が腰に回されていて、びくともしない。

強化版だっこちゃん人形のような。んなもんホントにあったら焼却炉に投げ付けるが。

「……死ねエですう」

何故に!?

夢の中で殺されそうになってる俺二号が居るようだが、そんなのを気にしている場合ではなかった。ギリギリと、プロレスラー顔負けの絞めが極っているのだ。無理矢理酸素を吐き出させられ、嫌な意味で熱いモノが込み上げてくる。

「が……っ?! 冗談、キツいて!!」

「浮気は絶対……許し……すーすー」

ま、また寝た……。 っていうかさっきまで寝てたのか? しかもまだ極ってるのはどういう事だ。

ベルチェロックによって、骨がミシミシと悲鳴をあげている。肺になかなか酸素が取り込めず、普通に愉快に日常的にピーンチ。

「べ、ベルチェ……! 起きろこのバカ!」

「ふんにゃ?」

なぞの奇声をあげつつ、ベルチェの瞼がゆっくりと開く。ぼんやりと且つ確かめるような視線を、真っ直ぐと見返した。早く自分が何をしているか認識してもらわなければ、俺の命が持たないのだ。

——いやだ、こんなので死ぬなんて絶対にいやだ!

こんな少女に絞め殺されたなんて、誰が信じるだろうか。新聞の

朝刊にのって miro、マヌケなんてレベルじゃねえ。

「あっ、悠さまだ」

にへらへら、と笑いよいよ通常レベルの力に戻った。命の危険はなくなったが、新たな危機に直面している事に気づく。いいや、気づいてしまった。

おおうつ、優しく抱きつかれても逆に困った感じがするー！！

忘れていたが、今のベルチェは俺に全乗っかりなのだ。そしたらまあ、アレがこうしてこうなるのは当然な訳で。そうすると、アレがこうなるのは当然な訳で。

「んふふ、おはようございます」

ごしごしと人の服で顔洗ってんじゃないかと思うくらい、強烈に顔を擦り付ける。パタパタとベルチェの金髪が暴れまわり、ふわっとした良い香りが鼻を擽った。端から見れば、仔犬がじゃれついているようにも見えらるだろう。主人の腰が引けているのを別にして。

うむ、これはこれでヤバいな。何がとは言わないけど。どうせ引き離そうとしても無駄なんだろうな、悲しい事にさ。

「離れろ」

「やっ」

やっ、て！ やっ、て！！ やっ、て！！ めっつつちゃ可愛いんですけどー！！

甘えるような笑顔で、きゅっと腕の力を強めた。

「んん？」

きよとん、と俺を見て不思議そうに首をかしげる。もぞもぞと動き出しかと思えば、耳まで真っ赤にしてピタッと硬直した。

——すっごく嫌な予感がするのは何ででしょうか。

「悠さまのえっち……」

や、やっぱり——。

「し、仕方ねえだろうが！ 朝だぞ！？ しかも俺健全な男子高校生だぞ文句あんのかこの野郎！！」

「……えへへ」

なにか変態やらクズやら罵られるかと思えば、ベルチェは恥ずかしそうに笑って、じっと俺を見上げた。期待と不安と照れが入り混じった視線で。

「……にやんにやんします？」

「するかっ」

「えー」

「えー、言うな！」

唇を尖らせて不満を表していたが、何かを思い付いたらしくニマツと笑い、腰から首の横に手を置いた。

突然の出来事に俺はどうする事も出来ずに、俺を見下ろしながら妖艶に笑うベルチェを見つめる。

彼女の髪が頬に当たり、それだけでなんだか変な気分になってしまふ。

これは俺のせいかな？　俺が悪いのだろうか？

「べ、ベルチェさん？」

「ふふふっ、不本意ですが私から襲わせてもらいますねっ？　んっ――」

「むぐっ!？」

ねっ、じゃねえええ!!

いつかのような熱烈なキスを浴びつつ、ビリビリと服を剥かれる。完全に襲われてるああ襲われているよ。ある意味壮観だ。こんな可憐で華奢な少女に襲われるとは……。

「ああっ、悠さま!!」

「なに一人で盛り上がってんだよ!!?」

「くふうん、悠さま……逞しいお方」

「ぎゃああああつ、服を剥くなベタベタ触るなッ!!」

「えー、いけずう……」

「だからえー、って言うな!」

もう地獄なのか天国なのかわからなくなってきた。言うなれば、天国っぽい地獄?

そうだったのか、ぽいって結構大切な言葉だったんだ。

良くわからない悟りを開きそうになってしまっていた。

第十一項 朝這い？妻。（後書き）

前回の更新で、ひとつびっくりする事がありました。なんと！！ユニークアクセス10000！！良いのか『コレ』で？恋愛小説で四桁いってる方が居るといふのは知っていましたか？まさか自分がって感じです。えと、10000って結構多いですよ？ほかの小説がどの程度なのか知らないのですが、いままでの小説はつくるめると、大体6000〜8000くらいでした。いや、一度だけ10000以上はありましたけど。でもそこら辺はどうなんですかね？

第十二項 朝賀幸が現れた。

「うっプ……」

なぜだ、なぜあいつは魚肉と汁類が絶望的なまでに下手なのだ。
白米とサラダはあんなに美味しいのに。や、この二つを不味く作る
のはかなり難しいが。

にっこり笑って「残さず食べて下さいね？」なんて語尾にハート
がつきそうなほど、甘えた声で言われた日にはもうどうするのが最
善なのか判断出来ない思考に陥ってしまう。その後には控えた学校の
ためになんとか生魚だけは回避し、今生の別れのように涙するベル
チェを振りきって学校に來たは良いんだけど。

——その、なんだ。そこを大河にばっちり目撃されたって言うか。
HRをしてる最中から、背中が下手な言い訳したら殺すと書いて
あるのだ。

「な、なあ、大河……？」

「あによ？」

大河はこっちを向きもせずに、鬼も裸足どころか全裸で逃げ出す
殺気をガンガンに放っている。

「何を怒ってらっしゃる？」

「はあ？　べっつに怒ってないわよ。あんましなめた事言ってるとぶっ殺すわよ」

スゲー怒ってんじゃん。それに青春真っ盛りの女子高生がぶっ殺すとか言うなよな。怖いだろうが、お前が言うのと特に。

チャイムと共にHRが終わると、朝賀がちよこちよこと寄ってきた。流石に少しは学習したのか、怯える仔犬のように俺の背中に隠れている。

っーか隠れるくらいなら近付こうとするなよ。しかも何で俺の背中？

ツッコミどころ満載だったが、朝賀はうーうー唸って真剣な眼差しで大河を見ている。にゅっと肩越しに出た朝賀の横顔に、不覚にもドキッとしてしまう。

「うー、うー」

唸るなよ、うざいから。

言ってしまうば確実に泣かせてしまうので、心の片隅にそっとしまっておく。

大河にはあんまり苛めるなとか言ってるくせに、俺の何気無い一言で泣かせてしまう事も少なくないのだ。多分、このクラスじゃ大河に次いで朝賀を泣かせているはず。ま、チョモランマと幼稚園児が作った砂山くらいの差はあるけどな。

「穂村くん、何で大河はあんなに不機嫌なのかな？」

「さ、さあ？ 俺にもわからん。つか朝賀、近い」

顔を少し動かせばほっぺ同士がくっついてしまいそうだ。肩に置かれた手がぶるぶると震えているのは気のせいではないだろう。朝賀は朝賀なりに、恐怖と必死に戦っているらしい。うむ、健気で良いと思う。

「ホントに？ だって大河が怒る理由の四割は穂村くんじゃない？」

「……残りの六割はお前だけだな」

「絶対穂村くんが何かしたんだよ。もうっ、とぼっちを受けるのはわたしなんだからねっ」

いや、朝賀の場合は自業自得だし。普通に割合についてスルーされたし、顔近いし。ああ、なんて不憫な娘なのだろう。

可愛いそうだから、ベルチェに貰ったアメを三つあげる事にした。

「アメ食べるか？」

「わーい、食べる食べる」

朝賀ほど操作がちょろい人間はいないだろう。最早朝賀種と言う、確立された人種を作って良いほどの扱い易さ。朝賀はりんごとみかんとレモン味のアメを、三ついっぺんに頬張ってハムスターのように頬を膨らませる。

「んふゝ、ありがとー。おいひーよ」

「そりゃ良かった」

「あ、もう一個ちょうらい」

「ん、ああ。良いけど」

丁度五個貰ったから残りの一個は後で食べるとして、メロン味のアメを朝賀にわたした。

朝賀はスキップしそうなほどウキウキしながら、修羅と化している大河のもとに無謀にも向かって行つた。これは予測だが、朝賀の脳内では大河が怒っているという事実は、アメの甘さによって忘却されているのだろう。

アホだ、素敵にアホすぎる。

「大河ゝ！ アメ食べる？」

「いらないわよ！ って言うか寄るな！」

「アガッ……」

アッパーのように繰り出された二本指が朝賀の顎と首の間に突き刺さる。おえっ、おえっと吐きそうで吐けない微妙な辛さに襲われている朝賀は、げろげろ言いながら泣いていた。ある意味器用なやつだと思う。

「お、おえっ。い、いだぎもぢばるい」

「あんたの方がキモい」

「ぎぼいっでいわれだああ!!!!」

「はいはい、よしよし」

うわあああん、と泣きながら、ゲロを吐くようにしながら友達のを
輪に逃げ込んだ。

——朝賀、後でアメやるな？ だから頑張って生きろ。な？ い
子だから。

俺には、朝賀のIQがあがるよう祈るほかなかった。

大河の機嫌がなおる事なく午前の授業が終わった。大河を指そう
とした教師が、揃いもそろってかわいそうなくらい顔面蒼白で目を
逸らしたのは気になったが。いったいどんな顔をしていたのだろう。

「……はあ」

何がそんなに気に食わないんだよ。

ずっとムスツとしてる大河の後ろで、一人弁当をつつく。

「た〜いがっ」

——朝賀幸が現れた。

「一緒にお弁当食べよ」

——朝賀幸は、仲間にしてほしそうな眼差しで見ている。

「うざい」

大河の一喝。

「大河がうざいって言ったああああっ!!」

——朝賀幸は泣きながら逃げて行った。ってRPGかつ。なにゲーム感覚にしてんだよ俺。

再び溜め息を吐いていると、背中をちょんちょんと何かに突かれる。後ろを向くとそこには——ッ!?

「穂村くん、一緒にお弁当食べよ」

——朝賀幸が懲りずにまた現れた。仲間にしてほしそうな眼差しでこちらを見ている。

うざっ。ここまで頻繁に仲間になろうとしてくる奴がいたら普通にうざいな。

特技なんて、泣く、不思議そうに指をくわえる、うざがらせるくらいしか持ってなさそうだし。てか、それじゃまるっきり子供じゃん。

「え、や……」

「いやなの……?」

うざいので断ろうとすると、朝賀幸は目に涙をいっぱいためて保護欲を誘ううるうるビームを放った。

ある意味最強の技かもしれない。

「あ、ああ。良いけど」

「やったー！ 大河なんか放っておいて食べよ食べよー!!」

そそくさと隣のイスを持って来て俺の机に合わせる。朝賀らしい小さな弁当箱を机に置いて、シュツと意味もなく仕事人のように箸を取り出した。

「でも良いのか？ 友達ズは」

「あ、うん。良いの良いの。今はやりたい事があるから」

ちらっと大河の背中を見て、くすつと笑みをこぼす。まるで可愛いモノでも見つけたような笑みだ。

「そういえば穂村くんや」

なんで昔話の婆さん口調？

「んあ？」

「穂村くんって、修学旅行沖縄とハワイどっちにするのかな？ 6
限目で決めるみたいなんだけど」

瞬間、俺の前でガタツと大河の机が倒れた。大河はしばらく呆然と立ち尽くしていたが、何事もなかったかのように机を戻す。このクラスに大河を茶化す強者はいないので、大河が戻ると静まり返っていた喧騒も元に戻る。

「？ な、何事？」

「気にしない気にしないっ。それで？ どうなのかな？」

「あ、ああ。そうだな……」

来月の頭に三年生最大のイベントである修学旅行があるのだが、これは沖縄組とハワイ組の二組に別れるのだ。修学、と言うかほとんど遊びに行くようなもので、滞在期間の大半が自由時間だったと思う。

ぶっちゃけどっちでも良いが、今考えると沖縄ならベルチェがついてかもしれない。それだったら、馴れない英語を我慢して、ハワイの方が良いかも。

「あー、ハワイにしようと思う」

「ふーん、そっかあ。穂村くんはハワイ！！ なんだあ」

何故か俺ではなく、大河を見て言っていたのが気になったが、どうやってベルチェを押さえつけるかを考えるので頭の中は一杯だった。

た。

第十二項 朝賀幸が現れた。(後書き)

めっちゃきくちや遅くなりました(^^;) 最近絶不調で、なんとか取り戻そうと頑張っています。

第十三項 ご乱心である!...ご乱心である!! (前書き)

最近今までにないほど不調……。先週なんか一文字も書けませんでした (..|;)

第十三項 ご乱心である!! ご乱心である!!

午後の授業も終わり、生徒が下校を始めた頃になると大河の機嫌もそれなりに回復していた。さすがに一日中むすっとしてるのは大気ないとも思ったのだろう。

そのかわり、かはわからないが嫌にもじもじしている。

「は、悠はさ……」

「あん？」

「悠って、ハワイなのよね？」

窮屈そうにブラウスに収まっている胸の前で、くるくると指を絡ませる。真っ赤なりボンに負けず劣らず、大河の頬は赤く染まっていた。

妙に女の子らしいってか、大河らしくない。大河って女の子よりも、女って感じだし。

「ああ。まあ、そうだけど」

「あ、あたしもハワイなんだっ」

照れ臭そうにポリポリと頭を掻き、にへらっと笑った。途端、首まで染め上げてキッと眼光をキツくする。

「ま、真似すんなこのバカ!!」

「はあ?!」

い、意味わかんないだが。なぜ旅先が一緒なだけで「真似すんな」なんて言われにやなんのだ。つか、そんなんでバカ呼ばわりすんじゃないよ。

「ま、まあ悠がどうしても遊んでほしいって言うなら遊んであげないこともないけど……」

腕を組んでふんっ、とふんぞり返る。微妙に話の流れがおかしいけど、それよりも何よりも大河自身の様子が変だ。

どこかと訊かれれば、全体的としか答えられないけど何かおかしい。妙だ。機嫌の悪さが妙な感じに流れている。

「べ、別にあたしはあんたと遊びたい訳じゃないし?」

「はい……?」

ごによごによと日本語っぽい言語を吐き続ける、気まぐれな暴れ虎。いつもは理不尽な理由で人を殴ったり、恐喝紛いの睨みをきかせたり、胸をジロジロ見る野郎を地上の人ではない別の生き物にしたりと、傍若無人な大河さん。

恐怖の大王がやって来ると言われた年にも、一人やってきた大王をぶっ殺してやると意気込んでいた、神をも恐れぬこの虎の言動が理解出来なくなる事も少なくないのだ。

今みたいに突如もじもじしたり、顔合わせた瞬間ぶん殴られたりもしたが、今日のようなパターンは結構珍しい。

「あ、あたしは幸と一緒に構わないし。すごく不本意だけど」

おいこら、角で朝賀が泣いてるぞ……。

あっさりと朝賀を貶した大河は、ちらちらと俺を見てはふんぞり返り、見てはふんぞり返りを繰り返していた。

「あ、あんたはどうなのよ？」

「……何がだよ？」

「人の話はちゃんと聞いておけっ!!」

眼球を潰さんばかりに一直線にやってきた指をなんとかかわし、追撃を逃れるため大河の腕を掴む。

「ちよっ、だから意味わかんねえって！ 何が言いたんだよッ！？」

「わかれこのあんぽんたんっ!!」

「――ブホッ」

身体を反転させた裏拳が見事に我が頬に炸裂。顎が外れて漫画みたいにゲエエーッてなるかと思ったが、無事だったようだ。

つかあんぽんたんって懐かしいな。大河、なんでお前はこんなも

んをチョイスした？

「俺をサンドバックかなんかと勘違いしてねえか!？」

「はんっ！ 悠みたいな朴念仁は便所虫以下よ！ いいえそれじゃ便所虫に失礼ね!!」

酷い言われようだ。

「なんなんだよ!？ 意味わかんねエ、はつきり言え!!」

「言えないから困ってるんじゃないの!」

はあ？ ますますわからん。大河が言えない言葉がこの世に存在したのか？

大河はギラギラと瞳に炎を滾らせながら、自分でも困惑しているのか尻尻が下がっていた。白くなるほど握られた拳が痛々しい。何かを必死に堪えているようだ。

本当に、最近の大河はおかしい。最近っていうかベルチェが来てからなんだが、いつものようにズバズバと物を言わなくなった。や、これでも大分抑えているんだろう。プロボクサーが右ストレートを封じたまま戦っているような不自然さ。

「どうしたんだよ、おかしいぞお前」

「お前って言わないで……。あたしだってわかってるわよ、それくらい。でも」

——むかつくのよ。

掠れて息のような声だったが、しっかりと耳の中で響いた。聞いているこっちまで沈んでしまいそうな、悲しげな声色。

「なんであんなひょっこり出て来た奴に……。むかつくむかつくむかつくむかつくむかつく！」

かと思えば、眉をつり上げて両腕を振り回す。後ろの黒板に下げてあったコルクボードを破壊し、自分のカバンをひっ掴むと部活へと行ってしまった。大河が何を考えているのかさっぱりわからないが、今は関わらないのが懸命だと思う。

下駄箱で靴を履き替え、校舎を出てすぐに見知った顔——つか大河の姿があった。両手でカバンを持って所在無さげに立ち尽くす様子は、恋人を待つ健気な少女のようだ。

「あ、悠……」

トテトテと駆け寄って来た彼女は、苦い表情を浮かべて顔を逸らす。ついさっきの事を気にしているのだろうか。なら最初からやるなって話なのだが、そんなのは過ぎた事だから言えるわけで。

じっと、お菓子をねだる子供みたいな上目遣い。うるんだ瞳に映る自分の姿に、柄にもなく胸が弾む。

「部活、無いんだ」

「あ、うん。先生が出張で居ないから……」

「そか。じゃ、たまには一緒に帰るか」

俺は部活もやってないから中高と大河と一緒に下校することは少なかった。試験が近くなれば部活も免除されるのだが、大河にも友達付き合いがある。俺としては一緒に帰りたかったけど、誘えるわけがない。

誰になんと言われようと、大河の生活を邪魔してまで自分の意見押し通したくはないから。俺なんか、本当に何にもする事が無くなった時で十分だ。それ以上は望めない。望んではいけない。俺が一番応援してんのに、俺が邪魔者になってどうする。

「い、良いよ。帰ろっ」

大河の返事を合図に、肩を並べて校門を出た。俺と同じく帰宅部の連中がちらほら居るが、男女のペアが見当たらないためどこことなく気恥ずかしい。唯一の救いなのは、二人きりではないってことか。

——二人きり？ 普通ならおいしいシチュエーションだが。だが待て。このまま下校してみろ。確かあの辺は大河以外生徒が居ないから二人きりになる。しかも大河宅は家の隣。

ベルチェ出現。拉致、監禁、調教。

後半は無駄にまがまがしい言葉が連なっているが、冗談ではない。

——や、やばい。このシチュエーションは大変よろしくない。
ど、どうにかもう一人呼び込まなくてはっ。

キヨロキヨロと辺りを見回す。

「……」

こんな時に限って誰も居ないというオチ。そんなの嫌だ。なんでこんな普通の事で人権を無視された虐めを受けねばならない。

神に祈るつもりはさらさらなくても、これはあまりにも理不尽と言うものではないか？ 神は祈る者にしか——信者にしか祝福を与えてはくれないのか。なんだよ、全知全能のくせにケチくさい野郎だ。

「ええと、悠？」

「あ、な、なに？」

「あのさ、さっきはさ……」

大河が何かを言おうとしてる間にも、着々と危機が迫る。足を踏み出す度に、人影が少なくなる度にカウントは減っていくのだ。

大河の言葉に耳を傾けつつ、視線だけは世話もなく周辺に警戒を強める。

「さ、さっきはごめんっ。あたしどうかしてた」

「あ、ああ。別に気にしてないから」

大河が素直に謝るなんて、珍しい。このプライドと暴力と意地の塊のような大河が、感動したっ。

彼女はほんと安堵の息を吐き、恥ずかしそうに頬を染める。目尻まで真っ赤になった大河の微笑みは、脳内で核ミサイルが直撃したかのように爆発。一面の花畑が一瞬で焼き払われ、くどいほどに脳内リピートされた。

そう、この時々見せる笑顔に俺はやられたんだ。大体が空手なんかで自分が納得出来る試合が出来た時に見せるんだが、これがまた可愛いものなのって。これが見れるなら、超絶技巧練習曲を尾てい骨でひいてやるよ。

「ねっ、悠。ハワイさ、い、一緒に回らない？ 幸も悠が居た方が楽しいって言うから。他の男子誘っても良いし」

「ああ、それは良いけど。俺友達少ないし。最悪俺一人でも良い？」

「え、あ、うん！ 全然構わないわよっ。むしろのぞ——」

大河はハッとして口を抑える。

「？ まあ、良いなら良いけどよ」

「う、うん。よしっ、決まり！ はふう、良かったあ」

何が良かったのかはわからないけど、大河が嬉しそうなので追求はしないでおく。

——刹那、空間が凍結した。不気味で、可憐で、無邪気で、殺意

と憎しみが同居したような笑い声と共に。

「ウフツ、ウフフフ。悠さまは、一体何をなさってるんですかあ
ゝ?」

買い物カゴ片手に、ありとあらゆる負の感情を纏ったベルチェがそこに居たのだ。俺にはサタンを超越する存在にしか見えなかったけどさ。

第十三項 ご乱心である!! ご乱心である!! (後書き)

本編について。大河さん、ホントツンツンしてますね。

本当はこんなキャラじゃなかったんですけど、こんなものになっちゃいました。まあ、なんか皆さんこの気まぐれな虎を受け入れてくれるようなので安心しましたが(笑)

ちなみに大河編は長くなると思います。今二十話ちょっと目くらいを書いていますが、まだ終わりそうにない…。もしかしたら30までいくやも――。

そうです、また無駄な事ばかりかいてるんです(――;))

第十四項 独裁者と虎 その2（前書き）

今回はベルチェ視点です。あー、いろんな意味でやばいですよ今回のベルチェさんは（^^;）

第十四項 独裁者と虎 その2

暇だ、全くもって暇だ。悠さまを学校に送り出したら、もうする事がない。というより、何かをする気にもなれない。

この家にはソファなんて小洒落た品物はないので、座布団の上に足を崩して座る。

寂しい。何度そう思った事か。悠さまが居ないこの家は広すぎる。むしろ五畳くらいの小さな部屋一つでも十分だったのに。そっちの方が暖かい感じがするのに。寂しい。

考えれば考えるほど、ぽつーんと佇む自分がなんだが世界から切り離された存在に思えてくる。私はただ、あの大きな手に触れて欲しいだけなのに。

「……うん、掃除しよ」

奥の収納スペースの片隅に置いてあった掃除機を手にも、まんべんなくほこりを吸い込んでいく。窓を開けて空気を入れ替える。

掃除機が終われば今度は洗濯。こっちはちょっとした楽しみだったりする。少し変態チックだけど、悠さまのお洋服があるからだ。家事はそんなに好きではないのに、悠さまのためにお料理をしたり、悠さまの着るお洋服を洗濯するのは楽しい。

それに、その……ギュッてしちゃったり？ えへへ。

想像したら我慢が出来なくなってきたので、足早に脱衣所へと向かった。

脱衣所には悠さま用の洗濯カゴと、自分用の洗濯カゴがキレイに並んでいた。仲良く並んでいるだけなのに、嬉しくなっているのはなんでだろう。

悠さまのカゴには昨日悠さまが着ていたお洋服と、寝る時に着ていたTシャツにハーフパンツ。それに、禁断のし——した……うにゅっ。

「……」

まだ禁断のアレは刺激が強すぎるから、とりあえず小手調べにTシャツを手にとってみる。今朝は私が乗っかっていたせいか、若干汗の匂いがした。

「悠さまの残り香が……」

そっと胸に抱き締めてすんすんと鼻をひくつかせる。変態だ、変態だけど、でも良い。もう良い。私は変態だもの。どれもこれも、悠さまが悠さまなのが悪いのなもの。こんな気持ちにさせる悠さまが悪いんだもの。そうだ。私は悪くない。ただ好きなだけなんだ。

こんな、こんなしゅてきしゅてきアイテムがあったら女性なら誰だってこうしたくなるはず。決して私だけじゃないと思う。この前、瑞池さんに正気だなんだと言われたが、私は正気だ。これが普通なのだ。これは通常モードの私なんだ。

雌は雄の匂いを嗅ぎたくなるモノ。うん、私は今から雌になる。

「すう、はあ……」

ああ、変態だよ。今私は限りなく変態に近い行為をしている。こんなの悠さまに見られたら、うふふ。ちょっと面白いことになるかもしれない。

悠さまのお洋服を抱き締める健気な私を見た悠さまは、こうムラムラときて襲いかかってくる。大地のように受け止める私に、悠さまは感動のあまり涙をこぼして、そして――。

「はふう、ベルチェはいつでもオッケーですよ悠さま。なんならそれ以上でも……」

おっといけない、欲望が口からだだ漏れだ。お口にチャックしないとつ。

名残惜しいが、いつまでもこうしてる訳にもいかない。泣く泣く洗濯物を洗濯機に放り込み、洗剤を入れて電源を入れる。

そうだった。後で悠さまのタンスにこっそり私の下着を入れておく。それで悠さまも私と同じようにしたら、私は正常だって事で。

「うふふ、ふふふふふ。悠さまが私のを。ふふつ、ふふふ」

お昼ご飯を食べて、ぼーっとゆらゆら揺れる洗濯物を眺めるそんな昼下がり。する事が無くなった。いや、あるとすればあるのだが悲しいかな、私はこの辺りの地理に詳しくない。

本当はお買い物に行きたいのだけれど。

ま、なんとかなるかな？

何もしないでいるのも妻のしてどうかと思うので、行動だけはおこしておく事にした。お財布と買い物カゴを手に、家を出る。しっかりと鍵がかかっているのを確認した後、お隣さんへと直行。こういう時はご近所さんに尋ねるのが一番だ。

『瑞池』とあるお宅のチャイムを鳴らし、誰かが出てくるのを待つ。30秒ほどで出てきたエプロン姿の女性に、スーパーの場所を訪ねてみた。

この人が昨日の人の母親か。

特別、特徴もない普通の主婦。ニコニコしながら「ちょっと待ってね」と奥に引っ込んだ主婦はしばらくすると戻ってきて、一枚の紙をくれた。

「この通りに行けばつくはずよ」

わざわざ地図を書いてくれたらしい。昨日の人はなんとなくムツとしたけど、この人は好きだと思う。優しい人が好きなのは、人として当たり前の感情なのだ。

「ありがとうございます」

「ううん、でも悠くんもやるわね。こーんな可愛いお嫁さんをもらうなんて」

そっか。幼なじみだとか悠さまは言ってたから、知っててもおかしくないか。でも可愛いお嫁さんだなんて、良い人だあ。

「えへへ、そんな事ないですよ」

「お名前はなんて言うのかしら？」

「ベルチェです」

「ベルチェちゃんか。悠くんって少し抜けてるけど、よろしくお願いね？」

「はいっ、任されました！」

力強く返事をして、良い人とお別れをした。本当に良い人だった。私もお名前を訊いておけば良かったかもしれない。

「頑張ろっ」

意気揚々と地図にそって歩き出す。分かりやすい目印がちゃんと書いてあって、苦労しないでスーパーへと辿り着く。

悠さまはお魚やお肉を食べると、凄く幸せそうなお顔をするのでその辺を中心に買う事にした。好き嫌いはないみたいだから、お野菜もずんずんとカゴに詰め込む。

カゴが一杯になったところで会計を済ませ、スーパーを後にした。さつきちよつとだけ見えたのだが、どうやら近くに悠さまの学校があるらしいのだ。

実は五箇条を破ってないかとヒヤヒヤしてたりする。でも流石に学校に乗り込む訳にもいかず。悶々しながら待ってるのもなんだから、ついでに迎えに行く事にしよう。

「おお、ベルチェ。迎えに来てくれたのか。流石俺様の妻、マリアのような優しさだな」

「そんな悠さま。貞淑な妻として当然の行いです」

「べ、ベルチェ……」

「あ、悠さま……」

なあんて言いながら熱い抱擁を……。

——悠さまっ、今あなたのベルチェが迎えに参ります！

とてててつと駆け出したのは良いが、直ぐに見てはいけない光景を目の当たりにする。

「は、悠さま……そんなっ」

悠さまと瑞池さんが、楽しそうに笑いながら下校していたのだ。周りに他の生徒の姿はなく、誰がどうみても良い雰囲気。

そんな、そんな——そんなに調教されたいのですか？

「ウフフフ」

やっぱり、悠さまはきちんと私が見てあげなくちゃ。浮気は犯罪だもの、悠さまの手を罪に染めたくなんてない。きっと悠さまも、私の妻心をわかってくれるはずだ。

まさか白昼堂々と破られるとは思ってもみなかったが、これも仕方ないこと。

「……」

私の姿が見えたのか、絶句する悠さまを前に、私は笑顔を作っ
て見せた。

「ウフツ、ウフフフ。悠さまは、一体何をなさってるんですかあ
〜？」

分かって下さいね。これも貞淑な妻としての行いなのです。

第十五項 監禁するか人外になるか……

「べ、ベルチェ……」

なんでお前がここに――。

慌てて辺りを見回してみると、周囲に人影が全くなかった。夕日をバックに伸びてくるベルチェの影が、やけに黒く爛々としている。今にもギロツと目玉が覗きそうだ。

「第三条。如何なる場合でも夫は妻意外の異性と二人きりになる事は許されない。破ったら……ふふっ」

その笑顔怖いからやめてくださいお願いします。つかちょっと樂觀視し過ぎたかもしれないねえ。マジで監禁されるじゃね？ 俺ってばそんなのに耐えられるほど図太い神経してないんだがっ。

「第三条ってなに？」

「た、大河。今はちょっと黙っててくれないか？」

「は？ 何よそれ。どういう意味……？」

ヤバい、地雷か。なんだよこれ。あっちもこっちも地雷だらけ。俺はいつの間にか地雷源に足を踏み入れたのか。

「悠？」

どうやら後方にも敵を作ってしまった模様。前門の悪鬼と後門の虎ってところか。どっちを通ってもただじゃすまないな。

殺気と覇気が入り混じるこの空間で、狭間にいる我が神経がちよっとパニックをおこしてきやがった。麻薬を脳みそに直接ぶちこまれたかのような、ふらっと何か大切なものをあっさり無くしてしまったかのような喪失感に襲われる。

「さあ、悠さま。帰りましょ？ 家には楽しい事が沢山待ってますよ。――主に私に」

絶対に帰らねえ。帰ってたらなにされるか、想像するだけでもおそろしいぜよ。

「ねえ悠。黙ってるなんて随分な言いぐさじゃない？ あたし、何か悪い事でも言った？」

言った、言っただけで言ったって言っちゃいけない――ってああもう訳わからんっ。どうしろってんだよ？

「ふふ、悠さま？」

甘ったるい声で、天国にでも誘うかのようなベルチェ。

「悠？ 説明してくれない……？」

少しでも振動を与えれば崩壊してしまいそうな、壊れかけのダム状態な大河。

——死んだ、どっちに転んでも絶対死んだ。ベルチェの方に行けば俺だけ戦時中にタイムスリップするし、大河の方に行って五箇条について説明すれば、問答無用で死滅させられる。

どうしてだ、どうして俺ばかりこんな目に。毎日神様にお祈りしてないからか？ 神なんてクソくらえって言うかクソでも食らってろ、って思ってるからか？

確かに地蔵に供えてあった小銭をくすねたり、ピンセット使ってコイン投入口に細工したりもしてきたが、そこまでか！？ そこまで悪いこっちゃねえだろ！！

「……逃げるが勝ち！」

ベルチェの方に一步を踏み出すふりをして、一瞬のスキを狙い直ぐ様振り返って走り出す。

大河はケンカは滅法強いが、足なら俺の方が少しだけ速い。ベルチェは多分、見たまんまだから逃げきれるだろう。

「あっ、悠さまー！？」

「悠あああっ、あんたあたしから逃げるなんて良い度胸してんじやないのよ！？」

怒声に対して聞こえないふりをしつつ、全力で走る、走る、走る！！ 止まれば死、逃げ切れても……路頭に迷う。どっちかって言われれば俺は迷わず後者を選ぶ。まだ彼女の一人も作ったことねえんだ。や、妻は出来たがあれは置いという。

こんなくだらない理由で殺されてたまるかってんだっ。

「アッハハハハ！！ 悠さま〜？ 手錠と縄どちらが好みですかあ？！」

「はーるーかーっ！ 無限乱舞くらわせて神経を虫食いみたいにズタズタにしてやる！！ やるって言うか殺る！」

怖っ！！ なんか恐ろしいこと叫びながら追っかけてくるんですけどー！？ しかもベルチェさんは何で笑ってらっしゃる？！ それに俺はどちらもお好みじゃない！！

あと大河さんの無限乱舞って何の技ですか！？ それは人間の身体能力で出来る技なんですか！？

「うおおおおっ！！」

こんなんで死んでたまるかああああっ！

気合いじゃもうどうにもなんないっぽいけど、俺にだって人並みの人権を持って生きる権利があるはずだっ！！

「悠のくせにあたしに逆らうなんて百年早いんだよ！！」

「そうですねっ、悠さまは籠の中の鳥。既に人として生きる権利を、五箇条によっていくつか放棄してるんですよ〜！？」

——速攻で否定された！

「嫌だあああっ、ぜってー逃げ切ってやる！！」

「——いい子だから止まりなさいよ!」

そのいい子を殺す気満々で追っかけてんのはどこのどいつだ!!

——畜生、さっきまで大河と良い雰囲気だったのにベルチェのせいで。　なんでこうなんだよ、くそ野郎……っ。

「はあ、はあ、くっ、はあ……ふ、振りきったか?」

俺は逆走して学校まで戻って来ていた。ここなら隠れる場所には困らないし、まさか学校に戻って来るとはベルチェ達も思わまい。まあ、一つ不安要素があるとすれば、大河が異常にキレるってことなんだが。

焼却炉の裏に身を潜め、息を整えてからそっつと校舎の方を窺ってみる。

——ふむ、特に問題なしっ。

どうやら俺の判断は間違ってたようだ。ひとまず安心。

忍び足で焼却炉の裏から出て、そっつと辺りを窺いつつ校舎の方へと向かう。家に帰ってもベルチェ達が待ち構えてるだろうから、

今はここで時間を潰すしかないのだ。

「あれ〜？」

「うお……っ」

背中からかかった声に身体が硬直する。どうしてだか、こういう状態だと物音に敏感になってしまうのだ。更に言えば、どこかで聞いたことのある声だった。

「穂村くん？ ……なにしてるの？」

「あ、朝賀か——」

やべ、めっちゃ心臓がドクドクいってるよ。

ゆっくりと振り返った先に居たのは、私服姿の朝賀だった。ちょっと大きめのオーバーオールという珍しい格好だったが、可愛いので特につっこまない。

「俺はちよっと。朝賀は？」

「わたし？ わたしは忘れもの。先週の数学の宿題やってなくてねー。でへへ」

でへへじゃねえよ、でへへじゃ。先週の宿題って、良く教師許したな。あれか？ 可愛いから何でもオッケーってやつなのか？

朝賀は照れたように目を逸らしながら、脇に抱えていたプリントをどうだと言わんばかりに見せつける。

「で？ 穂村くんはまた大河絡みかな？　なんかこそそしてみたいけど」

「ま、まあな」

キャラにそぐわない鋭さでスバリ当ててくる。朝賀は顎に人差し指を添えて、探偵のようにむうつと唸っていた。容姿や格好は別として、だが――。

「また大河に何かしたんでしょー」

「またって何だまたって。いや間違いじゃねえけどよ」

「あははっ、穂村くんも飽きないねー」

お前に言われたくないよ暇人。

「それで、家に帰れないと？」

「あ、ああ。帰ったら多分死ぬ」

かなり物騒なことを言ってるが、朝賀も冗談だとは思うまい。俺と同じくらい大河の性格を理解しているのだから。大河にちよっかいを出す、イコール命懸けなのだ。

「うんうん、そっかそっか。じゃ、わたしの家に匿ってあげるねっ」

「……は？」

「よし、そうと決まれば急いで帰ろー！」

朝賀は一人でグッと拳を空に向かって突き出し、満面の笑みで歩いて行った。

「なにしてるの？ 早く行こ？」

「……」

やー、んー、どうしたもんか。不思議だ、朝賀がどこをどうしたらこんな結論に到ったのか聞いただいたい。だがそれをすれば俺の脳は確実にパニックをおこすだろう。

それにもしついて行かないで、朝賀が大河に連絡でもしたらそれこそ大変な事になる。

「ま、仕方ないか……」

最近はめっきりと馴れてしまった、流されるという行為をとる事にしよう。

第十六項 朝賀家の人々

空が曇り、日が落ちかけてきた頃。学校から徒歩20分。一際地味な一軒家の前に、俺は立ち尽くしていた。気分がどんよりしているのは、空から今にも雨が降りそうだからか。いや、違うな。

「穂村くん？ 入らないの？」

「あ、ああ。でも良いのか？」

「うん？ わたしは構わないけどー」

こいつだ。俺の目の前で同級生の男を招く事に対して、なんの不安やら緊張やらを全く見せないこの朝賀のせいなのだ。ウザさで言えば天下一品の朝賀も、まさかここまでアホだとは思っていないかった。

「んじゃ、邪魔するな」

「うんっ、上がって上がって」

「――の前に一つ訊くけど、今誰か居る？」

「いるよー。今はお母さんが居るかな。あとお姉ちゃん」

「そっか、ならしい」

よしよし、さすがに二人つてのはマズいからな。ベルチェにバレたら殺されるし、家族が居るなら大丈夫だろ。

肩が弾む朝賀の後に続いて玄関を通る。なかなか整理された玄関で、鮭をくわえた熊の置物が置いてあったりした。

「お邪魔します……」

「どうぞどうぞ。——お母さん！ 帰ったよー、友達連れて来たっつ」

奥からパタパタとスリッパの音がして、廊下の角からひょっこりと女の人が顔を覗かす。どこか警戒してる小動物のようだ。くりつとした瞳は浅賀そっくりで、やっぱり親子なんだなあとと思う。身長はベルチェと良い勝負——浅賀と同じくらいで、目以外のパーツがどれもちんまい。

「おかーさん！ 友達だってば！」

朝賀の怒声にビクツと肩を震わせて、ピューっと逃げ出して行ってしまった。

なんだ今の。朝賀の母親？

「ああもうっ。ごめんね、お母さん泣き虫で臆病なの」

「そ、そうか。あの母あるからこそ朝賀なんだな……」

いやあ、遺伝って不思議だ。まさか母親も泣き虫なんて。それも顔を合わせるのさえ怖がる臆病っぷり。

「？ まあ、馴れたら寄ってくと思うよ」

寄って来るって、お前の母親は動物か。

「ほら、上がって。二階の手前がわたしの部屋だから先に行ってね」

それだけ言い残して、朝賀は奥へと消えていった。「お母さんジューズある！？」なんて聞こえてくるのは神経が過敏になってるからか。

「……」

来なけりゃ良かった。さっきはベルチェ達に追われていた恐怖でどうにかしてたんだそうに違いない。

朝賀に悪いが、帰ろう。

踵を返してノブに手をかける。

——や、でもここで帰ったら明日朝賀にグチグチ言われて大河に朝賀の家に居たのがバレ、滅……。

精神的ダメージを負うか、大河の手によって身体的暴行を受けるか。どっちも嫌だがどちらかと言えばこっちの方が良い気がする。まあ、どちらにしろ明日大河に会ったらボコボコなんだろうなあ。……うん、こっちの方が良い。

「幸々！！ 私の下着知らない？」

「お姉ちゃん！ 裸で歩き回らないでよっ。友達来てるんだから！」

——は、裸っすか。

邪な想像を振り払って、再びノブに手を掛ける。よ、よし、やっぱ帰ろう。ここは俺が来て良い場所じゃないんだ。所謂女の園ってやつなんだ。そうさ、裸で歩き回るキチガイがいるくらいだから、自称常識人の俺は確実に浮く。もうふわっふわに。完全に大気圏を越すね。

「あら？ 男の子……？」

「へ？」

聞きなれない声に反射的に振り向いてしまう。ボサボサの髪をぼりぼり掻きながら、下着にスケスケのネグリジェっていう、男子高校生には刺激の強すぎる光景が広がっていた。

「こんにちは」

「あ、こんちは……」

ぺこりと頭を下げられる。あ、どうもって感じで返すと、くすりと笑われてしまった。

め、目のやり場にすっげー困るんですが。なんでこのお方は男の前で平気なんですか。普通、キヤーとかいやあああつとあるだろ。ベルチェと同類？

「きみ、幸の彼氏？」

ニマニマしながら、とことこと近寄って来る。長い足が、キレイに直線上を歩いているかのようだった。

「い、いや、違いますっ」

「ふーん、へー」

いろんな角度から、因縁つけるチンピラみたいに観察される。ネグリジェの隙間からチラッチラと見えるブツがあるのは見て見ぬフリをしておこう。うむ、何て紳士な俺。

「私、^{あゆむ}歩。よろしく」

「は、はあ。穂村悠っす」

突然の自己紹介に若干戸惑ったが、なんとか平凡な自己紹介をして握手を交わした。

「ふふっ」

猫のような目が、獲物を狙う狩人みたいになっていた。背中に寒気を感じ、思わず後退りしてしまう。

「私達、これで知り合いよね？」

「ま、まあそうですね」

——ガシッと腕を掴まれる。細く長い指が白くなるほどがちり

とだ。爪が皮膚にくい込んでかなり痛い。

ベルチェや大河のように命のピンチではなく、猟奇的に虐められ
そうなのだ。虐められるって子供か俺は、とは思うが俺の本能が逃
げろと言っている。

「じゃあ来て」

「はい!？」

グイイイイイツと引っ張られ、階段を無理やりのぼらされる。
ちよっと反抗してみたが、びくともしない。

す、すげー力だ……。

段差に躓きながら、なんとかあがりきりさつき朝賀が言っていた
部屋を突っ切って奥の部屋へと連れ込まれた。

「なんですかいきなり!？」

部屋の中心へ押し込まれる。歩さんは後ろ手にドアをしめ、妖艶
な笑みを浮かべた。唇を舐める舌が艶めかしい。

つか、部屋汚いっ!! 足の踏み場がないって言うより、踏む場
所全部が服なんですけどっ。

高そうなワンピースや、今は春なのにコートや、もし本当に着て
たら絶対直視出来ないくらい露出の激しい水着やら。とにかくあり
とあらゆる種類の服が敷き詰められといったのだ。

「これ、片付けるの手伝ってほしいのよ。私、こう見えて片付けとか下手なの」

いや、見たまんまだし。

「なんで俺が?! 今知り合ったばかりでしょうが!!」

「今もクソもないわ。知り合ったらもう知り合い。知り合いつてことは私を助けないといけないの」

なんだその「お前の物は俺の物」に通じる理不尽かつ、意味もなく正論を気取った言いぐさは!?

「そういう事だから」

「どういう事ですか!? そういう……が何をさすのか俺にはさっぱりわかりませんよ!？」

「うっさいわねえ。静かにしてよ小さい男ね」

俺が悪いのか!? なんで俺が悪者みたいに言われてんだ?! 俺が怒鳴ってるのは圧倒的にあんたのせいだし、あんたに小さいだなんだって言われるほど親しくもねェ。つかツツコミどころが多すぎてもう訳わかんねえよ!!

「やってくれたら身体触らせてあげるからんっ」

パチッとウィンクが飛んでくる。俺は飛んできたそれを冷静にかわし、ギロリと睨み付けた。

「結構です。どうせ、はい手とかだろ。それにあんた何か……汚い」

「汚い！？　今汚いって言った！！？　ああ私汚いなんて直接的に言われるの初めてだわっ。これでもモデルなのに……」

モデルって、これが？

膝から崩れ落ちた歩さんは、ボサボサの髪を床につけ甲子園で負けた高校球児のごとく項垂れていた。

まあ、モデルだからこの服の量は頷けるが……清潔感は何もない。

「うっ、うう、きちゃないって言われた……」

ああ、この人も朝賀の家族なんだな。

しとしとと涙で床っていうか服を濡らす。きちゃいなんて可愛い言い方はしてないが、本人には悪いけどお世辞にもキレイとは言えない。ボサボサだし？　服装もなんかおかしいし？

ま、ちょっと心が痛んだのも事実だが。歩さんって、普通にしてたら凄い美人だもんなあ。

「あ、その……そこまでじゃないんで気にしないで下さいよ」

「ほ、ホント？　私、汚くない……？」

ウルウルと涙腺が崩壊した瞳で、懇願する自己破産寸前の人みたいに俺を見上げる。さっきまでとは別人みたいな仕草に、更に胸が軋んだ。

「え、まあ。どっちかって言うところ綺麗な方なんじゃ？」

容姿が、だけど。

「……あ、ありがと。じゃあ——」

ずっと音もなく立ち上がり、俺の肩にそっと手を乗せた。鼻先には涙でぐしゃぐしゃになった歩さんの顔がある。髪はボサボサだが、こうして顔だけ見るとやっぱりモデルなんだなあと実感してしまった。

「結婚しよう」

「なんでっ!？」

「あれ？ 穂村くん!？ どこ？」

「ちっ、もう少しでゲット出来たのに……」

ちって言ったよ?! 今、ちって言いましたよこの人!？ さっきはなんか結婚しようとかプロポーズされたような気もしないでもないけど。やっぱこの人、いろんな意味で危ない。

「私、彼氏が出来ても家に招くと不潔だって言われて別れちゃうの」
そりゃ汚いにも限度ってものがあるでしょう。彼氏の気持ちも良くなるっ。

「でも、キレイって言われたのは初めなの。だから、私の部屋を見

て、初めてキレイって言うてくれた人と結婚しようって決意して――」

その決意を、部屋を片付けようって決意に是非とも回してほしかったな。それだけの覚悟があるんなら部屋の片付けくらい楽勝だろうに。しかも俺が言ったのは部屋じゃねェから。

ま、こんな時くらいベルチェに役だってもらうか。

「や、俺妻居ますから」

「……えっ？」

「俺もう結婚してます」

「……」

肩に置かれていた手がだらんと脱力し、某ホラー映画のように猫背になって四肢から力が抜けていた。

そして――。

「うわああああんっ、弄ばれたああああ!!!
ラチックな展開がイイ!!!」 ああでもこの昼下

本格的に頭のおかしい人だったようだ。

第十六項 朝賀家の人々（後書き）

最近書く気が全くおかりません（泣）おそらく更新がいままで以上に遅くなるやも……。ま、気まぐれな性格なんで意外と早く出来ちゃう可能性も捨てきれませんが、出来るだけ早く更新したいと思っています。。。

第十七項 泣き虫と雨音

「ごめんね、お姉ちゃん変わってるから」

「……お前もな」

朝賀のおかげで何とかあの異様な部屋から脱出する事に成功した。歩さんは俺が部屋から出る時も泣き喚いていたが、朝賀も馴れてるらしく普通に無視。全体的におかしな家族でも、仲は良さそうだった。

「あ、雨降ってきたね」

「ん、ああ。本当だ」

部屋全体がぬいぐるみとか可愛いらしい置物で埋めつくされた、なんとも女の子らしい部屋。その部屋に一つだけある窓から見える景色は、生憎の雨だった。

さすがにベルチェ達も帰ったか？

このじゃじゃぶりの雨の中、どんなに大河とベルチェが根性据わってるからって探し回ったりはしないだろ。

「はい、ジュースどうぞ」

「ん、さんきゅ」

ちんまりとしたテーブルに乗るコップを手に取り、オレンジジュースを飲み干す。さっきまで歩さんの相手をしていたせいで、自分でも気付かぬうちに喉が渴いていたらしい。

ふっ、と息を吐くと、朝賀がニコニコしながら俺の顔を見ていた。

「あ、そういえば――」

ふと、思い出したように呟く。

「穂村くん何したの？ さっき大河から電話あったんだけど。いや、知らないって言うておいたけどさ」

マジか、すげえな大河。どんだけ勘忤えてんだ？

朝賀はこくとジュースを一口飲んで、窓の外に目を向ける。ふうっ、と溜め息を吐いてるのを見たところ、相当大河に言及されたと見える。それでも口をわらなかつたなんて、朝賀……イイ奴だな。

「や、なんつーか」

これだけ迷惑かけてるんだ、原因をちゃんと言うのが礼儀つてもんだが、内容が内容なだけに言えない。言ったら朝賀の中の俺が壊れてしまいそうで怖いのだ。

あまり喋らないうえに、目付きが悪いせいで女子は寄り付かない。そのなかでの朝賀はかなり貴重な存在だった。

「言いたくないなら良いよ。穂村くんと大河のケンカなんてしょっ

ちゅうだしねっ」

花が咲いたようにえへと笑い、ぼりぼりと照れ臭そうに頬を掻いた。朝賀、お前ホントに良い奴だな。惚れそうですよマジで。

泣き虫でうざい事この上ない朝賀幸にも、とてもとっても良い人っていう長所を発見。容姿も可愛いし、うざくなければ泣き虫も気にならないのだが。泣き虫プラスウザイは結構なマイナス点なのだ。

泣くっただけでも困りもののなのに、天性のウザさって……ダメダメだよなあ。

「でも穂村くん達ホント仲良いよね。いつからの付き合いだったけ？」

「……さあ？　いつからだろう？　なんかいつの間にか居たな」

「——なるほど、それか」

何かなるほど？

そう訊きたかったのだが、むーっと真剣な表情で考えこんでるよ
うなので放っておいた。

さめさめと降る雨を見つめ、平和だなあ、なんて思った。

しばらくは大河との事について話していたのだが、気付くと時間は6時30分を過ぎていて、いつの間になかなかヤバくなっていった。そろそろ帰らないと、マジで朝賀家に迷惑をかける事になるからだ。

つつても、行く場所なんてないし。はあ、何で俺一文無しの浪人生みたいなことしてんだろ。まだ健全平凡な高校生なのに。日々生命と精神崩壊の危機に襲われている。

「ねえ、何で大河が空手始めたか知ってる？」

「あ？ いや、知らない。俺だって知ったの大河が始めてから一ヶ月くらい気付かなかったから」

「そうなんだ。ねっ、穂村くんって大河のこと応援したりしてるのかな？」

な、なんかやけに大河のことつつこんでくるな。まさか――朝賀ってそっち？ お前がもしそっちの人なら、涙を流す男子が何人か居るんだが。

「まあ、大会の時は見に来てって命令されるし。それを抜きにしても、知り合いが全国大会出てるってのは嬉しいよ」

「ふうん、そっか。もしかして穂村くん、自分より女の子が強くても気にしないタイプ？」

どうだろうか。確かに強くても気にはしないけど、大河の場合そうでもないと思う。俺にとって、大河は強いからこそ大河なのだ。毎日努力してるのも知ってるし、それで弱いはずもない。変な強さ

じゃなくて、純粋な努力で掴んだ強さ。

「ああ、多分。大河みたいな奴だったら、むしろ尊敬出来るから良いんじゃないかねえの」

相手のことを尊敬し、尊重出来ない付き合いが長く続くはずがない。だから俺は一つでも凄いと思った奴は、基本好きな部類に入ると思う。ベルチェだって、あの怖いまでの真面目さはすげーって思った。朝賀だって、泣き虫だけど自分より他人を考えてやれる良い奴なんだ。

「穂村くん、やっぱり変わってるね。普通男の子って、自分より弱い女の子が好きだって聞くのに」

「そんなもん、守ってやるなんていう男のエゴだよ。自分に自信がない奴がする事だって」

「はは、そうだね。うんっ、穂村くんの言う通りだよ」

朝賀は心底嬉しそうに目を細めて、くびくびっとジュースを飲み干す。氷が溶けて、涼しげにコップを鳴らした。

「……俺、そろそろ帰るな」

「えっ？　わたしは別に良いよ？　今行ったら大河も怒ってるだろうし」

「いや、有り難いけど遠慮する。お前と話してたら、なんかどうでも良くなってきた」

「そ？ 穂村くんが言いって言うならわたしは何も言えないけど……」

よっこらせ、と立ち上がりドアのノブに手をかけて部屋出る。見送りでもしてくれるらしく、朝賀も一緒に出てきた。若干、また歩さんに掴まるんじゃないかって不安もあったが、杞憂に終わったようだ。

階段をおりて、まだビクビクしている朝賀母に一礼し玄関で靴を履く。

「じゃな、世話になった」

「ううん、わたしも楽しかったからいいよっ。……でも、気をつけてね？」

「……おう、気をつける」

それが車とかをさしていないのは明らかだろう。俺はこれから死地に行こうとしているのだ。

朝賀に透明な100円傘を借りて朝賀家を後にする。

結構降ってるな。ここから家まで20分ってところか。

この雨じゃ、家につく頃にはグシャグシャになっているだろう。ま、別に良いけど。

水溜まりを避けるようにしつつ、歩道を歩く。傘に当たる雨音がリズムカルでなんだか心地よい。空気を澄んでるような気もするし。

俺ってば、雨は好きかも。

途中、通りかかった車に水を引っ掛けられそうになりながら家路へと急いだ。

そーいや雨の歌みたいのなかったっけ？　ぴちぴちちやっぷちやっぷ……なんだったか？　擬音でまとめられた奇跡みたいな歌詞だったと思うんだけど。

「――、――！！」

お？　今なんか、奇声が聞こえたような……。雨音のせいでなかなか聞き取れない。邪魔くさいったらありやしない。うむ、やはり雨は嫌いだ。

さっきまで心地よい雨音も、一旦気になる事が出来るとウザイだけの朝賀モードに早変わり。我ながら理不尽な理由だ。

声の聞こえる方へと足を進め、電柱のある角を曲がった先にそれは居た。

「……ベルチェ」

とぼとぼとご主人様と離ればなれになってしまった仔犬のように肩を落しながら、しきりに喚いている。

――あいつ、傘もささないで何してんだ？

びしょびしょになった身体を気にしようともせず、キョロキョロと辺りを気にしていた。服が肌に張り付き、下着のラインまでく

つきり見えてるのともんでも恰好なのに、ベルチェは気にもしていない。このままじゃ、どこかの持って帰っちゃうおじさんに文字通り持って帰られてしまいそうだ。

良く耳をすますと、お仕置きされた子供みたいな泣き言が聞こえてくる。

「悠さまー!？ どこですかっ？ がえっでぎてくださいいっつ」

わああんわああん、と泣きながら俺を探していたのだ。もしかしたら、帰り道で会ってからずっと探していたのかもしれない。や、買い物カゴを持っていないから一度は帰ったみたいだが。

「うええっ、夕御飯一緒に食べましょうよ……。私、お腹空きました……」

ぐすっ、と鼻をすすりギュツと目を閉じて顔を両手で覆ってしまった。

「一人はいやです、二人がいいって言ったじゃないですか……」

ベルチェはその場にしゃがみこんで、本格的に泣き出してしまう。雨が無情にもベルチェの震える身体に降り注ぎ、確実に体温を奪っていく。

——ベルチェ。

考えるまでもなかった。考える前に、身体が一步を踏み出していたのだ。あれを放っておくのは、男としてうんぬんより、人としてやってはいけない事の一つである気がしてならないからだ。

それが、自分のせいなら尚更の事。全然分かってなかったんだ。分かったつもりで居た。泣き虫で生真面目で、ちょっと頭のおかしい奴くらいにしか思ってたし、実際そんな風に見えていた。

ただ、極度の寂しがりやが、自分を好きでいて欲しいと叫んでいるように聞こえたんだ。

「ベルチェ——！！」

ベルチェに歩み寄るよりも早く、声が先にうずくまる彼女に向かっていた。

第十七項 泣き虫と雨音（後書き）

沢山の要望があったので、何ヵ月かぶりに更新。いったいいつまで続くかは不明ですが、生温かい気持ちで見守っていただけると嬉しいです。

第十八項 なきごえ

——いつの間にこうなってしまったのだろう。何も変わらなかったのに。いや、変えようとしなかったのに。ううん。これも違う。変えたくなかったんだ。変わるのが怖かったんだ。何よりも耐えがたかったんだ。

いつものように学校に行って、いつものように憎まれ口たたいて、いつものように意味のない会話をして、いつものように——。

「なんでだろ……」

ベッドに潜り込んで、窓から見えるぽつぽつと降りだしてきた雨をぼんやりと眺めた。

最近、キモチを隠すのが下手になってきたと思う。自分でも気付かないうちに変なこと口走ってたしする上に、まともに目が合わせられない時だってある。あたしにはそれくらいしか出来ないっていうのに、それすらダメになったら……もう何もかも終わりだ。

弱い自分なんて見せたくない。弱い自分なんて嫌いだ。きっとこんな自分を彼は嫌うだろう。彼は頑張る人が好きで、努力して得た強さをキレイだと言える人なのだから。

小さい頃からあたしはこうだった。口だけは達者で、そのくせ内心はビクビクしてる。きっかけは違うけど、そんな自分を変えたくて空手を始めたのに。全然強くなった気がしない。

むしろ力に任せて弱くなったような気すらする。

——届かない。どんなに背伸びしても、あたしには決して届くことのない。それでも諦めずに頑張ってきたのに、それも無駄に終わるそうだ。

「あんな事で怒って、怒鳴って、また力に任せて。ははっ、最低だ、あたし……」

黙っていてくれて凄く冷たい言葉だったけど、そこまで酷い言葉でもない。悠は純粹にベルチェさんと話をするためだけに言ったのだから。

ベルチェ・リナワーカー。朝起きたら部屋にキノコがはえていた。みたいな感じで現れた悠の妻。最初は悠のマヌケくらいにか思ってたかったけど、今は違う。

あの人は純粹だ。あの人は強い。あの人は真面目だ。あの人は本気だ。あの人は——卑怯だ。

突然やって来て横からさらって行ったっていうのに、全然憎めない。腹立たしくもない。ホント、卑怯だあの人は。

悠は直接的じゃないけど、迷惑してるみたいなのを言っていた。でも違うような気がする。迷惑してるんじゃないくて、戸惑ってるんだ。この差は大きいと思う。

だって迷惑っていうのは嫌がってるって事で、戸惑ってるっていうのは頭がついてこれてないだけ。嫌がってはいないのだ。

「はあ、何やってんだか……」

まるで道化。ころころと感情に弄ばれて、泣く事も出来なくて諦めることも出来なくて……。ちよつと優しくされただけで凄く嬉しいのに、憎まれ口叩いて——自分でも何がしたいのか良くわからない。

でも、もし——。

「もし……？」

そうだった。『もし』なんて二文字で片付けちゃいけないんだ。そんな曖昧で自分に都合の良いモノがあるはずないのだ。それなら最初から努力なんてしない方がマシ、あたしは止まらなないと決めたのだから。

そりゃ、今はちよつと関係が崩れるのが怖いから濁してるけど……でも、夏が終わった頃には——。

想像して、笑みがこぼれて、また自己嫌悪。

ぐるぐるぐるぐる。元々考えるのは得意じゃない。勉強とか答えのあるモノなら得意だけど、わかり得ないモノは苦手だ。

だから、行動しよう。そうしようと決意して、行動してきたんだ。また変わらないうかがれば良いだけのこと。敵は強大。米粒ほどの勇氣で立ち向かえるほど、相手の覚悟はハンパじゃない。

空手は悠と向き合う強さを教えてはくれなかったけど、強敵と対峙した時の闘争心を教えてくれた。

それくらいの覚悟はある。ベルチェさんを押し退けて、自分が前に出る度胸ならある。

これは戦いなんだ。ベルチェさんだってきつとそう思ってるはずなら、あたしも受けて立とうじゃないか。悠絡みでの一対一なら絶対に負けない。負けちゃいけないんだ。

「よっし、そうと決まれば謝りに行こ」

さっきは言い過ぎたって。いや、あくまでも下手に出ないように、弱みを見せないようにしながら。

ベッドから飛び降りて、足早に玄関に向かい靴を履く。さっき幸に電話した時、知らないと言っていたから幸の所ではないだろう。悠のことだ、きつとどこかで雨宿りしてるはずだ。

——ってことは、実家はないし……学校かな？

あたしは折りたたみ傘を手に、学校へと向かった。

ぴっちぴっち、ちゃっぷちゃっぷらんらん——。

昔、悠と雨の日は必ずと言っていいほど歌っていた歌を頭の中で口ずさみながら歩みを速めた。さっき窓から見た時よりも雨の勢い

はかなり強くなっていて、傘に当たる雨が少し重いくらいだ。

雨のせいでひとつこ一人居ない道のりをずんずんと進んでいく。小中高と学校がかなり近かったから、通学路はほとんど変わらない。毎日のように、ここを悠と肩を並べて歩いていた。

あとは二つ目の角を曲がれば、穂村宅。そこから真っ直ぐ行けば通っていた中学校が見えるんだけど。

一つ目の角を通りかかったところで、景色にそぐわない金色の物体を発見した。

うずくまって苦しそうな鳴咽をもらすそれは、酷く儚げに見えた。

ベルチェさん……。

ここいらであれだけ鮮やかな金髪を、あたしは一人しか知らない。いや、それより何より……ずっと悠を探していたのか？

雨が降りそうだったから途中で別れ、あたしは家に帰った。だからベルチェも帰ったと、ずっとそう思ってた。思ってたのに――。

傘もささずに全身を濡らし、親鳥を呼ぶヒナのように悠の名前を叫んでいた。泣きながら、でも力強く。

「あ……っ」

奥から出て来た人影に慌てて身を隠す。塀を背にして、そっと角からベルチェさんの様子を覗いてみた。丁度、出て来た人影――悠がベルチェさんの名前を呼びながら駆け寄っていたのだ。

悠は顔を苦痛に歪めながら、雨から守るようにベルチェさんの上におおい被さる。傘を使えば良いのに、投げ捨ててしまうほど夢中になっていたのか。

悠がぽつりと呟き、ベルチェさんを立ち上がらせる。

「――一人は嫌だって言ったじゃないですか！！」

確かに聞こえた悲痛な叫びは、悠の表情を更に曇らせる。ベルチェさんは悠の胸にしがみつき、声をあげて泣いていた。

悠も抱き締め返すことこそしなかったが、慈しむように優しく頭を撫でていた。

瞬間――ドクッ、と。心臓が一瞬だけ停止し、全身に血液が回らずに極寒の地に裸で放り込まれたような錯覚に襲われる。

なんで、どうして。あたしにはそんなのばかり。自分でも笑っちゃう。何であるそこに居るのが自分じゃないのかなあって、意味のない想像を巡らせてしまう。

負けないと誓った途端これだ、もう既に心が折れそう。あはは……、バカみたい。悠にはいつもバカだのアホだとまぬけだと言ってるけど、一番バカで一番アホで一番まぬけなのは、感情に振り回される道化なのだから。

「……悪い、だから泣くな」

静かに聞こえた悠の声も、あたしを苦しめる一因でしかない。

——あたしは道化。自分すらもちゃんと理解出来ず、自他に左右される周りから見ればただの笑い種。

「悠、ごめんっ。あたし、めっちゃバカだ……」

こんなのに好かれてしまった悠が哀れで仕方ない。

——暴れることしか知らない、赤子のような笑い絵。

だから、諦めることだって出来やしないただの臆病者なんだ。

第十九項 パツキンは夢だ!!とさりげなく主張してみる。

泣きじゃくるベルチェを立ち上がらせて、悪いと謝るとグチグチグチグチと呪いでも吐くように、俺への不満を言いつのつた。

妻なのに全然自分のことを気にしてくれないとか、妻なのにキスの一つもしてくれないとか、妻なのに夜這いに来てくれないとか…、その他教育に悪い罵詈雑言を吐きまくったのだ。

そして、何よりも効いたのが二回目となる、胸が締め付けられるような叫び。

『一人は嫌だって言ったじゃないですか!』

どうして自分がこんなにも罪の意識にかられねばならないのか。何でこんなにも苦しいのか。全部良くわからん。

わかんないのに、何故か謝らないといけないと思ったんだ。

「全部許します、許しちゃいますから、早く帰ってきてください…」

俺の胸にすがりつき、ぐすつと鼻をすする。見上げた瞳が救いを求めているような気がして、俺の手はベルチェの頭に乗せられていたんだ。

――あれから2週間。

修学旅行が間近に迫った日和。俺は頼杖をついてぼーっとしていた。腹がたつくらい痛快爽快に雲一つない青空を見上げる。2週間たった今でも、ベルチェの叫びが胸の中で渦巻いているようだった。苦しい、胸が痛い、どうして、何で――。

そんなのこの2週間ずっと考えてきた。考えても考えてもわからない時は、こうやって思考停止するのが一番。まあ、現実逃避とも言えなくない。

「ねむ……っ」

二週間経っても、日々ベルチェの犯罪紛いな誘惑兼馴れを利用した洗脳によって徐々に疲労を蓄積。脳内は完全に犯されてる感がある。

俺は青空から教室に目を移した。教室には机を囲んでキャツキヤと談笑する我がクラスメイトの姿がある。中でも目立つのが、大河と浅賀組だ。あそこは浅賀がいるから、スゲーうるさい。うるさいってかうざい。

特に浅賀が、10分に一回くらいは泣いてると思う。誰のせいとは言わないけど。

「よっ、悠。オレら同じ部屋だな」

「ん、ああ、だな」

目の前でニカッと白い歯を見せる雄也を適当にあしらって、最近の悩みの種、大河をぼんやりと眺めた。なんかしらないけど、避けられてるっぽい。心当たりはあるって言えば普通にある。でも大河はそこまで女々しくないし。

更に言えば、別に嫌われたって訳でもなさそうだった。声をかければ返事はちゃんとする。その返事がどこおかしなだけで。

「なあ、雄也」

「あん？」

「なんかさ、最近大河おかしくね？」

「……そうかあ？」

雄也は怪訝なで大河を眉間にシワを寄せながらじーつと見つめた。んー、としばらく唸っていたが、やがて力なく首を振る。

「いや？ オレには普段と一緒に見えるが？ つーかお前わかんねえのに、オレにわかるかよ」

だよなあ。付き合いなら俺はこのクラス、もといこの学校で一番長いはずだ。まだ一年足らずの雄也にわかるはずもないか。

「お？」

一瞬だけ、一秒もない時間大河と目が合ったような気がした。大河はすぐ気まずそうに目を逸らし談笑に戻ってしまう。俺、マジでなんかしたか？

「あゝ、でもハワイかあ。オレスゲー楽しみっ。なんたってパツキンだぜパツキン！」

「別に、珍しくもねえだろ……」

前までの俺だったら純粋な金髪は珍しいと感じたはずだ。今は目がチカチカするほど、日常の一部と化しているが。

「はあ！？ 枯れてんな悠は！ パツキンでぼん、きゅっ、ぼーん！ は日本男児の夢だろ！」

日本人の品位を著しく下げするような言動はやめろっ。つか、それ言ったらお前に惚れてる奴泣くぞ。

「ああ、しかもホテルの近くはビーチなんだぜっ。うっひっひっ」

グッの拳を握り締めてどっかいつちゃってる雄也。じゅるっと涎をすすり、にやけた顔を戻そうと頑張っている。アホだ、浅賀並にアホだこいつ。

——いや、それは少し言い過ぎかもしれない。

「おいっ、すっげえぞ！！」

その時、一人の男子生徒が慌ただしく教室へと飛び込んできた。ハア、ハアと息を切らした様子の男子生徒に、いち早く雄也が駆け寄り何か何かと訊ねる。ある意味尊敬に値する野次馬根性だ。

「な、なんかめっちゃ可愛い子が四組から回ってきてるんだとよっ。

しかも私服で、この学校の生徒じゃないらしい」

へえ、頭のおかしいやつってベルチェ以外にも居たんだな。

その方は教師に捕まるとかそんなのは気にしないんだろうか。や、気にしないからこそそのアホなんだろうけど。だがまあ、出来れば関わりあいたくない。

「おっ、来たみたいだぜっ!!」

テテテッ、と騒がしい足音とがしたかと思いきや、ガラッと乱暴な手つきで教室のドアが開け放たれた。

「――うえっ？」

さして興味がなかったし、思考停止に勤しんでいたため頬杖をついたままノロノロとドアの先を見たんだ。刹那、運命と偶然って言葉をテロをおこしてでもこの世界から抹消したくなってしまった。いいや、この言葉を歴史から葬り去るためならサミットだって襲ってやるさ。あえて丸腰で行ってやる。かき回すだけかき回して警察のお世話になってやる!

「――たのもー!!」

美しいソプラノが教室に響き、鮮やかな金髪を左右に乱しながら教室の中を見回していた。咄嗟に、防衛本能に従って机の下に身を隠す。

な、何故ベルチェがつ!?　ここ学校だよな。俺、実はバーチャルを見せられてるとかいう無駄にテクノロジーを駆使したドッキリ

じゃないよな!?

机の下で頭を抱え、必死に思考を巡らす。背後から聞こえるツカツカと、誰かが歩みよる音がひじょーに怖い。霊的雰囲気が出て怖いとか、この後の自分がどうなるかわからないから怖いのではない。

——俺実は予知スキル持っていたりしちゃったり?　と思っちゃうくらいオチが見えるのだ。オチが見える事ほど怖いものはない、とバカ母どもに植え付けられたツツコミとしての芸人魂が、なんでやねんなんでやねんっと叫んでいる。

「ふふ、ふふふふつ。悠さま、みーつけたっ!!」

耳にした者を蕩かせる魅惑のエンジェルボイスが、俺の聴覚にはサタンを鼻息で消し飛ばす天使の皮を被ったんだか良くわからない不思議生物だと思えなかった。

詰まるところの、晒し者になるっていうオチだ。大変遺憾だがな。

第十九項 パツキンは夢だ!!とさりげなく主張してみる。(後書き)

遅れましたが更新。

ちなみに今現在は、更新停止中より四話書いた三十四話を執筆中です。更新ペースはこのままフワツと(ナニッ!?)していく予定。大河編が終わったら番外編でも書こうか迷い中にて、何かリクエストがあればお願いします。無ければそのまま続けるので(苦笑)

第二十項 結婚宣言!!

「皆様どうも初めまして。わたくし、ベルチェと申します」

啞然とするクラスメイトの前に、ベルチェは深々と頭を下げた。

下げられた方はオドオドと、どうして良いのかわかっていない。それだけの混乱を強いられているのだろう。当然だ。ベルチェは並の容姿じゃない上、日本じゃ滅多に見かけない天然の金髪なのだから。

俺はと言うと、席に座ってぼーっとその様子を眺めていた。こんなのが突如とした現れたら関わり合いたくないというのが正直なところだが、渦中に居る俺が逃げ切れるはずがない。

「あ、あの、ベルチェ………さんは何用で？」

呆然とベルチェを凝視する大河の横から、誰に対しても好意的且つ迷惑を振り撒くフレンドリー娘浅賀が、きっと教室中の誰もが気になっているであろう疑問をぶつけた。

俺としてはその質問はよろしくない。ないが、早く帰れなどと言うおうものなら、ベルチェはその場で大号泣。泣きながらにっこりと笑い、どこからか縄やら手錠やらを取り出して不穏な発言をするだろう。

「えへっ、それはですね——」

奴は一旦言葉を区切り、ごそごそと持っていたバッグを漁る。多

分アレだ、アレに違いない。

今日の俺はベルチェお手製の弁当を持っていけと言われたのだけど、そんな危険なブツを持っていける訳がなかった。だから然り気無く置いて来たのだが、ついでに財布も忘れて。

現在までこうしてぬぼーっとしていたのだ、弁当がないから。

「お弁当を届けにっ」

ズイッ手に持った少し大きめの弁当箱と見せつけた。そして、男子諸君垂涎モノの笑顔を浮かべる。女子をもぼわあっとさせる微笑みはまさに魔性とも言えるだろう。

「と言うわけで、はい悠さま。忘れてましたよ？」

ベルチェはくるっと半回転し、弁当箱を丁寧に両手で持って、小鳥のように首をかしげた。ほんのり染まった頬が可愛らしい……じやなくて！　なんでわざわざ弁当届けに教室まで来るかな！？　つかたのもーってなんだたのもーって！

「お、おう。さんきゅ」

「いいえ。妻ですからっ、えへ」

「つまあああああっ！？」

いや、まあ驚くのも無理はないと思う。浅賀なんて顎が外れるんじゃないかって心配になるくらいだ。

しーんと静まりかえる教室に、ベルチェのくすくすと溢れ出る笑い声だけが響いていた。口元に手ををそえて、本当におかしそうにしている。そこまで自分が俺の妻だと宣言出来たのが嬉しいのだろうか。俺からすれば迷惑極まりないのに。

「ほ、穂村くん……、結婚してたの？」

朝賀がおおずと俺の方に目を向ける。クラスメイトも、若干声が震えている朝賀につられるかのように、俺に視線を集めた。

——な、何て言おう？ 軽いノリで「あははっ、実はそうなんだよねえ」って言うか？ いや、それじゃ何だかアホみたいだ。でも真剣に言おうものなら、この先マジでヤバイ展開——簡単に言うとな大河との事がすこぶるピンチになるよなあ。もうこの時点で、世間一般で言う修羅場ってヤツなんだろうけど。

「ま、まあな。それとなく結婚なんかしちやったりする」

「そ、それとなく……？」

ああっ、俺のバカっ。それとなく結婚て意味不明だしっ！

「じゃ、じゃなくて、なんとなく？」

「な、なんとなくで結婚しちゃったの？ っていうか何で疑問系？」

ぐっ、朝賀のくせに生意気だな。何でこんな時だけそこまで突っ込んでくるんだよ。

にっこりするベルチェに助けなを求めるべく目を配らせてみるが、

ベルチェは何を勘違いしたのか、ほっぺを赤らめてパチツとウィンクなんか飛ばしてきやがった。

速攻で無視を決めこみ、何か良い案は無いものかと思考を巡らせる。

「まあ、良いではないですか。私は悠さまを愛している。悠さまも私を愛している。故に結婚。ほらっ、なんにも間違っではないですよ？」

ぽんっ、と手を叩き一人訳知り顔でうんうんと満足そうに頷くベルチェ。

つか、お前はどうか知らんが、俺がいつお前を愛した？ 事実を捏造すんじゃないぞこのちびっこが。

しかもそんなどうでも良い理由で誰が納得するものか。

「ああ、そっか。そうだね？ 愛し合ってるから結婚したのかあ。うん、納得だよ」

朝賀の眩きを切っ掛けに、そこで「なーんだ」だの「じゃあ仕方ないな」だの「穂村くん、お幸せにねっ」だの次々と納得の聲があがっていた。

アホな！ お、俺周りにはこんなにアホだらけだったか！？ 仕方ないってなんだ畜生！！ お前は仕方ないで監禁を許せるか！？ 仕方ないで調教なんてまがましい行為を許せるって言うのか！？

「うふふ、悠さまっ。幸せになりましたよね？」

「……」

いやだ。こんな人生、俺は全力をもって拒否する。

キャピキャピと俺の腕にしがみつくベルチェを見下ろしながら、俺は三途の川の向こうに親父の姿を垣間見た……まだ生きてるけど、生き霊って事にしておく。

諦めて、大きな溜め息吐いた。吐き出した息と一緒に、ひっかかっていたプライドも抜けていったような気がした。

不意に顔をあげ、さっきまで向けていた場所に目を向けた。他意はない。ほとんど自然に見ただけなんだ。でもその光景は確実に、俺の胸を抉っていた。エグいくらいに抉っ……や、何でもない。

「……大河」

さっきまでそこに居た、大河の姿がなかったのだ。

「あ、あのベルチェさん学校はどこですか？　って言うか今日学校はいつたい……？」

そこで一人の女子生徒が他愛ない疑問をぶつける。名前は——知らん。後で雄也にでも聞いておくとして。

ぶっちゃけ、ベルチェが学校に行ってるのかすら知らない。行ってる素振りは全く見せていないけど、通信制なんてものもある位だし。つーかこいつ何歳なんだ？　うわ、俺そんな事すら知らなかったんじゃないアホらし。

「学校、ですか？　いえ、私もう大学は出たので」

「へ？」

この間抜けな呟きは俺である。

「ええっと、失礼ですけど、ベルチェさんておいくつなんですか？」

「23ですが」

「うえええええっ?!」

ちなむにこの無様な叫びも俺である。

教室中に響き渡った、穂村悠18歳既婚者ボイスが酷く耳障りだった。耳障りってなんだ人の声を失敬な。

「え、ええええ……？　なんで穂村くんが一番驚いてるの？」

朝賀の疑問も真っ当である。まさか、まさか相手の年齢も知らずに結婚するなんてアホな子が居るはずもなく。クラスメートからすれば、今まさに目撃してしまっているのだが俺だって好きで知らなかったんじゃない。ただ結婚出来るんだから、16は越えてるだろうなんて易い考えだったのもまた事実。

こいつなら中学生と言われても信じれる。ま、まあ、発育が良すぎる気もするけど。

「あ、いやほら、こいつちっこいし時々忘れるんだよな」

「あ、ああなるほ——」

「いゃん、悠さまそんなちっちゃくて可愛いだなんて……」

「……誰も可愛いなんて言ってるねえ」

どうしてこいつの脳は自分に都合の良い変換しか出来ないのだろう。神様、実は人間の脳じゃない別の何か入れちゃったんじゃないかね？
今なら、てへっ間違えちゃったかつこは——とかつこ閉じるっでも許してやるから。

「今言いましたよ？」

「……」

おいこら、早くしやがれ。じゃないと世界中にちらばる神に纏わるもの全てに落書きして回る人生を歩むぞ。良いのか、んなアホらしくも罪深い生き方しても。ああん？ だから早く間違えて宇宙人の脳味噌入れちゃいましたかつこ仮かつこ閉じるでも良いから電波を送信してくれよ。マジで。

第二十二項 第一条、発動。

些細な切っ掛けなんてこの世には山ほどある。んなこと普通に知ってたし、だからどうしたぐらいにしか思ってた。そう、今まででは。

多分周りからすれば羨ましいとかそんな感情が飛び交う事だろう。同情なんてしてくれる人間はいない。ましてや助けてくれる奴がいるはずもない。もし居たら一番にぶん殴って俺を助けろと天命を下してやる。

「あ……」

「んん？」

ベルチェの肩に手をかけて、グイグイと教室から追い出そうとしていた時。たまたま教室に入ってきた女子生徒と肩がぶつかったのだ。それだけ……なのだけれど、嫉妬と愛憎の申し子であるベルチェさんにはそれだけなんて言葉で片付けられるはずもなく。にっこりと不吉な笑みを浮かべ、俺の鼻先に人差し指を一本立てて見せた。

「うふふふ」

ベルチェは俺の耳元に顔を寄せてぼそつと呟く。

甘い吐息が耳に――なんて言ったら俺はもうベルチェに首輪つけられてるはずだ。

「一条……」

これが地獄の始まりだった。や、ベルチェが来た時点で、弁当を忘れた——って言うか持ってた時点で予想しておくべきだったのかもしれない。

ああ、一条な。

——結婚奴隷五箇条。

第一条、夫が妻以外の異性に触れたとき、妻は如何なる場合でも一時間夫に抱きつかなければならない。

俺の表情を察したのか、今度は逆にグイグイグイグイと俺の席まで連れて行かれ、無理矢理座らされる。

、羞恥心とか恥じらいとかを知らないベルチェの事だ、別に対したことでもなかったのだろう。彼女はクラス中が固唾を飲んで見ている場所で、使ってほしくない場面でその度胸を見せてくれた。

「では、失礼して……」

「ま、待てっ。こ、ここですか？ 俺すっげえ嫌なんだが」

抵抗も可能だっただろう。でも抵抗なんかすればどうなるかは百も承知。知りたくもない境地を見るよりはマシと思い甘んじて受け入れたのだ——。

ベルチェは俺の声など聞こえていないかのように、妖艶な笑みを浮かべ、俺の膝の上に横向きに座り首に腕を回す。所謂お姫様抱っ

こ状態だった。教室に溢れるざわめきをも無視する豪傑なベルチェさんは、うっとりと目を細める。ひそひそと聞こえる言葉の意味もほとんど理解出来ないほどの小さな囁きが、俺の神経を色んな意味で刺激した。

「ほ、穂村くん……ラブラブだねっ」

顔を真っ赤にして自分の事のように喜ぶ朝賀を睨みつつ、膝に乗っかる弾力のある感触と、胸板にフニツと触れるやーらかい感触をなんとか脳内から追い出そうと奮闘する。

えと、素数……あれ？ 0からだっけか？ それとも1からだっけか？

「ふふっ、はるかさまあゝ」

ベルチェが追い討ちをかけるように、ギュツと抱きついてくる。しかも甘えた声のオマケつきだ。迷惑ったらありやしない。こいつは絶対男ってモノを知らないな。

自慢じゃないが、俺はそれなりに我慢強いと思う。だから今までこの危険で甘美な誘惑に耐えてこられたのだ。他の奴だったら……想像するだけで吐き気がする。ああ、何て偉いんだ俺は。

「な、なあ悠。授業始まるぜ？」

動揺を隠しきれない様子の雄也に、ベルチェが蕩けた笑みを投げ掛けた。

「あっ、私の事はお気にせず。どうぞ、勉学にはげてください

な」

ベルチェの笑顔を見て、顔を紅潮させたのは何も男子だけではないだろう。女子をも倒すベルチェスマイルに敵はいないのだ。

熱い溜め息を漏らすクラスメイトを無視して、ベルチェは再び俺の首筋に顔を埋めた。

「……な、なんかごめん。俺じゃどうしようもなくてだな」

「あ、ああ気にすんな。少し驚いただけだからよ。まさか悠にこんな奥さんが居るなんて」

——俺だっぴいまだに信じられんわ。

「なあ、ベルチェ」

「はい？」

「楽しいか？」

「はいっ、すっごく」

さいですか。

そのまま授業が始まったが、教師は俺の膝の上でウトウトしてたベルチェの事を全く気にしていなかった。いや、あれはきっと現実から目をそらした結果なのだろう。そうに違いない。

、そうしているうちに6限目終了の鐘が鳴り、結局二時間近く俺の膝の上で寝ていた事になる。いや、起こしても良かったんだが……女子、がなあ。起こそうとすると、すげー目で睨んでくるんだよなあ。

クラスメイト全員がベルチェの味方になっているようで、なんとも居たたまれない。

「……おい」

「——んん」

「ベルチェでめえいつまで寝てやがる。帰るぞ」

「やあ……、悠さまそんなっ。ベッドでして下さいよ」

「……」

「……」

「……」

ま、待て待て待て待て！ 君達が今一体何を思い何をしようと思っているかは良くわかる。全て誤解——とも言えないのが凄く辛いところではあるが、きつとお前らが想像しているような事は一切ないはずだ。寝てる間はやんちゃされてるかどうかは知らんが。

だからそんな怨念めいた視線を送られても俺には何も言えない訳でだな。

「ちよっ、ベルチェ！ 起きろこのすかぽんたん!!」

「やん、焦らさないで……」

「……」

「……」

「……」

むにやむにや言いながら、俺の胸にベルチェがみつく。その表情は恍惚であり、その頬はりんごより真っ赤に染まっていた。これじゃあまるで、俺がもう手を出した人みたいに思われても仕方がない。いや、仕方がないで済ませられる問題じゃないのに。

「ぜ、絶対勘違いしてるぞ。ああ俺にはわかる。お前ら勘違いしてるっ」

「あ、あう。そ、そこは違いますよう。そこは鼻の穴ですう」

「な、何プレイだ!? 鼻穴プレイか悠?！」

「違うわっ! 人を真っ当な変態にしたてあげるじゃねえっ」

変態の時点で真っ当じゃないような気もする。ひそひそとイメージが崩れただの、変態だの抜かす女子どもにわからせるべく、真っ

先に突っ込んで来た雄也に突っ込み返した。

畜生、特に気にしてなかったがイメージが崩れたとか言われると結構ショックでかいなあ。それもこれも全面的にベルチェが悪い。これで俺が悪いだなんてぬかす奴が居てみる。鼻の穴にストロー突っ込んで100倍タバスコ飲ませるぞっ。ちんっ、ちんって鼻かんでも絶対取れないからなっ。

「はあ、悠さま相変わらず遅いですう……」

「相変わらず……？」

「いや！ 全てベルチェの妄想だっ！ 俺は一度も見せた事ないし見せようとも思わん！！」

朝賀の呟きにすかさず弁明をはかる。ぽかん、としていて浅賀本人は聞いているのか疑問が残る。まあ、周りには聞こえたはずだから大丈夫だろう。朝賀には後からでもなんとでも出来るしな。

「悠さまのせいで、CだったのがDになっちゃいましたあ」

「……頑張ったんだな、悠」

「……」

「……」

「……」

クラス中の視線が一点に集中砲火。

「そ、そんな目で俺を見んな……っ。やろうベルチェめ。起きたら油性ペンで鼻水垂らしたやんちゃ坊主にしてやる。ついでにラメをまるごと頭からぶっかけてキラッキラにしてやるからなっ」

「――ラメプレイか？」

「違うわッ!!」

ラメプレイってどんなだアホが……。っ―か何が楽しくてそんなくだらない事しなくちゃならねえんだよ。

第二十二項 ベルチェトラップ

「はあ……、疲れた」

「ただいま」

殺伐とした雰囲気からなんとか脱出し、ズタズタにされた精神を引きずるように家路へとついた。ベルチェはご機嫌どころか、血色が良くなってるんじゃないか？　と思うほどニコニコしている。こっちはあんなに苦勞していたのに、この可愛らしい笑顔が何とも腹立たしい。何が嬉しくてあんな公開羞恥プレイをうけにやならんのだ。

「ふんっ、ふふっ」

鼻唄混じりにパタパタとスリッパを鳴らしながら、ベルチェが居間の方へと消えて行った。たぶん、絶望料理を作るつもりなのだろう。はあ、ホントいつか死ぬぞ俺……。何が怖いって、将来ストレスでハゲないかが怖いさ。今だってこんなに苦勞してんのに、もし働くようになって、これ以上に人付き合いが重要になってきたら――。

「はあ、やってらんねえ」

今日何度目かの溜め息と共に、俺は階段を上がり部屋へと入る。ベルチェ対策にカギをしっかりとしめ、Yシャツを脱いでハンガーにかけた。いや、やっぱり洗濯しておこう。最近暑くなってきたり、それなりに汗もかいてるだろ。

タンスを開け、新しいシャツを出そうと……シャツ、シャ——。

「あ？」

なんだろう？ タンスの隅に薄いピンク色の布切れが挟まっている。不自然なほどにちよっぴりと、はしっこの部分だけが見えていた。そのはしっこを人差し指と親指でつまみ、感触を確かめてみる。

——柔らかいと言うか、ひどく肌触りが良い。

こんな感触の服なんて持ってなかったはずだし、そもそも薄いピンクなんて俺の趣味じゃない。基本、黒とか白とか地味なものを好む俺だ。絶対に有り得ない。

「んー……」

つまんだそのピンク色の物体を引き上げると、三角形の明らかに男物ではない下着が出現した。後を追えと言わんばかりに、ピンクの三角形の後から、これまた男には無縁の胸部を補助する下着が……。

「な、な、なななな……っ」

驚きと怒りが脳内で勝手に同居を始めたせいで、巧く言葉に出来ない。一旦深呼吸をして、改めてそれを見て大きく息を吸った。

「なあんじゃこりゃああああ……!!?」

今の俺の姿を見られたら、確実にご近所の奥様方に警戒されるだろう。だって、女物の下着をつまんでタンスの前に立ってる絵なんて、誰がどうみても下着ドロではありませんか。いくら書類上は

妻だとは言え、こんな事をするのはオムツがぶっ壊れた異常性欲者か、ゲヘヘと下劣な笑みをこぼすフェチ野郎くらいなものだろう。俺は断じてその部類には入っていない。これに分類されるくらいなら、警察のお世話になるか病院に駆けこむと思う。

「こなくそっ!!」

下着を床に叩きつけて、ドアを蹴り破り階段の前で一階に向かって吠える。

「ベルチェ!! オノレは何しくさっとなのだ!! 両足の親指同士を紐で結んでアワアワさせるぞこの野郎!!」

セクハラも大概にしてほしい。これで俺が女で、ベルチェが男だったら一発でさよならですぜ? 俺だったらボッコボコにしてから、生ゴミのゴミ収集車にこっそり放り込むな、きつと。ぐっちゃぐちゃぐちゃになるな、ぐっちゃぐちゃに。おえつ。

ぐらついてるノブを無理矢理ねじこんで、部屋に戻る。床に落ちていた下着を足でベルチェのタンスに放った。なんだか手でやるのが躊躇われたのだ。だって20やそこらの女の下着を手にした高校生って明らかにダメ人間の原型だもんな。

「あ、悠さま……」

「ん?」

柔らかなソプラノに振り向くと、スカートから伸びたふとももをもじもしさせるベルチェの姿があった。真っ赤にしたほっぺが愛らしい。

「何だよ？　まだ何か仕掛けたのか？」

これ以上はマジで勘弁してほしい……。こんなのが毎日あるのなら、家がお化け屋敷みたいな雰囲気の方がまだマシだ。

「い、いえっ。違います！」

ぶんぶんと首を振り、余罪はないと主張した。はっきり言って疑わしいことこの上ない。疑惑を込めてベルチェを睨んでみるが、本当にもうないらしくケロッとしている。

「なんだよ？　俺着替えたいんだけど？」

「あ、あのー、……使いますか？」

「なにを？」

ピッとベルチェが指をさした方向には、さっき俺が蹴った薄いピンク色の下着があった。デロンとタンスに引っかかっていて、異様にエロスを感じる。しかもこれを使ってる人間が目の前に居るのなら尚更だ。

——や、ヤバいな。なんかベルチェのせいで変態思考になってきているっ。

「俺は男だっ。使うか!!」

本格的に変態に仕立てあげたいみたいだなお前は。

「そ、そうじゃなくてえ。えへへ、悠さまも男の子ですしい……。ねえ？」

「……なっ!？」

そっち!？ そっちか?! ちみはそっちを俺にすすめてんのか!?!? おかしいだろうが、根本的に世間的に人間としてッ!! 使うがこのやろう!! 俺を何だと思ってやがる、このミス公開セクハラが!!

「必要ない」

自分でもびっくりするほど、冷たく感情のない声が飛び出した。多分、脳内で様々な感情が入り乱れてるせいで、声に回せるほどの感情が残っていなかったのだろう。ベルチェは頬に手を当て、いやんいやんと身体をくねらせている。キモカワって言うか危ない。存在そのものが俺にとって危ない。改めて、認識させてもらおう。俺にとってのベルチェとは、地球に害する核兵器並に危険だ。

「良いんですよ。気にしなくてっ。あ、私はこれからお夕飯の準備をしますから、ごゆっくり」

意味もなく気をつかったベルチェは、それだけ告げてウフフッと笑いながら階段をおりて行った。つか、気をつかわれても困るんですけど。俺にどうしろと？

——もうホントにイヤだ……。

第二十三項 タイガースマイル

大河とろくに会話も交わさないまま数日。3年全員が待ちに待った修学旅行当日となった。家を出る時、相変わらず今生の別れみために涙目なベルチェに苦笑しつつ、学校へ向かう。そこからバスで空港へと移動した後、ハワイへれつらごーとなるのだ。ベルチェがついて来てるのでは？ と何度も振り返っていたせいで、雄也に挙動不審に思われたのがちょっと痛かった。

「わたし、飛行機乗るの初めてなんだ」

バスから荷物をおろしていると、朝賀が朝からしきりに言っていた言葉を呟いた。朝賀のはしゃぎっぷりときたら、見てるこっちまで楽しい気分になってしまうのだからどうしようもない。俺はもちろんの事、最近ほとんどぼんやりしている大河までもが微笑んでいる。流石だ、朝賀。後でアメをやろう。

「穂村くんは？ 初めてさん？」

「ん、ああ、まあな。家は旅行とかとは無縁だから」

バカ母もバカ父も基本、インドア派なので必然的にこうなる。俺の誕生日になると、やたらとテンションのあがる我が産みの親は、誕生日以外のイベントには無関心だった。無論、クリスマスプレゼントなんて貰った事がない。くれるのは瑞池家の人々くらいなものである。

「そっかあ、何か緊張するよね。わたし、すつごくドキンチョして
るよー」

ドキンチョって——死語じゃね？

興奮からか、朝賀は色付いた頬に手を当て熱い吐息をもらした。

「俺は……そうでもないな」

さっきまで朝賀を見て笑っていた大河も、少し冷めてしまったのかそっぽを向いてぼんやりとしている。空港の窓から見える飛行機でも眺めているのだろうか。大河ははしゃぐと子供みたいにペラペラ喋るからちよつとは期待してたんだが……。マジで、俺何かしたのかもしれない。ずっとベルチェにつきっぱなしだったからなあ。

「大河」

勇気を出して声をかけてみる。

「……なに？」

結果、やはりと言うか何と言うか——返事は凄く素っ気ないものだった。他の野郎よりは大河と仲は良い。自惚れとかじゃなくて、これは絶対と言い切れる。だから、こんな返事をするのは大河がいじけてる時か、期限が悪い時の二つ。大体が後者で、前者はほとんどない。後者の場合は、何かしらの制裁があるからわかりやすいのだ。

「何いじけてんだよ……」

「は？ いじけてなんかいいわよ」

「まあ、良いけどよ。んな白けたツラしてっと老けるぞ」

「……」

ふむ、本格的にいじけている様子。いつもなら言い終わる前に鉄拳が飛んで来るのに。こうまで元気がないと調子が狂うどころか心配になってくるじゃねえか。ああ、俺も結構損な性格してんだな。

「何があったか知らない。けどさ、らしくないよそういうの」

「……あんたにらしくない何て言われたくない。あたしの何がわかるってのよ」

何かと訊かれたら——少し困る。俺が知らない事だってあるだろう。大河だって、俺の全部を知ってるはずがない。頭の中全部を見せるほど俺は間抜けではなく、お人好しでもない。むしろ隠そうとしてるくらいだ。特に大河に対しては。

「知るかバカ。でもな、俺はお前の家族やら友達やらが知ってる事は全部知ってると思う」

「……」

大河は俯いて、ぼそぼそと何事かを呟いていた。俺はそれも気に留めず、更に言葉を続ける。

「つまんねえ事で悩んでやがったら、ぶっ飛ばすからな」

「……あたしの方が強いじゃない」

「だな。でも、俺が勝つ」

俺の言ってる事は、ガキのハツタリみたいなもんだ。大河に勝てるはずもないのに、勝つって言い張る。それくらいしか出来ない。力づくでも良い。空元氣でも良い。しょんぼりと地面を眺めてるよりは大分マシなはずだ。それならきつと、俺でも何とか出来るから。スゲー不器用だけど、多分何とかしてやるから。

——だから、そんな顔すんなアホ面め。

今にも泣きそうな大河の額をこつんと小突き、背を向けて声を張り上げる教師の元へと向かった。

「……うん、悠が勝つね」

背中に、儚げな大河の言葉を浴びながら――。

「青い空！ 白い砂浜！ そしてそして……パツキン美女！ がいねえええ！？」

「当たり前だボケ。今のシーズン観光客ばっかだっつの」

ハワイについた。うん、ハワイだ。なんつか、感動が皆無だった。バカみたいに叫んでる雄也じゃないが、やはり現地の人が少な

いのはどうかと思う。周りに居るのは見馴れたクラスメイトだし。もうちょっと砂浜の奥の方まで行けば、パツキン美女も居るかもしれない。雄也がそれに気付けるかどうかは別として、だが。それよりも何よりも、ハワイについてから大河の機嫌が良い。見てる限りでは、浅賀と楽しそうに談笑している。

これもハワイアンパワーなのだろうか。もしそうなら、ハワイの神様に感謝だな。日本のむなクソ悪い神よりは、ご利益の景気も良さげだし。

「悠っ、これから直ぐに自由だから。20分後ロビーに集合ね」

「ああ、わかったわかった。だからそんな引っ付くな。暑いだろうが」

満面の笑みなのは大変よろしい。よろしいけど、その、眩しすぎるほどの笑顔で腕に抱きつかれるとなあ。むにゅっと。むにゅっとね。アレが、ああなってる？ 男としてはよろしくないでありますよ。

大河が一旦無邪気モードになると、途端に玩具の使い方を知った赤子のようににはしゃぎだすんだ。それ自体は嬉しいよ。沈んでる大河なんて大河じゃねえしな。でもさ——お前、自分の発育を考えてくれよ。

「ん？　どうかした？」

ぱっちりと開かれた二重の汚れを知らない瞳に見つめられ、心が軋むのがわかった。大河……くそう、可愛いな。

「なんで目逸らすのよ」

「だ、だってよ……」

「あによ？」

気付けよバカ。野郎の視線が俺の身体にまとわりついて、まるでアイアンメイデンの中に居るみたいになってんだよ。や、入った事は勿論ないけど。でもきつとそんな感じだと思う。

今は制服だからまだマシだ。でも自由行動になれば、常識の範囲内での服装が許される。その上こう暑いと、布地が薄くなる訳で――。

「大河、なんかすっげー元気」

「うんっ、悠のおかげ」

いつもなら絶対に言わないセリフをあつさりと口にした。おおう、アロハの神よ。感謝する。俺は今猛烈激励脳細胞壊滅的に感動しているっ。しかもハニカミスマイルのオマケつきと来た。もう死んでもいい。はあゝ、マジで萌え死ぬ。

「ほらっ、行こう。悠部屋何号室だっけ？」

「ん、えと……228だったか」

「うそっ。あたしの真下じゃない。あたし328」

たったそれだけなのに、大河は当たりの宝くじを拾った子供のよ

うに喜んだ。当然、俺の腕を胸に抱いたまま。いいや、これは抱いたっていうか挟まれ――。

「悠？ 顔真っ赤よ？」

「な、何でもない！ 何でもないぞ！ やゝらけゝなんて微塵も思っ
てない――！」

「……あ」

そこで初めて大河も自分がなにをしているか気付いたらしく、跳
び跳ねるようにして俺から離れた。さっきまでは早く離れてほしい
なんて思ってたのに、いざ離れると少し寂しいモノを感じる。我な
がら現金な性格だな。

「ご、ごめんっ」

「い、いや。じゃ、じゃあまた後でな」

「う、うん。後で」

エレベーターで大河と別れ、俺は辺りに人が居ないのを確認した
後、一人赤面する。

――ここにベルチェが居なくて良かった、と。

第二十四項 アロハの魔力

「あぢ〜……」

俺はTシャツとハーフパンツに着替えて、ロビーで大河と朝賀を待っていた。三人で行くのもどうかと思うが、俺は友達少ないし大河も大人数でやかましく、あまり好まない。賑やかっただけは好きらしいけど。いやいや、全くもって俺も同意見である。

唯一、朝賀だけは大人数でワイワイガヤガヤとしたかったらしいが、大河が腕力と眼力でねじ伏せた。

「悠!!」

「穂村くん!!」

俺の名前を呼ぶ弾んだ声に顔を向けると、案の定大河と朝賀がこちらに向かっているところだった。ジーンパンに、肩と胸元が見える上着を着た大河が少し眩しい。あれは確実に野郎どもの視線を釘付けにするだろう。なんだって——現地人にも負けないほどの、だしな。

一方の朝賀は、若草色のワンピースで可愛らしく決めている。ちらっと見える肩が酷く弱々しく、抱き締めれば簡単に折れてしまいそうなほど華奢だった。大河の身長が高いせいで、更にほっそりとしているように見える。

「待った？」

「いや、さっき来たばかり」

「えへへ、なんか大河と穂村くん恋人同士みたい」

朝賀の無邪気な一言に、大河がほんのりと赤らめたのを俺は見逃さなかった。うん、良いもの見させてもらった。ぐっじょぶ、朝賀。

「で？　で？　どこ行くどこ行く？」

ウキウキ顔の朝賀の頭を大河がくしゃつと撫でた。

「とりあえず買い物済ましちゃおう？　お土産とか買って送っておけば後々楽だから。いい？　悠」

「おう、構わんよ。このクソ暑い中買い物なんて普段なら絶対嫌だけれどな」

苦笑する大河を見ながら、まだ暖かい日本を思い出す。どうせここはもうほとんど夏みたいなものなんだ。日にちを少しずらしたくらいじゃ何も変わらないだろう。それだったら、大河の言う通り今の内に買い物済ませて、残りをエンジョイした方が良い。

一つ懸念があるとすれば、相手はキャピキャ……もとい完全にサバ読みとかの無い華の十代なのだ。大河に良く付き合わされてるから、買い物めっちゃくちゃ長いのは知っている。大河はともかく、朝賀がついて来た時はもつのか？　と思ったくらいだった。結局、その時は俺が一番にダウンしたのだが――。

「うんうんっ、じゃあ行こ！」

いつでもどこでもハイテンション娘に手を引かれながら、ロビーを出た。俺たちを照り付ける太陽がやけに近くに感じられる。簡単に言うとうるさい。この無駄な熱をパンドラの箱に閉じ込めて、古代の人々に厄災として奉ってほしいくらいだ。俺にとっては、この暑さは災い以外の何物でもないのだから。

汗でじっとりとした手を朝賀に掴まれながら、海とは逆方向に向かって行く。なんだろう、いつもならこれだけでもドキッするのにこんなにも平然としていられるのは。反対側に居る大河を見ても、朝賀と同じように輝くような笑顔だった。朝賀が俺と大河と手を掴んでいるから、端から見れば仲の良い兄弟のように見えると思う。実際、今の俺の心境がそんなところだった。

「あゝ！ アロハシャツだようっ」

朝賀が立ち止まったのは、日本で言うアロハショップだった。店頭にあるアロハシャツ以外にも、色々なハワイアングッズが置いてある。アロハシャツとか派手なのは着ない性質^{たち}だが、やはりハワイで売っているアロハシャツには何とも言えない魅力がある。既に手に取ってキャッキヤとはしゃぐ朝賀のように、手をのぼしてしまいたいそうさ。俺と同じく、地味目な色の服を好む大河も複雑そうに顔をしかめている。

でもまあ、大河にならアロハシャツも似合うと思うんだけどな。

横目到大河を見ながら、赤と白とグリーンで彩られたシャツを手にとってみる。うむ、これなら大河にぴったりだ。俺のセンスで言えばだが。

「悠、これ買うの？ あんたこういうの嫌いじゃなかった？」

「そうなんだけどな」

「……も、もしかしてベルチェさん？」

おずおずと問いかけてきた大河に、思わず首を捻る。何故そこでベルチェが出てくるのだろう。そりゃあいつは曲がりなりにも妻って言う肩書きの持ち主な訳だが。

「あー、いや。そのさ……」

これは――本人に対して何て説明すべきか。女にアロハシャツをすすめるのも変な話だし、そもそもそんなガラじゃない。明らかに不審な行動だろう。

「た、大河は何か買わないのか？」

「あたし？ あたしは……そうね。折角だから、見ていこうかな」

店内を無邪気に駆け回る朝賀を見て、母親のような笑みを浮かべた。いや待て、これはある意味チャンスなのでは？ 朝賀は店の商品に夢中でこっちは気づいてない。その上、近くに同級生の姿はなく、大河もどことなくいつもより機嫌が良さそうだ。

よっしゃ、頑張れ俺。やれば出来る子だって今こそ証明してみせろっ。

「じゃ、じゃあこれなんかどうだ？」

ずっと手に持っていたシャツを大河に差し出す。大河はきよんとした顔で俺をマジマジと、不思議な生物でも観察するように見ているが、やがて顔をぼんっと音がなりそうなほど真っ赤にして受け取る。しばらく手触りや、全体の色などを見てコクンと恥ずかしそうに頷く。

「い、良いと思う……」

「そ、そうか……」

「……」

あの、大河さん？　そこで沈黙されると、こっちとしては居たたまれないって言うか、凄く精神的に辛いモノが込み上げてくるんですけど、どうしてくれるんでしょうか。

「あれ？　大河、それ買うの？」

いつの間にか戻って来ていた朝賀が、大きな袋を抱えて大河の背後に立っていた。大袈裟に肩をびくつかせた大河は、苦笑いしながらんー、と唸ってみせる。

「は、悠は……これ似合うと思う？」

「あ、ああ。じゃなきゃすすめないって」

ああ俺のバカ……。もっと他に言い方あっただろうが。何でもっところ、優しい違う意味を含んだ絶妙なコメントが出来んのだ。内心、自分の不器用さに苛々しながら、後頭部をポリポリと掻く。

誰がどうみても、我ながらベタな照れ隠し。大河にもどうやら伝わってしまったらしく、口元が僅かに笑っていた。

「あ、あたし！　こ、こここれ買って来るっ」

ビューッと効果音の鳴りそうな勢いで店内へと駆け込み、ちゃっちゃと会計をすまし入って行った勢いそのままに戻って来た。朝賀の袋より二回りほど小さな袋を、宝物のように抱えている。幸せそうに微笑む大河の姿に、意識せずとも目を細めてしまう。

微がゆるゆるになっているのが自分でもわかる。

顔が、別の意味で熱いのがわかる。

心臓が、これまでにないほど高鳴っているのがわかった。

「あ、ありがと。悠」

「い、いや。別に……」

くうううう、これが旅行の魔力かつ。大河がいつも以上に可愛く見えてしかたない！

喜んで良いのか悪いのか、複雑な心境なのは間違いない。

第二十五項 温泉の攻防 その一

更に色んな店をはしごし、日が沈んで来た頃に俺達はホテルへと戻った。帰る途中に見えた夕陽がまだ臉に焼き付いているようだ。まあ、それも仕方ないと思う。だって日本の空とまるで違うのだから。昼間は真っ白だった雲がオレンジに染まり、神秘的な空間を作り出す。

「はあ、ヤバかった。あれはヤバかった……」

部屋のベッドに倒れ込み、さっきみた光景を思い浮かべる。影掛かった大河の横顔が夕陽に照らされ、今にも消えてしまいそうな儚さ、美しさをがらにもなく感じてしまったのだ。幸いだったのが、夕陽の色がオレンジだって事か。もしそうでなければ、俺の頬に赤みがかかっているのがバレていただろう。そのまま見つめていたいのと、我を忘れて抱きつきたい衝動を抑えるのですごーく大変だったんだ。それ意外に気を回す余裕なんてない。

「朝賀も居たっつーのに」

朝賀には守りたいなんてエゴだなんだと言ったのに、俺より二、三センチ大きい大河を腕の中に閉じ込めて守ってやりたいと不覚にも思ってしまった。朝賀の目がなかったら、もうダメだったと思う。結局のところ、俺も男で、エゴの塊なんだ。

「でもよー……」

——今日の大河、可愛かったな。

何がとかじゃなくて、全部良かった。全部楽しくて、全部嬉しうだった。反則ってやつだな。ベルチェ以来の大ファールだ。球速100キロくらいの奴が、突如として消える魔球を投げ出した事くらしいの反則。こちらら脳みその血管が全てはち切れるかと思ったらいなのだ。そうだな、これだけのダメージを受けたのだから、エゴくらい許せて話だ。

何の話だか良くわかんなくなってきたけど、つまりは——。

「ベタ惚れかあ、ちくしょう」

「悠——！ 風呂行こうゼイ！」

ドアからひょっこりと顔を出した雄也に、取りあえず手頃な枕を投げつける。「うおっ」とドアを閉めた隙に、雄也に背中を向けて火照った顔を隠した。危ない危ない、妄想と現実の狭間で悶々してたなんてバレたらなんて言われるか。しかもその相手が大河だなんて——卒業するまで永遠にネタにされ事間違いなしだな。

「何すんだよ！？」

「わりい、手が滑った」

「手が滑った?! ベ、ベタだな悠。オレは驚きのあまりずっこけそうになっちまったぜ」

お前も十分ベタじゃん。

「それより風呂だ風呂。他クラスの連中が言うには、天窓になって空が見えるんだと」

天窓、か。うむ、中々に良さげだ。

「おー、ちょっと待ってろ。今行くから」

鞆から下着を取り出し、部屋のクローゼットに最初から入っていた藍色の浴衣を取り出す。使って良いのかは知らんが、多分大丈夫だろう。他のクラスの奴で使ってる奴いたし。それに――和って結構好きなんだよな。過去に大河と初詣に行った時、大河は鮮やかな紫の布地に桜の描かれた着物を着ていたのだ。俺を見て照れ臭そうに紅潮する大河は凄かった。色んな意味であれば凄かった。俺はあの時、初めて萌えてやつを知ったね。

「悠、早くしろって!!」

「ああ、今行く!」

浴場には湯気が立ち込めていて、石畳の感触がやけに心地良い。広さも清潔さもばっちりで、上を見上げれば暗くなってきた空に月が揺らいでいるのがわかった。奥にある木で出来たドアをくぐれば、ヒノキで出来た露天風呂になっているらしい。いや、ここは間違いなくハワイのはずだが、ここまで日本っぽいと苦笑が漏れる。

更に驚かされたのが、隣との壁が差ほど厚い訳ではなく、きゃーきゃーと女子どもの黄色い声が聴こえてくるのだ。それを聞いて、鼻の下をだらしなく伸ばしてる野郎もいる。俺はそいつとは無関係だと信じたい。

とりあえず、身体流すか。

プラスチックのイスに座り、シャワーを流す。シャンプー、ボデイソープやはちゃんと完備しているのはありがたい。時々シャンプーしかない場所とかあるからなあ。

昼間、結構な汗をかいたので、念入りに身体を洗う。一通り洗い終わると、直ぐ様湯船へと浸かった。ぬるくもなく、かといって熱過ぎず。極楽とはまさにこの事だ。流石プロ、風呂温度まで完璧だな。

「ああ、ごくらくだー」

「じじくせえぞ悠」

「うるさい、つか人の前で仁王立ちすんな。見たくないモノが視界に入るだろうが」

文字通り、湯船に浸かって縁に腕を乗せれ俺の前に雄也が仁王立ちしているのだ。俺は座っているから、必然的に雄也のツチノコがガンガンに見える。

「あんだよ、男同士なんだから気にするなよなっ」

ニヤツとやらしい笑みを浮かべ、ほれほれと突き出してくる雄也。

あまりのキモさに吐き気と頭痛が同じに襲ってきた。なんで野郎に野郎自身を見せつけられなきゃいけないのか。なんか理不尽な言い訳で、ぶん殴りたい気分になってくる。例えばそうだな、視界に入ってるモノを何となく殴りたくなった、とかで。雄也なら通ってしまいそうなのが少し怖い。

「悠こそタオルなんて巻いてんじゃねえよ。お前は男だろ？ 堂々としてろ女々しい奴だな」

「……なんならちよんぎって女にしてやろうか？ チョッキンって」

「――勘弁して下さい」

指をチヨキチヨキすると、雄也がお湯の中で土下座した。プライドの欠片も感じられない恰好に、哀れみが漂ってくる。

「俺、風呂はぼんやりと入るのが好きなんだよ」

土下座する雄也の頭に手を置き、頭を上げさせないように抑えてつける。雄也は酸素が足りなくなってきたのか、もがもがともがいている。はあ、平和だ。こんなに平和なのはいつ以来だろう。最近風呂もベルチェのせいで慌ただしく入ってたし。いくらバスタオル装着且つ俺とベルチェの距離が離れてる状態でも脳髓がトロトロに犯されるのだ。しかも、あいつは何かと理由をつけてバスタオルを取りだかるものだから、疲れるのなんのって。

痴女だ露出狂だと罵っても、身体をくねらせて喜ぶ――いや悦ぶだけだし。どうしようもない、主に奴の思考回路が。

そういや、ベルチェ何してっかな。また泣いてたりして……。あ

いつ、スゲー泣き虫だもんなあ。

「お?」

さっきまで抵抗していた雄也の動きがピタリと止まった。ぶくぶくと空気の泡が出てないのを見る限りじゃ、死んだか?

「雄也? 生きてるか?」

「……」

「死んだ?」

「……」

やべえ、マジで殺したかもしれねえ。

頭から手を離して、後頭部をツンツンとつついても全く反応がない。ベルチェに殺される前に、俺が人を殺してしまうとは。運命とはなんて残酷な。

「ま、いつか。雄也だし」

「よくねえよ!? 人殺しは立派な犯罪だよ?!」

「おお、生きてたか」

ガバッと水を巻き上げながら雄也が復活した。鼻やら口やらから白濁した温泉の湯が出ている。なんか両刀にやられた人みたいになっていた。グロい。あ、俺のせいだ。

「なんだよ、折角ビルから落として証拠隠滅しようかと思ってたのに……」

「ちなみに死体遺棄も立派な犯罪です。お前は更に罪を重ねようとしたな」

「うるせえ。生きてたんだからぐちぐち言うなよ」

「だからよくないっ!! オレ川の向こうに居るばあちゃんに手振っちまったんだぜ!？」

躍起になって噛みついてくる雄也から目を逸らし、わざとらしく欠伸を試みる。雄也の言う川って三途の川だよな。俺も大河のおかげで良くお世話になってるから、多分生きてる人間で一番三途の川に遭遇してると思う。ある意味砂漠のオアシスより希少なモノだ。俺、もしかしたら世界一三途の川を渡かけた人間としてギネスに載せてもらえるかもしれない。

「そーいやさ、お前のばあちゃん死んだんだ？」

「いや、生きてる」

「……知らない人に手振るなよ。世間知らずなガキかお前は」

鼻の穴めがけてお湯をぶっかけ、悶える雄也の脳天にチョップをかました。

第二十六項 温泉の攻防 その二

一生懸命鼻をかむ雄也を放っておいて、既に水掛けの戦場と化した風呂から脱出した。奥にある扉を通って、露天風呂に向かう。そこでまず俺の眼前に広がったのが広大な海原だった。覗き防止の冊はあるものの、こちらから見る分には特に問題ない。入って右手には、女湯との壁があった。コンクリートで出来た壁だが、12、3メートルほどで、壁を見上げれば女湯の湯気が見える。

「ん、良い感じ……」

右足からゆっくりと浸かり、ほっと息を吐く。浴場から聞こえてくる喧騒さえ心地よい。熱い溜め息が漏れてしまうのも仕方ないだろう。それだけの癒しだし、視覚をも絶景に支配されているのだ。

ふい、あいつらもったいないねえなあ。遊んでばっかで落ち着いて入るって事を知らねえ。絶対損してるよ。

「んあ……」

両手の指を組んで、ぐっと真上に腕を伸ばした。潮の匂いが若干混じった風が上半身に当たる。

「——へっぷしー!!」

ふ、我ながら変なくしゃみが出たな。

「ふふっ、大きなくしゃみ……」

不意に聞こえた声は、お隣——壁越しの女湯から響いてきたものだった。この聞きなれた耳に良く残る声は。

「大河、か？」

返事の変わりに、コンコンと壁を叩く音がした。おそらく、丁度俺の目の前辺りに居るのだろう。それにしても、大河も露天風呂に居るとは。偶然にしては出来すぎ……でもないか。入る時間はクラスごとに決められてるから、おかしい事でもないし。

「ちゃんと浸かりなよ？ 風邪ひいたら怒るから」

「わかってるっつーの。でも良く俺だってわかったな」

「ええ。だって悠、いつも変なくしゃみだし」

大河が堪えきれないといった感じでくすくすと笑う。顔が熱くなってるのは風呂のせいではないだろう。俺自身、自分のくしゃみの仕方が変だって自覚しちゃってるし。いや、大変不本意だが。

ヒノキの縁に頭を預け、湯船の中で寝そべる。うつすらと見える星の下で、ゆらゆらと立ち上る湯気をぼんやりと眺めた。白い湯気が薄暗い空に吸い込まれていく様は、思わず手をのばしてしまいそうになる。まあ、流石にそれをしてたら痛い人に見られると思うのでやめておこう。

「気持ち良いなあ。何か眠くなる」

「寝るなよ」

「寝ないわよ」

どちらともなく笑い合い、どちらともなく嘆息。そしてまた笑い、照れ臭くなって、俺はちゃぷちゃぷと湯をすくった。

「なんか久しぶりね。あんたと落ち着いて話するのは」

「だな。最近はベルチェなり浅賀なりが居たから。すげー久しぶり」

「……うん。久しぶり」

ゆるりと流れる時間に身を任せるのが、こんなに安らぐものだったのか。穏やか。安らか。緩やか。どれともとれるまったりとした雰囲気は何よりも温かい。身心ともにほかほかとはこの事だろう。おそらく大河も——いや、これはただの願望でしかないのだが、彼女も俺の同じ気持ちだったらどれだけ嬉しいだろうか。

「ね、ねえ……。は、悠はさ、す、すすす——」

「す？」

「……す、好きな人とか居るの？」

「はあ？ 何だ突然？」

出来るだけ平然を装うが、おそらく今の心境ははっきりと声に出していただろう。だってよ、大河とこういう話するの、実は初めてだし。それに相手は大河だ。俺も男、普段こんな話滅多にしない大河

に言われれば『もしかしたら』なんて意味のない期待だってもってしまおう。や、大河の事だからただの好奇心なんだろう。惚れたほうからしたら、不意打ちはキツイんだが。

でも、伝える訳にはいかないのだ。俺は異性としては大河と一番仲が良いと自負している。それだけに、それだけに後々大河の足枷になってしまうから。

「だ、だって、修学旅行って言ったら恋バナでしょ？」

「……居ない事もない」

「そ、そうなんだ」

今の大河は空手が全てだ。大河もそう言っていたし、空手に取り組む大河の眼差しを見れば誰もがそう思うと思う。それで俺は、大河にとって一番仲が良い男友達であり――。俺が大河に告白するって事は、少なからず大河に動揺を与えてしまう。告白して、気まづくなって、精神的に揺らいで、もしそのせいで大河が空手で敗れたりしたら、一生後悔するだろう。決して大袈裟なんかじゃない。俺が、誰よりも応援してるから。

「だ、だれよ？ あたしの知ってる人だったりする？ あゝ、もしかして幸？ はるか――」

「……何でも良いだろ、俺の事なんて」

「…………え、あ」

――俺に空手が全てだと言った、大河の決意を誰よりもわかってる

つもりだから。だから、邪魔はしたくない。邪魔してはいけない。そっと見守るだけで良い。それだけで今は満足している。俺が少し……ほんの少し歯をくいしばれば、大河は勝てる。去年だって、事故で片腕を骨折してなけりゃ絶対に優勝出来たんだ。

「あ、あのっ、はる——！？」

「空手！ 調子どうだ？」

「え？ あ……うん。良いわよ」

「そっか」

願わくば、こいつの決意と努力が無駄にならないように。俺は、邪魔にならないようにしていたい。欲を言えば、サポートなんか出来りゃ言いんだが、俺は素人だし。その辺は空手部の連中に任せた方が確実だ。だから、何も出来ないからこそ、邪魔だけはしないようにしたいんだ。

「俺、応援してるからな」

「……うん、知ってる」

「去年みたいに、怪我すんなよ？」

「……うん」

「——って、まだまだ先か」

もしも、この気持ちを伝えるのだとしたら、大会が終わった後。

おそらく、夏休み明けくらいなるだろう。

「悠、あたし頑張る」

「おう。勝ったら真っ先に祝ってやるよ」

「……約束よ？ 忘れないでよね」

「任せとけっ」

それに、しばらくはこの関係も悪くない。

第二十七項 二つの約束

風呂から出ると、直ぐ様夕食の時間だった。俺のクラスが入れる一時間ギリギリまで入っていたせいだろう。大河と適当な事をぺちやくちゃと話していたせいもあるが、予想以上に気持ち良かったのだ。温泉——炬燵こたつに並ぶ、人間を墮落させる兵器だなありや。

「夕飯、なんだろうな？ 悠知ってるか？」

「知るか。つか雄也、お前実は俺に聞けば何でもわかるとか思ってるだろ」

「え、あ？ へへっ……」

苦笑いを浮かべる雄也を見て、確信を得る。意味もなく脱力したのは何故だろう。

俺達、二組男子は只今ロビーにてぐうたれている。夕食の準備が遅れているせいで、こうして呼ばれるのを待っているのだ。と言うのは言い訳で、実際は温泉で暴れ回って逆上せた野郎が続出したから、こうして風通りの良い且つ、準備が出来たら直ぐに呼ばれる場所に待機している。俺にはあまり関係のない話なのに、一人だけズルいなどと言う——どっちのアメが良い？ と聞かれ、取りあえず片方を選ぶのだが、もう一人がもう一つを食べようとしているのを見ていて、無性にそっちが欲しくなる、ガキンちょ理論によって束縛されていた。

ロビーの端に設置してある、フッカフカのソファに深く座り目を閉じた。特に意味を持たない、あるとすれば少しでも楽な体制に、程度のこの行動で不意に我が家を思い出した。俺のマイハウスには、ソファがなかったりする。あっても座椅子くらいなもの。ガキの頃、初めて大河の家に遊びに行った時にソファのフッカフカ感に感動して、そのまま寝てしまった事があったなあ。その頃の大河は今みたいに凶暴じゃなく、本当にどこにでもいる子供だったのだ。むしろ、普通より少しだけ泣き虫だったと思う。案の定、大河に寝るなとわんわん泣かれ、瑞池家母に任せてその時は帰ったんだっけ。

あのふわふわ感が忘れられず、親父に買ってほしいと言った事もある。あっさりと無視されたけど、今でもソファがあればなあ、なんて思う日も少なくない。

——悲しいかな、もう一つの家も和室だから、ソファなんて小洒落たもんじゃないし。

「……もう一つの家、か」

違和感、なくなっちゃったな。最初はあんなに困惑してたって言うのに。今じゃ『行く』じゃなくて『帰る』になってるし。それに、ベルチェだって基のものは凄く良い奴なんだ。嫌になっていたこの環境がおかしいのだ。もし、ベルチェがあんな突拍子もない事を言わなければ、きっとすげー良い友達になれただろう。まあ、三も歳離れてるからそうそう出逢えなかっただろうけど。でも、惜しいと思う。思ってしまう。大河がいなければ——現実に居るのだからあり得ない話なのだが——きつと、多分。や、それはあまりにも大河に対して不誠実すぎる考えだ。俺と大河はそんな関係じゃないから、不誠実もクソもないけど。

「悠っ」

「ん？ おお、大河か」

ぽんっ、と肩に置かれた手に振り向くと、浴衣姿の大河が目映った。浴衣のはだけた先に見える白い肌が火照ってピンクに染まっていた。大河の背後には浅賀が当然のように佇んでいて、少しぶかぶかと浴衣を嬉しそうに眺めている。浴衣とかそう言った類いの服が好きなのだろうか。

ふむ、日本男児たるもの、浴衣が好きなのは当然の事なのだ。決して、俺が着物フェチって訳ではない。

「さ、さっきさ……」

大河はかくんと首を落とし、上目使いにジッと俺を見てきた。へその前でキュッと組まれた手が、なんだか可愛い。いや、可愛いって単語を大河に使う日がくるとは思ってもみなかった。

俺の中じゃ、可愛いと可愛らしいは違うのだ。可愛いとは、文字通りで可愛い人——ベルチェとか浅賀とかに使う。そしてそして、可愛いしいとは小動物的と言うか、思わず頬がにへらっとなってしまうような事を言う。のだと思う。なんとなく、こじつけのような気がしてならないのはきつと気のせいだ。

「ご、ごめん。なんか変な事聞いちゃって」

「い、いや。俺も答え方がちょっときつかったし。気にすんなよ」

「うん、ありがと……っ」

大河は、はにかみながらぽつと頬を赤らめた。ああ、どうしてこ
うもこいつは人の心を掴むのがうまいのか。先祖に傾国の美女でも
居たんじゃねえか？ お前が玉藻と言われても俺は驚かないああ驚
くものか。

恐ろしい、お前が恐ろしいよ大河。そのギャップは犯罪だって。
きつとそう思うのは俺だけじゃないはずだ。もしこれでなんとも思
わない奴は男じゃない。オカマだ。オカマじゃなきゃなんだ。もう
訳わかんないけど、とにかく大河は可愛い。うむ、俺は男だから脈
が大変な事になったとしてもおかしくなどない。そういう事にして
おく。

「で、さ。今日夕飯食べ終わったら散歩行かない？ 幸と三人で」

「んー、散歩、か」

ハワイの夜に散歩つてのも良さげだな。星とかも綺麗そうだし。
残念な事があるとすれば、三人って所なんだが。まあ、仕方ないか。
ただの友達が、夜に二人で抜け出すって完全に逢引きだもんな。

「ああ、良いよ。でも、少し遅れるけど良いか？」

「え？ 何か用事？」

「……ちよつとな」

きょとんと目を丸める大河から、視線を然り気無くそらす。本当
なら一番に優先しなきゃならないのに、生憎ヤツとの約束があるの
だ。言わずと知れたベルチェさんとの約束が。

夕飯食べ終わったら絶対電話しろ。との事で、約束を破れば五箇条が発動してしまう。

確かに、約束を破った時のペナルティは『なんでも言う事を一つきく』だったはず。

ベルチェの言う事を一つ——死刑宣告の方がまだマシだと思う。

「まあ良いわ。……悠、約束よ？」

人差し指を立てて、念を押すようにジッと俺を見つめてくる。若干うるんだ瞳は、誰かがそうさせているのか、はたまた埃が入っただけなのか。確実に後者だと思ってしまおう自分が悲しい……。

なんだろう……。なんなんだろうコレは。コレは一体何がどうなったら、コレになるんだろう。

「……苛め？」

夕食が始まって30分。日本じゃ、その道の店に行かないと食べられないようなハワイアン料理にパクつきながら、その違和感を感じた。始めは、ん？　なんだ？　くらいだったのが、徐々に言葉を失い……。

——誰だよ浅賀に酒飲ませたのは。

そもそも、修学旅行に酒が出るかと思うだろう。俺だって予想がい……ってか、予想すらしてない。いや、予想する必要すらなかったのだ。なのに、浅賀は確実に酔っ払っている。おそらくは料理の中に入っていた酒に酔ったのだろう。とも考えてみたが、現実としてそんなのは不可能だし、酒の匂いは全くしなかった。

席の場所的には、俺の右隣が雄也。その前が大河で、俺の前には浅賀が座っている。

ふと、隣か不穏か空気を感じ右隣を見てみた。

「……」

「……雄也おまえ」

すいっと。いかにも何かしましたと言わんばかりに目を逸らす雄也が居たのだ。鳴ってない口笛をヒューヒュー吹いて、明後日の方向を見ている。

「……ふざけんな」

「悪気はありませんでしたっ」

首根っこを掴んでやると、あっさりと白状した。まるでちよつとした悪戯が事件レベルまで膨れ上がった小学生を見ている気分だ。最悪な事この上ない。若干顔が青くなっているのは反省しているからか、それとも。

「はい。穂村くんあゝん」

「……」

真っ赤な顔で、伸ばした橋を俺の口に無理矢理押しつける浅賀に
対してか。その隣で、目線で人を殺せる大河さんの殺気のせいかな。
答えはわかりきっているが、まあここはスルーでいく事にしよう。

「ほらほら、おいしいよう？」

——勘弁してください。

横でこそこそと空き缶を片付けている雄也を見ながら、斜め上から飛んでくるやんごとなき殺気に耐えるだけの夕食だった。

第二十八項 受話器の向こう側

地獄のような晩飯が終わった。今日この後は、就寝まで半自由な時間帯だ。半と言うのも、当然だが男子が女子の、女子が男子の部屋に行ってはならないというのがある。まあ当然と言えば当然だ。ここに居るのは大人になりかけている高校生。一晚の過ちが無いとも良い切れないのだから。

「うし、こんなもんか」

俺は部屋にて自分の荷物を漁っていた。春のハワイと言えど、夜は流石に冷える。薄手の長袖を羽織り、冷たい風に備える。

大河とはロビーで待ち合わせ済みだ。後やる事は……っと、ベルチェに電話か。つか心配だから夜に一度電話しろってガキかあいつ。どんだけ心配性なんだよ。いや、ただベルチェが寂しいから電話して欲しいって事もあり得る。

「お、悠どした？ 出掛けんの？」

「んー、まあ。ちよっくら出てくる」

「おー、いつてらっさい」

アメリカのドラマを見ながら、ヒラヒラと手を振る雄也を背に部屋を後にする。タンタンとリズム良く階段を駆け下り、物陰からそっとロビーを覗いた。

「……」

丁度、俺たちが座っていたソファに大河が腰かけている。浅賀の姿は――まだ無いようだ。

ふっと息を吐き、忍者よろしく気配を極力潜める。ベルチェに電話している所を見られたらまた何て言われるか。なんだか浮気してるみたいで気分が悪い。まあ、ベルチェに対しての大河ならば完全に浮気そのものではあるが。事実と気持ちはまた別なのだ。

受け付けの近く、ロビーの隅にある電話ボックスに駆け込み硬貨を投入。日本にかかるか心配だったがそこはホテル、問題なく聞きのれた呼び出し音が耳に流れこんできた。

「……もしもし」

半日ぶりのベルチェさんは、警戒心まるだしでした。

「あ、俺だけど」

「俺さま、ですか？」

俺さまで、どこぞの御曹司か。って、詐欺みたいに言う俺も悪かったな。

地味に新しいオレオレ詐欺回避法を生み出したベルチェに苦笑してしまう。

「あ、ええっと、悠だけどさ」

「……悠さま？」

「ああ」

「……ふえええっ」

なんで?!　なんか急に泣き出したっばいけどっ!

鼻はぐじゅぐしゅ、声はふえふえ。想像するに容易い。完璧に号泣しているようだった。ああ、また寂しいとか言い出すのだろう。んな事言われたって、レポートとか使いちゃう生まれてくる世界を間違った人じゃないと難しい話なのだ。

ベルチェ、あんまり困らせないでくれよ。どうしようもないんだ……自分から進んで帰りたいって思った事はないが。

「悠さま」

「ん？」

「約束、守ってくれたんですね」

電話越しに、ちんちんと鼻をかむ音が聞こえてきた。少し元気が出たようだ。

「ああ。それくらいは、な」

「へへっ、ありがとうございます」

……もしかして、もしかなくても、俺初めてベルチェと当たり障りのないまともな会話をしているんじゃないだろうか。いつもいっつもいっつも、監禁調教監禁調教監禁調教監禁調教監禁調教死——恐々とした脅し文句に屈していたのが嘘みたいに普通の会話。なんだか懐かしい。

硬貨を幾つか追加し、電話ボックスの側面に背中を預けて座り込む。どうやら長くなりそうだ。大河との約束もあるが、ここはベルチェに付き合ってやるのも悪くない。

「ハワイ、どうですか？」

「どう、と言われても。今日あんまりハワイらしい事してない」

「そうですか。でも良かった。悠さま、楽しそうです」

楽しそう、ね。どうだろう、楽しいのだろうか。確かに一日中大河と居られたし、気分が高揚していたのも分かる。だが、その一方で日本に居るベルチェが気になっていたのも事実で。

たった半日一人でいるだけなのに、あんなに不安そうにしている奴が三日も耐えられるのか。半強制的に結婚させられたとは言っても、ベルチェの事が嫌いな訳じゃない。むしろ俺にしては珍しく、女のベルチェと違う場所で出会って普通に友達になりたかったとすら思っている。こんな時、いつも思うのはやはり——いっそ嫌いだったらどんなに楽か、だった。

「ベルチェはどうだった？」

「はいっ。私は、お隣さんとお買い物に行ったりお喋りしたりして

ましたよ」

「お、お隣さんって……」

「はい、瑞池さんです」

そ、そこが繋がってしまったのか。いつ？　なぜ？　どんな成り行きでラインが出来たんだ？

瑞池母は、基本的におっとりとした優しい人だ。生真面目なベルチェとも、上手くやってくれるだろう。しかし、そうか。ベルチェと瑞池母か。大河の耳に入らなきゃ全く問題ないのだが。

「楽しかったですけど、でもやっぱり……この家に私一人じゃ広すぎますよ。えへへ、自分で選んだのに、おかしいですね」

「ま、まあ明後日には帰るからさ。瑞池のおばさんも良い人だから、色々話し相手になってもらえ」

「はい、そうします。あ、そうだ、実は今日ですね——」

受話器のコードを指に絡ませながら、俺はベルチェの話に耳を傾ける。

ベルチェの話が尽きるまで聞いてやろう。そう思えたのは、必然だったのかもしれない。あいつは故意に俺を邪魔したりしない。それに、俺がちゃんと約束を守ったのもあるのだろう。直接は寂しいと口にせず、俺がハワイで楽しんでいるのを邪魔しないように気を遣ってくれている。全く、これなら寂しい早く帰ってきてくれとごねられた方が楽だった。想像していたよりも、もっともって困らせ

てくれやがる。

まだ、一月足らずだったのに、ここまでベルチェの事が分かっている自分が可笑しかった。ベルチェは話の最中に、笑ったり、怒ったり、哀しんだりする。一日あった事を日記に書き込むような話し方。まだ足りない、まだまだ足りない。時間一杯まで話したいって気持ち伝わってくる。

これは、切れねえな。

「それですね、悠さまの着ていたYシャツに顔を押し付けてすうすうって息を吸うと、麻薬みたいな快感が……」

「人の服で何してんだてめえ!!」

俺は、叩きつけるように受話器を置いた。

「……あ、やべ。思わず切っちゃった。んん、まあ良いか」

第二十八項 受話器の向こう側（後書き）

さて、あまりにも長い事更新していなかったので、二話いっぺんに更新しました。ちなみに、気付けば軽く30万アクセス突破していたのでお礼をば。皆様、この気まぐれかつぐーたらな作者ですが、どうぞこれからもよろしくお願いします。

第二十九項 影踏む虎

——こんな時でも、彼女の影がちらついている。

「大河悪い、遅れた」

「……ううん。何処か行ってたの？」

「ん、や、直行したけど」

嘘、これは嘘。さっき友達経由で永井に悠の居所を訊いたのだ。返事は15分くらい前に出たと言っていた。

何をしていたのか、と疑ってしまう自分が嫌いだ。まだ彼女でもなんでもないのに。ベルチェさんと何かあったんじゃないかと疑う自分が嫌いだ。 magari なりにも奥さんなんだから、間違っではない。いっただったか、ベルチェさんの話を聞くだけで苛々していたのが、ある日、本人が教室に飛び入り。そして妻宣言。あたしには一生出来ないと思った。いや、学校にまで乗り込んで宣言出来る人が何人居るか。

ふざけているんじゃない。真面目に言っているのは分かった。それが余計に辛くて、結局逃げ出してしまったんだけど。

「そっか」

「ああ。で、浅賀は？ まだ来てないのか？」

「あ、うん」

幸は永井に盛られたせいで、目を回している。

悠にそう説明すると、一瞬目を見開き照れ臭そうに人差し指で頬を搔く。

「……んじゃあ、二人で行く？」

もしかしたら、多分、きっと、この言葉を待っていたのかもしれない。胸が高鳴る。ドクドクと血液が頭に上りカッと頬が熱くなった。昔はこれくらい普通に返事出来ていたのに、いつからだろう。ちよつとした仕草や言葉にドキッとして、変な返事になってしまったのは。これが、人を好きになるって事かと自覚したのは。いつからか、あたしから素直と言う言葉が消えたのは。

可愛くない。そんなの一番あたしが分かってる。でも仕方ないじゃない。こんなに恥ずかしくて、こんなに嬉しい事――他には知らなかったんだから。

「悠が良いなら良いけど。あ、あたしはどっちでも良いわよ」

可愛くない。やっぱり、可愛くない。取り繕うように返事して、喜びを隠して。可愛くない。あたしはもっとズバズバ物を言うタイプなのに。何馴れない事してんだか。可愛くない。本当に可愛くない。

「ああ、じゃあ行くか」

こんなあたしでも、苦笑混じりで行こうと言ってくれる悠の優しさが胸の奥に染み込んだ。

肩を並べるようにして、ロビーを出る。

人、一人分。それがあたしと悠の今の距離。うんと小さい頃、多分幼稚園ぐらいの時は肩をぴったりつけて手を繋いでいたと思う。

ちらっと盗み見た悠の左手は、ずっと大きくなっている。なんだから見ているのがちよつと照れ臭い。どうしようもなく意識してしまう自分が居るのだ。

「ほら、見てみろよ」

「うん？」

悠は突然その左手を上げて、空を指差す。

深い深い暗闇に、淡い光を放つ三日月。小さな光の粒が集まり密集して出来る、満点の星空がそこにはあった。日本じゃ絶対に見られない光景。ロビーを出て50メートルと歩いていないのに、あたし達の歩みは止まっている。

「……ぷっ」

「くくっ」

二人してその事実には吹き出し、顔を見合わせ再び歩き出す。あたしは、この星空に背中を押されるようちよつとだけ――半人分だけ距離を詰めて。

夜風が髪を撫で、火照った頬を冷やしてくれる。大丈夫、今なら、もしかしたら素直になれるかも。そんな気がした。

特に会話は無いけど、あたしは夜空を見上げながら細い道を歩く悠の横顔をずっと見ていた。何も気にせず、ただ横顔を見ていられるのがこんなにも幸せなのか。分からない。恋愛って良く分からないけど、些細な事に幸せを感じたり嬉しくなったり出来るなら、やっぱり良いもんだと思う。好きになって良かったと思う瞬間であり――。

「……負けないから、絶対」

好きになって良かったと、いつか相思相愛になれた時に思わせるようなヒトになりたいと思う瞬間でもあった。

そうだ、こんなに星が見えるなら流れ星でも探してみようか。願いごとをして叶うなんて思っていないけど、それが話題になればいい。

「大河」

「あ、な、なに？」

うわあ、ダサイ。めっちゃくちゃ動揺してるよあたしっ。

急に顔を向けた悠に、冷めてきた頬が再燃する。

「昼間買ったシャツ、着てんだな」

「あ、ああ、うん。まあね」

やっと言って貰えた嬉しさに、思わず顔を背ける。昼間、悠が進めてくれたシャツに袖を通し、驚かせてやろうと思ったのだ。ちょっとだけ胸の辺りがきつかったが、まあまあイケてると思う。

「そうか。あー、その、何だ。似合ってんぞ」

「……っ」

アロハの力は凄まじい。

「ば、バカ。そんな事言わないでいいっ」

あんまり嬉しい事言うと、あたしまた舞い上がっちゃうから。また変な事口走るから。あんまり誉めたりしないで欲しい。

でも、ゆつくりと、あたしが動揺しないくらい細かくミキサーにでもかけたような、あたしの心の準備が出来ている上でなら、言っても大丈夫だから。それくらいで、調子乗ってまた感情に振り回されたりしないから。

ああ、でも……時々なら良いかも。

「悠、顔真っ赤よ。馴れない事しないで良いから」

ホント、時々だけだよ？ あたし、風穴だらけの壁みたいなのに、簡単にぐらついちゃうからさ。それなら、意地張らないでありがとうって言えると思う。

「ほ、ほっとけ」

顔を朱に染める悠を見て、笑みが溢れる。きっと負けないくらいあたしも真っ赤なのだろう。

ヤバいって悠。ホントに、ほんつといに時々でお願いね？
精神
力がもたないからさ。

「お、お前だって顔赤いだろうが」

——言うな、ばか。

第二十九項 影踏む虎（後書き）

珍しく、ほんとーに珍しくシリアスが続いている結婚奴隷ですが。なんと連載開始から早一年――一年で30話もいかないとかどんだけって話ですね（泣）開始当初は大河大河言われていたのが、最近じゃベルチェベルチェも増え、嬉しい限りです。大河編はかなり長いので、恐らく大河編が終わるまで来て下さっていない方も多いでしょう（笑）

前々から言っている通り、大河編が終われば二人を交えての章になる予定ですので、もうしばらく大河さんにお付き合ってくださいませ。

第三十項 朝から幸節はキツイものがある

朝が来た。

二人一部屋という、贅沢極まりない金持ち高校修学旅行二日目が始まる。いや、ほとんど最終日だろう。明日は帰る準備やらで殆んど時間を使ってしまうから。

「はあ……眠い」

昨日の、悠との散歩にかなりの精神力を使ったのだろう。身体はまだ睡眠を求めている。だと言うのに、昨夜はちよつとだけ興奮していたらしくなかなか寝付けなかったのだ。まったく、小学生じゃあるまいし。

「お？」

寝返りをうって、ふと違和感に気付く。ふにっとした柔らかな感触が指先に触れた。

一人用にしてはバカでかいベッドの端の方。すべすべしていて、もっと触っていたい衝動にかられる。

うわあ、ホントにプニプニだあ。何よこれ。

布団の中でもぞもぞ動きつつ、手の平を押し当ててみた。

柔らかい。柔らかいけど、なんだか見知った感触だ。ああー、大体予想はついてきた。知りたくなかったけど。

重い瞼をそこで開き、掠れる視界を瞬きで鮮明にする。やはりと言うかなんと言うか、人間の後頭部があたしの目な飛び込んできた。布団から露出した肩口が、寒そうに震え毛布を手繰り寄せる。肩も小さいが、手繰り寄せた手もちろんまい。

安らかな寝息をたてる、物体A……いやSはほにゃほにゃと言語を無視した謎の吐息を吐いていた。

でもさあ、これ、あたしには無いよなあ。あたしなんか、空手のせいで殆んど筋肉になっちゃってるし。ああ、なんかムカついてきた。胸は同年代から比べて大きいほうだけど、脂肪と言うより筋肉で保たれてるようなものだからなあ。こういう、女の子の子した体つきになってみたいわ。

「ふええ……?」

どうやら小さな侵入者が目を覚ましたようだ。

ごろんと身体の向きを変え、目を合わせる。ぼんやりした寝惚け眼が可愛らしい。こんな仕草も、あたしには無い。

「ああ、大河おはよー」

「おはよーじゃないわよ。何であんたがあたしのベッドに居んの?」

「ふえっ? 大河、なんでわたしのベッドに居るのー?」

「あんたがあたしのベッドに居んの！ 早く起きなさいまぬけっ」

額にでこぴんをかまし、ついでに鼻先、耳朵と連続して指で弾いた。額はでこぴんの王道であるが、耳朵にされると意外に痛いのだ。寝惚け眼の少女S——幸は違う意味で瞳に涙を溜め、額の鼻を押さえる。しばらく、おうっおうっ悶えていた。

恨めしげな視線が当然のように向けられ、ちっぽけな眼力を更なる圧力で捻り潰す。直ぐ様、幸が目を逸らした。

「な、何するんだよー」

「早く出なさいよ。なんか変な誤解を招くでしょ」

「ん？ 変な誤解って？」

「良いから出る！」

不満げに唸る幸をもう一度睨むと、叱られた飼犬のように慌てて毛布から飛び出した。今、グリーンのパジャマを着た幸は直立不動となっている。少しやり過ぎたようだが、ちょっぴり涙目なのが可愛かった。

あたしも幸に続いて起き上がる。部屋に一つだけある窓のカーテンを開けると、ホテルの前にある海原が広がっていた。キラキラと太陽の光を反射している。もう海に出てサーフィンや海水浴を楽しんでいる人まで居るくらい良い天気だ。

「ねえ大河ー。今日の予定なんだっけ？」

「自由行動」

修学など名ばかり。実際は——体育祭、文化祭などの行事はあるが——三年だけで行う最後の行事。受験に備えて英気を蓄えるための息抜きのようなものだ。それに対して不満を上げる者は一人も居らず、むしろ諸手を挙げて喜ぶべき利点だった。基本は自由で、後は各人が適当にグループを組み、事前に体験したい事などハワイについて調べ、各々が出発前に担任へプリントを提出するだけ。まさに寝てようが出掛けようが勝手にしやがれ状態。

あたしも、一日目は買い物。二日目は海で遊ぶ事になっている。もちろん幸も一緒だ。体験も良かったんだけど……なんだ、悠がどうか分からないから無難な手に出たと言うか。

思い出すだけで苦笑してしまう。もう自分の浮かれっぷりときたら、エサを前に待てをさせられているライオンだってここまでウキウキしないだろう。

今日この日の為に、わざわざ水着を買いに行ったのだ。悩んで悩んで、にやけて悩んで。店員からはさぞかし不審に見えたと思う。でも気にならなかった。気にしようとも思えなかった。

——楽しみだったから。女の子らしくないあたしだって、楽しみだったんだ。

「自由かあ。海、行くんだったよね？」

「ええ、そうよ」

幸の、海って単語にビクリと反応した自分が可笑しい。

「だよねー。でへへ、わたし水着新しいの買っちゃったんだー」

「……」

あんたもか。て言うか、幸と同レベルのあたしっていったい……。よし、忘れよう。

「ほら、見て見てっ」

がさごそとバックの中を漁り、ワンピースタイプの水着を自分の身体に合わせた。

ライムグリーンの、鮮やかな水着。ちょっとだけついたフリルが幸らしい。

「大河の水着はどんなの？」

「あ、あたしっ？ あたしのは、えと……」

「大河ならやっぱり、ビキニだね。なんたってぼんきゅっぽーんだしさあ」

へらへら笑いながら言う幸が憎らしい。ビキニなのは間違いない。間違いないが、あたしは浮かれていたのだ。浮かれていた。浮かれたんだ。だからそう、普段じゃぜつつつたいに着ないような大胆なのを買ってしまった。一応、安全策として薄手の――水着の上から羽織るカーディガンも買ったが。

「ええっと、その、まあビキニなんだけど」

「わあ、わあわあつ。見せて、ねえ見せて見せてー。ねえねえ見せて見せてー」

「……え？ いや、でも」

「見せてよー。ねえ大河見せてっ。見たい見たい大河の水着見たいっ」

「だから、うんと」

「ねえってば。見せてよ大河ー。ねえねえ」

「あー、うー……もうやかましいっ！ 少し黙りなさいっ」

ああ、うざい。久しぶりにうざい。と言っても、昨日一日うざくなかっただけなのだけど。幸とは休みの日も電話したりメールしたりしてるから日々うざいのだ。昨日は本当にうざかった。酔っ払った時は若干ピクリとしたが、まあ許容範囲内ではあった。

「良いじゃんかけちー。大河のけちー、けちんぼ大河ー。けちんーぼふっ?!」

ちなみに最後の『ぼふっ』はあたしの鉄拳である。

「うわああああん、大河がぶったあああああっ」

バタバタと部屋を出て行く幸。

直ぐ様、隣の部屋から幸の泣き声が聞こえてきた。おそらく、泣

きついているのだろう。

「はあ……。幸、パジャマのまま廊下出ないように。そのパジャマ
ださいから」

幸は微塵もださいなんて思っていないでしょうね。

第三十一項 強がっても臆病者

軽めの朝食の後、あたしは幸と一緒にホテルを出た。

服装は、薄手のパーカーとジーンズ。もちろん、中にはしっかりと水着を着込んで、いつでも海に入れるようにしている。

外に出てまず、陽光が目を眩ます。ホテルの真ん前は、道路越しに白い砂浜が視界いっぱいに広がっていた。既にパラソルを刺して日光浴する人や、砂地にシートを敷いて談笑する人達も居る。

「さて、どうしよっか」

「んー、そうね……」

幸の問いかけに首をかしげて見せるが、どうしたいかなんてとつくのとうに決まっているのだ。

幸にバレないよう、且つ不自然でないよう辺りを見回してみる。目的のモノは見つからない。もしかしたら、海には来ないのかも、考えただけで落胆してしまう自分が居た。

あたしもバカだなあ。なら最初から誘えば良いのに。て言うか、悠も悠だ。普通男から誘うもんでしようが。ま、あたしと悠は何でもないから誘うも何も無いけど。

——ここに居たのが、あたしじゃなくてベルチェさんならどうな

のだろう。

「せっかく海に、しかもハワイの海に来たんだから、二人で遊んでもねー」

「そう、ね……」

道路を渡って砂浜へ。ホテル所有の更衣室やシャワー室。それに貸出し無料のパラソルとシートまである。至れり尽くせりとはこの事だ。

きゃっきゃとはしゃぐ他クラスの生徒を横目に、あたしはワンボックスの更衣室に入る。いくら下に着ていようが、人前で『服を脱ぐ』という行為は気恥ずかしい。

パーカーを脱いで、持って来た鞆に入れる。カーディガンは……着なくていいか。ジーンズも脱ぐと、外気に肌が晒された。しっとり汗ばんだ肌に手を這わせながら、自分の姿を見下ろす。

特に代わり映えしないビキニ。フリルもなく、模様もないシンプルな物。が、色が少し際どかった。

「うう、大人過ぎたかも」

——黒なのだ。女らしくない精神だと自負していても、身体は嫌でも丸みを帯びてくる。胸だって空手には邪魔なのに否応にも膨らんできたし、成長するにつれ、男子との体格の違いに愕然とさせられてしまう。女にしては身長も高い方ではあるが、やはり肩などを見ると自分でも華奢だなと思う。男に比べたら、だけどさ。

こんな色気むんむんな水着、着たくなかった。ただ、可愛い系が絶望的に似合わないのだ。店員さんに勧められた水着も、全部ビキニ二十大人な感じがしていた。あたしももう18。されど18。大人だと勘違いするアホもいるけど、親の脛をかじってる間はどんなに粹がろうと子供で。

心を置いたまま、むくむくと身体だけ成長してしまったタイプの典型であるあたしが、強がるのが特技のような中二病みたいなあたしが――こんな、こんな大胆なのを着る事になるとは誰が予想しただろういや誰もしなかったはずだ。

「……はあ。なんか、もうどうでも良くなってきた」

面倒だ。人の心は面倒くさい。自我も他者も、この世の全ては面倒な事で溢れ返っている。

――でも。

ワンボックスから出て、少し離れた所から幸が出て来るの待つ。待とう、と思ったんだけど。

「た、大河、お前、なんつう」

「……っ」

一番見て欲しくて、一番見て欲しくなかった人があたしを見ていた。目を見開き、海に居るのだから当然上半身裸の水着姿で。

瞬間、あたしの足は、悠とは逆方向に駆け出していた。

——それに勝たなきゃ、何にも出来ないんだ。

「恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしいっ。なんで?! なんだこんな……っ」

両腕で胸を隠すように抱き締めつつ、人気の無い岩場まで走った。おかしい。頭がぼーっとする。逆上せたみたいだ。

岩場の影に背を預け、然程距離を走ってないのに関わらず荒い息が口から漏れた。

どうしてよ。どうして逃げてんのよっ。一番、一番……っ!!

情けない。情けないよあたし。水着なんて、別に普通でしようが。何が恥ずかしいのよ。意味が分からない。だって、似合わないとか言われた訳じゃないのに。もしかしたら、似合ってるって言うてくれるかもしれないのに。

「っ……いた。何で逃げんだよ」

身に掛かって陰りに顔を上げると、悠が岩に手をついて息を荒げていた。追って来てくれたらしい。

「……な、何か用?」

嬉しいくせに、あたしはとことん素直じゃない。

「用って、人の顔見るなり逃げ出されたら誰だって気になるだろうが」

「別に、逃げてない……」

ぎゅっと、悠から隠すように自分の身体を抱き締める。背中が岩場で前には悠。逃げ場は無く、こうする事であたしの柔な心を守るしかなかったのだ。似合わないなんて言われてみる、ホントに泣くよあたし。

「逃げただろ」

「逃げてない」

「逃げた」

「逃げてないっ」

「逃げただろっ」

「……っ」

びくりと身体が震える。初めて、かもしれない。こんな、露骨に怒鳴られるのは。こんなに、悠が怒ってるのは。悠が怒る時はだいたい呆れとかを含んでいるし、大会直前に怪我をした時も怒ったけど笑っていた。しょうがないなあって。

でも、この悠は知らない。こんなに怒ってる悠、あたしは知らない。

「ちくしょう……！」

自分の頭を押さえて、落ち着けと言わんばかりに左右に振った。

「不機嫌だったり機嫌良かったり。俺もう分かんねえよ。お前が何考えてんのか。せっかく——」

悠は唇を噛んで言葉を飲み込む。

せっかく？　せっかく、なに？　せっかく何なの？

珍しく憂いのこもった表情に鼓動が激しくなる。陽光のせいとは思えないほど身体が熱く火照ってきた。空気の圧力がピリピリと肌に感じるようだ。流れる汗の一滴一滴が敏感に感じとれる。

聞きたい。せっかくの、その後を。せっかく、なに？　言って。言ってみなさいよ悠、ねえ……。

「こんな状況で夏まで？　無理に決まってるだろ……」

「は、悠？」

腕を掴まれ、元々悪い目付きが更に鋭く研ぎ澄まされた。

「来い」

「え……あ、うん」

——逆らえない。

怖いの意味が一転し、違う意味で身体が震えた。

悠、男の顔してる。また、見た事ない顔だ。怖いのに、ついていかなきゃと思う。

手から伝わってくる悠の体温が生々しい。素肌だから？ それとも、お互い肌をさらけ出してる面積が広いから？

怖いのと恥ずかしいのと、見た事のない悠が見れて嬉しいのところがちやまぜになって、あたしの脳髓を犯す。

「……悠」

あたしを引っ張る腕は乱暴だけど、少しだけ、悠の本心を見たような気がした。

「なに、これ。凄い……」

悠に引っ張られて来たのは、あたしが走ってきた方向の真逆——浜辺の端で、ここに来るまでいったい何人の同級生にこの姿を見られたか。考えるだけで顔から火を噴きそうだ。

浜辺を仕切るように立ちはだかる岩場に沿って歩き、じりじりと足首、膝、腰まで海水に浸かっていく。いったい何処に連れて行くかと言うのか。不思議と訊こうとは思わなかった。ただ、繋がれた手に意識が集中してしまう。

ヘソまで浸かれば、手から伝わる温もりが更に生々しく、頼もしくなってくる。

胸の辺りまで浸かり始めた頃には、逆に水面が下へ下へと下がってきた。

そうしてたどり着いたのが、ここだった。

「雄也と泳いでる時に、な。岩場が変なふうに凹んでるから見に来てみたら、こんなだった」

洞窟。一言で言えばこの単語が一番似つかわしい。だが、洞窟とは暗くじめじめしたイメージが先立つもの。悠が連れて来てくれたのは、そんなイメージとは正反対の……なんて言えば良いのか、そう、神秘的？ 幻想的？ どっちでも良いか。こんなにも綺麗なんだから。

洞窟の中に入った頃には、膝下までしか海水は無かった。奥は15メートルほどで行き止まりになっていて、いかにも自然に出来た雰囲気とする。

洞窟の海水は、外から差し込む太陽の光でアクアマリンに輝き、何のへんてつもない岩肌を蒼に染め上げている。まるで空がそのまま溶けこんだようだった。

「今は青いけどさ、夕焼けになったらそれはそれで良さそうだ」

「……」

どうしよう、何て言おう。

ちらっと悠の顔を盗み見て溜め息を吐く。はたして、感傷か自分への呆れか。

ありがとうって言うべきなのかな？　でも何だかそんな雰囲気でも無いし。ああ、ダメだあたし。何か、なにか気のきいた台詞を……。

「本当は後で連れて来ようと思ったんだが、大河が、んな面してるから思わずな」

悠はじゃぶじゃぶと水を掻き分け、洞窟の奥に背中を預けて座り込んだ。顔にはしっかりと苦笑の色。あたしはどんな顔してたんだいったい。少なくとも、凛々しくはなかったと思う。

「……ごめん。ちょっと、ちょっとだけよ？　ちょっとだけ、嫌な方に考えこんじゃって」

「そっか、ちょっとだけ、ね。お前の顔、ちよっとって感じじゃなかったが？」

「うっさい」

軽口が出るようになれば、もう大丈夫。

第三十一項 強がっても臆病者（後書き）

大河編もそろそろ終盤です。え？これで？ちょ、中途半端じゃね？
と思う方、私もそう思います（笑）

いままでの書き方でいたい分かってきたかと思いますが、大河さん、かなりの乙女でいらっしゃる。当初とはかなり変わった登場人物の一人です。中途半端が似合わない言動とは逆に、かなりヘタレな大河さんには、中途半端な終わりくらいが丁度良いかなと（苦笑）

実はここまで言動と内面が違う登場人物を書いた事がなく。他小説でも、真っ直ぐな方が多いのですよ。そう言った意味でも、大河さんは書いていて難しいし、特にベルチェが絡むと脳の切り替えが大変で（泣）とまあ、こんな感じに言ってますが、実際は既婚者を横からかつさう略奪愛ですからね（爆）昼ドラ展開一直線ではあるものの、常にほのぼの殺伐とした矛盾を書いていきたいと思う次第でございます。

珍しく後書きを長々と書きましたが、一区切りとしてはここら辺が良いかなと思いました。

ここからは修学旅行・大河編の番外を装ったオチに移行いたします故、最近株の上がってきたベルチェすきーな皆様、もうしばらくお待ちくださいませ。

第三十二項 同情？なにそれ美味しいの？

……顔を合わせた瞬間逃げられれば、誰だって気になるはずだ。俺ももちろんその例には漏れず、かと言って相手——つまり大河に不快な思いをさせたんじゃないかと言う不安もあった。

一瞬の出来事だったと思う。

かなり早い内から雄也達と泳ぎに出ていた俺は、少し休憩しようと浜辺に戻った。そしたらばったりと。なーんの脈絡もなく大河に遭遇。でもって、黒のアダルティーな水着に見とれーの、コンマの世界にあって時間が止まったようにジロジロと見てしまったのだ。

だから一瞬、ほんの一瞬だけ大河に不快な思いをさせたんじゃないかって思った。野郎の視線には馴れてるだろうけど、あそこまで露骨に、しかも舐め回すように見られちゃ引くだろう。だがしかし。それでも相手は大河。逃げるなんて、よほどの事が無い限りあり得ない。あの場合の大河なら鉄拳の一発でも決めて、射殺するように睨んだ後、朗らかに笑う……はずなのだ。

だから違うと思った。林檎みたいに顔を赤らめ、身を隠すようにして逃げる大河を見て何事かと思った。

「んで？ 永井達は良いの？」

「ああ。別に俺一人居なくなっても十分だろ」

「むふー、穂村くんが居るとわくわくするねー」

なんで逃げられたのかも良く分かん。なんで機嫌が悪かったのかも良く分かん。なんで機嫌が良くなったのかも分かん。なんにも分かんねえ。大河が楽しそうなら良いってのは本心から思っていると思いたい。

俺と大河は浜辺で半ベソをかいて居た朝賀と合流、そのまま海で学生らしく遊ぶ事にしたのだ。断じて俺は浜辺で寝そべっていたいなどとは考えていない。

しっかしまあ、水着を着ると見馴れた同級生も代わり映えするもんだ。朝賀がなんだか眩しく見える。無論太陽のせいではあると思われるが。いや、太陽を抜きにしても少しドギマギしているのは確かであり。周りを見回せばその他にも見知った顔がやたらと面積の小さな布切れを身につけてはしゃぎ回っている。

「……」

「なによ？」

ふんつと鼻を鳴らし、腰に手を当てて仁王立ちするいつもの大河さん。ほんのり朱に染まる頬は可愛らしい恥じらいのある少女のモノである。ああ、恥じらい。なんて良い言葉なんだ。最近どっかの超アブノーマルな性癖の持ち主のせいで歪曲させられていたからなあ。つか、ベルチェがここに居たら紐で海に来そうだ……。

——つと、そうじゃなくて。周りにいる少女達と比べて、大河のプロポーションは凶暴凶悪であり、どうも目が下下へと行ってしまふ。見たい訳じゃない。見たい訳じゃないんだっ。けどそう、男

つてのは生まれつきアホな回路してるから。

「穂村くん、鼻の下伸びてるよ」

「……朝賀」

否定もせず、かと言って肯定もせずじつと浅賀を見つめる。

「な、なんだよー。なんでそんな哀れんだ目でわたしを見るのっ？」

「別に」

「ううー」

ぶっちゃけ幼児体型な朝賀。身長で言えばベルチェと良い勝負なのに、全体的に寸胴。まさにお子ちゃま。ベルチェなんて、出てる所と引っ込んでる所の凹凸がすごいのに。大河のそれに比べりゃ見劣りするが、肌の綺麗さや全体のバランスを考えたら……って何物知り顔で分析してんだ俺は。まるでベルチェの裸を知ってるみたいじゃねえか。や、九割は一致しているであろう想像図を思い浮かべられる程度には知ってしまっているけど。

「穂村くんもそっちスキーなの？」

「そう言う訳じゃないけど。なんだ、残念」

「残念って言われたああああっ」

泣きこそしなかったが、ハワイの広い空に向かって吠えるお子ちゃま朝賀。

「な、なによ、何の話？」

「くうううつ、大河には関係ないもんねっ。こんな重い物二つもつけてたら邪魔だもんね」

「朝賀……良いから、お前はそのまま。だからやっかみは止めよう、な？」

「男の子に同情されたあああああっ」

再び絶叫。

「くそう、良いもん別に。わたしだってまだ成長期だし。まだまだ望みは――」

「ない」

「ふええ、穂村くんが言わないでよっ」

しだいにその瞳から大粒の涙が滲み出てくる。うむ、朝賀にしては良く頑張った方だ。

しばらく自分の胸を恨めしげに見ていたが、歪んだ感情は自分から大河へと移る。

一方、睨み付けられた大河はさっきから会話が分からずきよんとしていた。今だって何で朝賀に睨まれているのか分かっていないだろう。正確に言えば、朝賀が睨んでいるのは大河と言うよりも大河のあれなんだが。

「ううっ、わたしだって、わたしだってまだまだ……でも、あれ？
中学の時から変わってないような……。ううん、そんなはずない
もんちよっとは増えてるもん。ちよっと……ちよっとかよー、三年
も経ってちよっとかよー」

ぶつぶつ呟く朝賀を華麗にスルーして、俺は若干困惑気味の大河
に視線を戻す。顔が引きつってるのは考えるまでもなく、朝賀の奇
妙な百面相を見ての事である。

「ちよ、幸どうしちゃったの？」

「ああ、あれか？ あれはだな、つまりその、平等について深く考
えてるんだ」

「平等？ どうしてまた幸にしてはそんな高レベルな事を……」

「別に高レベルじゃないもんっ。大河まで、大河までわたしをバカ
にするんだっ。いらないよ！ そんな同情いらないよ！ 同情する
なら、同情するなら——！！」

我に返った朝賀は半泣きで、つか全泣きで喚きつつ両の手をワキ
ワキと動かす。

その気迫と、ベルチェに次ぐ変態知能指数を駆使して大河にじり
じりと距離を詰めていく。日本で二番目に強い女子高生相手に、間
合いを詰められている事に気付かせないなんて、なんて奴だ。

火山が噴火する一瞬の間のように浅賀は静止し——爆発した。

「――そのけしからん乳をくれえええええっ」

「うきゃっ?!」

傍若無人な虎もビクリな俊敏さで後ろに周りこみ、あろうことか大河のあれ……朝賀曰くけしからん乳を鷺掴みにした。

後はもう、むにゅむにゅのもつきゅもつきゅと。

なんてうらやま――もとい恐ろしい事を。

「ひゃ、ちょ、幸っ、な、なにすんの、あ、あう、ん、ふわっ……ば、バカあああああ」

「こんなものっ、こんなもののおおおおっ!!」

上下左右。容赦も遠慮もなく揉みしだかれるけしからん乳。つか、うらわかき乙女が公衆の面前でけしからん乳と叫んだのか。勇者だな。

大河の抵抗も虚しく、蹂躪じゅうりんされる様を俺はただただ見つめていた。深い意味は無いが、特等席ではある。どうしよう、止めるべきか否か。

「さ、幸っ、ほんと、につ、や、やめてよ恥ずか、恥ずかしいって、あふっ」

「わたしだって、わたしだってもっと成長したかったもんでも遺伝なんだもんわたしのせいじゃないもんっ」

わんわん泣く朝賀と、肌全体を紅潮させてきた大河。あの大河が半分泣いている。ま、こいつ免疫ないからなあ。

「……」

どうしよう。大河と朝賀の背後に百合の花が見える。当の本人達はそれぞれ違う方向に必死だと言うのに……。

第三十二項 同情？なにそれ美味しいの？（後書き）

はい、一ヶ月以上経ってしまいましたね。本当に申し訳ないです。

えー、言い訳なのですが（殴）現在、小説を三つ同時に執筆と言う、私のスペックからすれば離れ業を行なっていていまして。一つは勿論、この結婚奴隷。もう一つが吸血鬼の現代ファンタジー。最後が、私も初挑戦で苦戦中のーコメディー抜きの恋愛モノ。私の作風を分かって下さる方なら驚きかな、と。コメディー抜きです。ベルチェのようなアホな子も出て来ません。

まあ、詳しくはリニューアルに伴い執筆状況？のような事を掲載出来るみたいなのでそこで。

第三十三項 パプリカ食べたくありません

「ふっー、ふっー、ふっー」

肩を震わせて荒く息を吐く大河さん。

早送りのような、それでいてスロー再生のような。いまいち判断はつかないけど、取りあえず言える事は一つ。

——死んだな。

呆然と立ち尽くす事しか出来なかった俺には、注意や間に入って止めるなんて不可能だった。

「はっ、わ、わたしはいったい何を……」

我に返った朝賀が、大河の胸を鷲掴みしていた事に気付くのはまさしく一瞬だった。慌てて大河から離れ、信じられないものでも見るように自分の手を見つめる。これも、まさしく一瞬の困惑である。

大河は大河で、自分の胸を腕で隠しある意味般若面より恐ろしい涙目で朝賀を睨み付けた。

一瞬でありスロー再生。その他に言いようがない。

ただただ動揺する朝賀の肩を両手でがっちりと押さえ、足を掛けて身体を反転させる。まるでパワーボムをやるみたいな姿勢のまま、バシャバシャと水を掻き分けるように浅瀬へ。

んでもって、そのままドスンと。

「……見た？」

「見てない」

何を、とは聞かずに直ぐ様否定する。こんなもの見せられて見たなどと吐ける強者がいるだろうか。少なくとも俺には無理だ。大河も見られたのは重々承知してはいると思う。それでも問い掛けて否定してもらわないと、精神的ダメージが大きすぎるのだろう。

「あー、でもな大河。殺人は良くないと思うぞ？ 朝賀絶対死んだって」

「朝賀？ 誰それ、そんな痴女あたし知らないわよ」

朝賀幸は記憶から抹消されたらしい。

それにしても——と、俺は無様とも言える恰好を晒す朝賀に目をやる。周りの人達も、ギョツと目を見開き何事も無かったかのよう
に振る舞っている。

頭頂部から浅瀬の砂に叩き落とされた朝賀は、海面から足だけ出

した恰好なのだ。所謂、犬神——けほつけほつ。

どうしよう。助けようか。でも助けようものなら、隣に俺と言う新たなオブジェが建設されそうだ。

「さて、何して遊ぶ？　せつかくこんな綺麗な海に来たんだし、遊ばないと損よね」

不気味だ。にこやかに笑う大河が不気味だ。

「ああでも、海で二人ってのも何か盛り上がりには欠けるわね。せめてもう一人居れば良いんだけど」

その『もう一人』は、お前が今手にかけてだろうが。

「あら、あんな所に珍しい形の珊瑚が」

わざとらしく振り向いて、今まさに三途の川をお渡りになってらっしゃる朝賀の元に歩み寄った。つか珊瑚って、そんなに現実逃避したいのか、それとも朝賀が憎いのか。

完全に正気を失った虎を止める術はない。近寄れば喰われ、逃げれば背中からバツサリとやられる。ええい、誰が麻酔銃でも持って来やがれ。

結界でも張り巡らされているのだろう。野次馬と化していた人間は蜘蛛の子のように散っていく。うむ、冷静な判断だ。

「……ふん」

つつーっと朝賀の太股を人差し指の腹でなぞる。目が据わっているのは気のせいだと思う。

ていうか、マジで早く引っこ抜かなきゃ手遅れになるぞアレ。やあもうアレとしか言い様がない存在に成り果てるけど、一応アレも霊長類の一種だし。霊長類アホな子科だし。なんか哀れだしさ。

「ふべばばば!？」

「奇声?!」

なんだと思い、思考の海から帰ってくれば、いまだ死の海から帰還を果たせていない蛮勇の長浅賀の太股を、大河がちびつとだけつねっていた。この微妙なちびちび感が難しく、大河のそれは匠とも呼べるほど完璧なものであった。

いや、最も驚くべき点は朝賀に意識があった——もっと言えば生きていた事だが、何故だろう、特に疑問は感じない。不思議だ。ああ生きてたんだ、って漠然としか感じられない自分が不思議だ。

ジタバタと動き出した足を持ち前の腕力で押さえつけ、更なる責め苦を朝賀に味あわせ始めた。

「……」

——先ほどと同じく太股をつねり。

「ふばべー」

「あー……やめてーって言ってるな」

——つねった箇所をひっぱたき。

「びびゃっ、びびゃっ」

「んー、いたっ、いたっ……か？」

締め、自由だった足首を掴み足の裏を擦る。それはもう拷問のように。つっても、擦りは立派な拷問なんだけど。

ふるふると震えていた足は拷問に耐えきれず爆発。が、大河の筋力に叶うはずもなくあっさりと沈静化した。ある意味じゃ賢明とも言える。

「ばべばべばべー!!」

「大河ー、多分やめやめやめてーって言ってると思うぞー」

もちろん、俺の言葉に耳をかすトランス大河ではなく。

——ヒートアップ。

「ぶびゃああああ、あがつ、ぶびぶぶがああああ」

「……ええっと、悪い浅賀。もっかい言ってくれ」

「ばばばばばぶばばー!!」

「パプリカ食べたいな？」

この状況じゃ、ちと無理がある思うが。

「びぶー、ばびべびぶー!!」

「死ぬーマジで死ぬーだと思われ」

「死ねっ」

「返事したっ!？」

沈黙を破った大河から、みるみる内にまがましい気配が漂ってくる。まさにカオス。予言にあった恐怖の大王は、大河に恐れをなして逃げたと言われても納得出来てしまうほどの恐ろしさだった。

「ぶえええええっ、ばびばがびべっでびっだあああああ」

なんつーか、意味は分からなくても大体想像出来んな。多分あれだ、泣いてんだな。いつもみたいに。

取りあえずさ、一度死んどこうな朝賀。人間として。陸に生きる二足歩行の生物として。お前、もう五分は酸素吸ってないからさ。もしかして朝賀ってエラ呼吸出来たりする？ なら問題ないけど。お前、なんか脇腹とかその辺にエラがあってもおかしくなさそうだし。ああ、いや別に半魚人と言ってる訳じゃないんだ。新人類であるお前に対しての、ちっぽけな知的好奇心なだけであって。

決して、気味悪いとか思っていないから。な？

第三十三項 パブリカ食べたくありません（後書き）

投稿が遅くなりました。しかも理由が投稿エラーと言う、しょもない理由で（泣）読者の皆様に関係のない理由で大変申し訳ないです。

第三十四項 小学生みたいな恋？

「ねえねえ、何して遊ぶー？」

「……バカな」

「ん？ 何がー？」

拷問の末に、大根のように引っこ抜かれた朝賀幸18歳。ぶすつとした顔を隠そうともしない大河にも、満面の笑みを向けている。まるで、何事も無かったかのようだ。しかも、である。その『まるで』を現実のものとするべくなのか否か、朝賀本人もぴんぴんしていたのだ。そういえば、あれだけ強くつねった太股が健康的な肌色に色づいている。もしかしてもう治ったのか。普通赤くなっていたりするものだが。

人間を超越した新人類って説もあながち間違いじゃなさそうだな。俺なんか、大河にやられたら三日は引き摺るのに。復活まで五分とかからなかった。つまりあれだ、新陳代謝とかその辺が十倍くらい早いんだそうしようそうしておこうそうでないと病院に連れこんでしまう。

「まあ、海に来たんだから海に行くのは勿論として」

「うんうん」

いくら突っ込んでも「何が？」で済まされるのは分かりきった事

なので、取りあえず乗っておく。

ぶっちゃけ、大河と何も気にせずに思い切り羽目を外せるのは今日で終わりかもしれないし……ベルチェのせいだ。

「大河はどうする？」

「あたし？ んー、幸を沈めて海の幸として食すってのは？」

「わたし美味しくないよ？」

え？ そこ……？

「ふざけんなっ。殺人は却下。つか人間なんか食いたくねえだろ」

「何言ってるのよ。食べるのはあんたよ」

「……俺っ?!」

「ええっ、わたし穂村くんに食べられ——」

「だああああっ、変な意味になるから言うな!!」

朝賀が至極真面目に抗議しているのは分かる。分かるけど、人の目ってやつを考えようか朝賀。この世界はお前を中心に回ってるんじゃないぞ。

つまらなそうに腕を組んでそっぽを向く大河はこの際無視だ無視。あんな酒乱状態のクレイジータイガーに構ってたら死ぬ、俺の精神が。

わたし美味しいのかなあ？　とか問題発言してる朝賀もスルーとして……ってそしたら俺しか考える人いねえっ。

「で、何すんのよ悠」

「まあ待て」

「穂村くん何して遊ぶのー？」

「待っててば」

ううむ、三人で遊べる事。ビーチボールでもあれば良いんだか。結局三人とも人任せで誰一人として持ってきてないし。

つまり、林間学校にトランプ持ってこうと思って、ああでも誰が持ってくるか、と思い結局誰も持って来なかったみたいなお間抜けな状況だな。

んー、どうするか。

ちなみに今は、足首が浸かる位の場所をコンビニで屯する不良のように陣取っている。朝賀と大河なんて、座りこんで意味もなくちやぷちやぷと水面を叩いている始末だ。端から見ればすげえ暇人三人組に見える事だろう。

多分、つつ立ってる俺がボスに見られてるはず。

「悠まだ？」

「うっさい黙れ」

「だま？ うん？ ええっと、ごめん悠。今何だった？」

「何でもないです」

あー、蟹だーとかほざいてる浅賀はやっぱりスルーして脳内検索に力を入れる。

海だ。うん、海だ。海と言えばそう、ビーチバレー。けどボールは無い。海と言え、ぼんきゅっぼーんのパツキン美女だと雄也は言っていた。ぼんきゅっぼーんは居る事には居るけどパツキンじゃない。そもそも遊びに関係ねえ。

後は……砂遊び？ 城建築？ この歳で砂遊びはちょっとなあ。万が一大河朝賀の二人に好評だったとしても、作っていく内から朝賀が壊していきそうだし。それに苛々した大河がまた暴れだすかもしれない。

「穂村くんヒマー」

「……むむう」

「ヒマヒマヒマヒマー」

「……いや、でもなあ」

「ヒマヒマヒマヒマヒマヒマ過ぎて感覚がマヒツちゃいそうだよ。ヒマ過ぎてマヒツちゃいそう……ぷぷ、まひってね、まひってマヒツちゃいそう、あっはっはっはっ」

「あああもう、うっせえっ」

訳分かんねえ事ほざいてるあさがを一括。脳天から突き抜けるように通った苛立ちを、地面に逃がすべく右足に力を入れ思い切り足を踏み鳴らした。

——ビチャン。

「びちゃん？」

こんな音がしたと思う。水面を叩けば水が跳ねるのは当然だ。でも、ならばこの背骨を首うなじから引き抜かれるようなこの感覚は何なのだろうか。

「……しょっぱい」

「しょっぱい？」

俺の右方向。何故か瞼を閉じて口元を拭う大河の姿があった。いったい何があったのか、大河の頬にはべっとり砂が張り付いている。

もしかしてもしかしなくても、俺のせいだったりする？

眠りから覚めた眠り姫のように、ゆっくりと目を開き上目遣いに俺を見つめる。いや、上目遣いではあるが見つめるなんて生易しいもんじゃねえ。視線で人を射殺す魔眼だった。アナコンダだってこんな邪悪な眼はしてないと思う……見たことねえけど。

「しょっぱい」

「えと、悪い」

「しょっぱい」

「あ、ああー。だから悪かったって」

しょっぱい。言えば言うほど声が低く威圧的になっている。朝賀なんてもう、いつでも土下座出来る体制だった。

「砂怖い水怖い砂怖い水怖い砂怖い水怖い……」

忘れ去られたのではなく、トラウマとして刻まれ防衛本能が働いていたらしい。ごめん、朝賀。新人類とか言ってよ。後でアメ三つやるから許せ。まあ、俺が生きてたらの話だが。

すらりとした足の爪先が柔らかな砂に埋もれ、ゆらゆらとうごめく。一瞬脚線美に見とれそうになったがんな事してる場合じゃない。腕を盾にしようと構え――しかし、奴の蹴りはマッハを越えていた。

「三倍返しッ!!」

「あぶしっ?!」

爪先が砂ごと水を巻き上げ、我が顔面に直撃。つか、水より砂が多いってのはどういうこった。

頭の中で冷静に考えつつ、口に入った砂をぺっぺっと吐き出す。

「砂怖い水怖い砂怖い水怖い砂怖い水怖い砂怖い……」

どこからか、復活の呪文が聞こえた気がした。

「てめっ、砂多すぎんだちくしょう！」

俺も負けじと水を掛け返す。と言ってもけの浅瀬だ、威力的には蚊ほども無く、大河の芸術的かつ凶暴な砂掛けには遠く及ばない。

じりじりと少しずつ深い所へ撤退しつつ、両腕でガッチリガード。

「だいたいあんた、遊びの一つも思い浮かばないのっ?！」

「何も考えてねえくせに文句ばっか言ってるじゃねえ！」

「うっさいこのバカ！」

「誰がバカだ誰が!!」

水面が腰の辺りまで来た頃には、ただ力任せに水を掛け合う始末だった。腕を交互に振り数で攻め、同時に突き出し一発を狙い。罵り合いもどんどん低レベル化している。最早小学生のケンカだった。

ああ、でも、いつもこんな感じだった。ベルチェが来る以前——いや、俺が大河に惹かれるよりも前。顔を合わせる度に何かしらでケンカになって、結局あやふやのまま普通に会話してて。

意識し過ぎていたのかもしれない。これじゃあバカと言われても仕方ない。こんなんじゃないじゃあいつまで経っても追いつけない。

「死ねっ、悠なんて死んでしまえ!!」

「お前ももっと女らしくしやがれこの剛力がっ!!」

「誰が剛力かああああっ!!」

「お前だ」

「……冷静に返事してんじゃないわよ!」

第三十五項 ついで之宝探し

「し、死ねる。今なら直ぐにでも死ねる……」

大河VS俺。第一回、ドキッ水かけ合戦。ポロリは無いよーのおかけで、昼飯を食べた辺りから全身が筋肉痛だった。洒落にならない水量と砂に打ちのめされ筋肉が阿鼻叫喚なのだ。最近運動して無かったからなあ。

中途半端な休憩が、ハイになっていた頭を冷まし疲労をこれでもかと伝えてくる。

部屋にあるベッドにうつぶせに寝そべり、声にならない呻きを上げた。なんだか牛になった気分だ。

薄情なルームメイトは遊びに出掛けてしまった。静かな部屋で、のんびりと過ごすのも嫌いではない。ただ、ここはハワイなのだ。ハワイまで来て部屋でのんびりってどんだけヒッキーなんだと思う。せつかくだから、洋物ドラマでも見ようかと思っても、リモコンまで動くのは億劫だ。

「うおうっ!？」

ポケットに入っていた携帯のバイブレーションに、ビクリと硬直。小さな刺激でも、今の俺には多大なダメージ。

ガチガチに緊張した筋肉をやっとこさ動かして携帯を取り出す。

ふっー、まさか携帯を取るだけでこんなにも疲労してしまうとは。今日一日は安静にしてないとヤバそうだ。

「……もしもし」

「あっ。もしもし、わたしわたし。今からそっち行くから待っててねー。じゃあ……」

「おいこら待て。何切ろうとしてやがる、新手の詐欺がてめえは。名を名乗れっ」

「わたしだよわたしわたしー」

オレオレ詐欺ならぬ、わたしわたし詐欺か。近頃の詐欺はしょうもないパクリ発想なのだろうか。今時オレオレに引かかる奴なんざいないだろうに。

いまだにわたしわたしを連呼する頭痛い子と、どう会話したものでだろう。そもそも、こっちに来るとは何事だろうか。GPS？ 衛星写真？ もしや俺、監視されてる？

……ダメだ。身体が痛重すぎてアホな発想が生まれてこない。だいたい衛星使ってまで監視されてたまるかってんだよ。

「……来んな、じゃ」

そのままピツと切っても良かったけど、ここは一応相手をおちよくる意味を含めて律義に挨拶をしてから切ってみようじゃないか。

「あー！　だめだめ切っちゃだめー！　わたし、朝賀だよ朝賀幸っ」

「だろうな。だろうと思ったから切ろうとしたんだ……」

良いだろ、現実逃避くらい。こいつが絡むと大河が絡む。朝賀＋大河の化学反応なんて、何かしらのトラブル発生イベントに決まってるんだ。分かりきった事象に自ら首を突っ込むほどバカになったつもりはない。ないが――トラブルとは、自分と思惑とは裏腹に起こる強制イベントなんだ。悲しい事に。

電話口から大河の急かすような声も聞こえてくる。やっぱりと言えばやっぱりだった。我がクラスが誇るうざい女ナンバー1でありオンリー1な朝賀に、好き好んで付き合う物好きな奴なんて大河くらいなのだ。朝賀With友達の輪はあくまで朝賀の避難用。避難用とはまさしく逃げて来るための場所であり、わざわざ自分からやって来てくれる便利アイテムではない。彼女らも、面倒に巻き込まれるとは御免と言ったところか。その気持ちは良くわかる。

「で、何用？」

「うん、だから今からそっち行くねー。て言うかもう来ちゃった」

「悠ー、行くわよ！」

電話口から聞こえたのではない。電子音を介さずリアルな声が脳味噌を揺さぶった。声だけで分かる。

意思の強いはっきりとした口調。他人の事情なんてお構い無しの傍若無人が許されると本気で信じている声色。

「……大河さん？　女子は男子の部屋に来ちゃいけないですよ？」

「バレなきゃ大丈夫よ」

うっ。一瞬、確かにと思ってしまったズボラな自分が恨めしい。

「ほら、早く立って！」

「……筋肉痛で動けねえんだよ」

「……それで？」

「それで！？　それでときたか！　完全にお前のせいだからな！
お前が無茶苦茶な事するから——」

「うだうだ言ってるんじゃないわよ、みみっちい男ね」

——何故そこまで言われなくちゃならない……。

筋肉痛だって言ってるにも関わらず、ほれほれと俺の背中を容赦無く叩いてくる虎。大河の馬鹿力で叩かれて悲鳴を上げなかった自分を誉めてやりたい。いや誉める。良く頑張った俺。

大河の背中からぴよこりと顔を出し、ケラケラ笑ってる朝賀は後で苛め……虐げるとして。同じか。

「さっさと起きなさいっ」

「痛い痛い痛い痛いっ、マジで筋肉千切れるううううっ！！」

無理矢理腕を引っ張られ、立たされ、背筋を伸ばさせられーの。とんだ嫌がらせだった。怪我人って訳じゃないが、これじゃあ確実に怪我人になる。つかなくてやるっ。負い目感じさせてやるー！

内心の怒りを隠すように、重い溜め息を吐く。

ただ立ってるだけで痛いなんて、老人になった気分だ。こんな思いするくらいなら、俺は早死でも良い。むしろ、何でもない日常で、ある日気付いたら死んでましたあくらいが良い。よろしくな、神。

「ってて。んで、どこ行くかくらいは教えてくれんだろうな」

「あ、これだよこれー」

ひょっこりと出てきた朝賀が手にしていたのはーお宝マップ。決められた範囲にあるチェックポイントに行き、全て回ると賞品ゲット。所謂スタンプラリーだった。

「な、なあ、これってガキ用じゃね？」

チラシの右下。対象年齢10歳となっている。対象より8歳も大きなお兄さんお姉さんがやるもんじゃねえだろ。

朝賀は目をキラキラと輝かせて、しきにお宝お宝とわくわくしている様子だった。大河は……まあ俺と同じ顔をしてるだけ言っておこう。死なば諸共ってヤツか。大変迷惑な話だ。

しかも範囲は結構な広さで、半日やそこらでクリアするのではなく、二日や三日かけてクリアするような物である。カギ用にはかなりハードだ。

うげ、山道とかあるし。ええっと、なだらかな道なのでご安心――
――筋肉痛で死にそうな俺はご安心出来るかつ。海岸沿いの崖やら、
砂浜に埋もれたスタンプを探せならハード過ぎるだろうが。大きな
お兄さん悲鳴あげるって！

「なあ、大河。俺筋肉痛だしさ。足手まといになりそうだからパス
……」

「却下。行くわよ」

「わーい、宝探しだー！！」

――誰かタスケテー！

第三十六項 ついでのついで

第一の関門——崖。

「……なあ、これホントにガキ用？ 俺にはそれなりの装備が無いとぽっくり逝っちまいそうな気がするんだが」

「……」

「……」

二人とも無言だった。まあ、正常な反応だとは思う。

海岸沿いの崖。

確かに、確かに子供用として高さは無い。下も海だから危険もほとんど無さそう——あくまで無さそうなのだ。実際はありまくりのまくりまくりで、高波がばっちゃんばっちゃん岩にぶつかっていた。こんなのに当たったら骨はポッキリいくね、うむ。

後ろを振り向けば、談笑しながらキャーキャーと黄色い悲鳴が飛び交う常夏の楽園。前方には行けば死の待つ三途の崖。川なんてんな可愛らしいもんじゃねえ。一見、高さの無いしょぼい崖なのが逆にむかつく。プラスチック爆弾で吹き飛ばしてやりたい。ああ、粉々にしてえ。

「帰るか」

凄い真っ当なご意見だったと俺は思う。俺は。

「ダメだよそんなの。ここまで来たからには、最後まで行くのが冒険家ってものでしょ？」

「朝賀、悪い。俺自分の事冒険家だなんて思っていないから。一度もないから。多分、これから一生無いからさ」

「穂村くん、枯れてるね」

……ぶん殴るぞてめえ。

「悠、幸、何ボケツとしてんの。早く行くわよ」

マジかよっ。お前らどんだけ遅いんだよ。むしろ何故そこまでノリノリなのか教えてくれ。

筋肉痛で軋む身体に鞭打って、大河、朝賀の後に続いて進む。

崖の足場は、岩に背を向けて横歩きになってようやく歩ける程度しかなく、ぶっちゃけふざけんなこの野郎だった。

「うへええええ〜〜っ」

怖がる様子を微塵も見せない大河、朝賀達。普通だった、らきやああだの、怖い怖いーだの、助けてーだの叫んだりするもんだろいや、それは少し映画の見すぎか。て言うか、普通に過ごしてたらこの状況にならないだろうし。

「？　おい、朝賀？　どした？」

どれ位進んだのだろうか。不意に朝賀が立ち止まり、顔面を青々と染め上げている。

ハーフパンツから見えるほっそりとした足はカクカクと笑っていた。

……まさか、まさかな。いくら朝賀がアホな子でもそんなお約束、現実にあるはずがない。お約束ってのは、テレビが文面の中だからこそのお約束であって、現実じゃ単なる出来すぎにしかない。

「……こわ、怖くなってきちゃったよー。どどどど、どうしよう穂村くん……」

「あー、お前は本当にアホなんだな。脳から送られてくる電気信号はあれか、牛歩なのか」

「ぎゅ、牛歩？　美味しいの、それ……？」

なんでこの状況で食べ物話をせにゃあかん。

ダメだ。朝賀と喋っていつも会話として成立しない。一方的でも、俺の意図も分かっていて更にその上をいくベルチェより、話が噛み合わないどころか顎外れちゃってるんじゃない？　状態の朝賀のが成立していない。

なんてハイレベルな組み合わせ——などと考えている場合ではない。

前方、朝賀の奥には大河の姿は無くずんずんと先に進んでしまっ
たようだった。

「良いから進め。こんな所で止まっていたら、後で大河に何て言われ
るか。……絶対拳で語られるぞお前」

「や、やだよそんなの。ど、どうしたら良いかな……」

アホだ。うざくてアホで脳信号は牛歩で泣き虫で——どうしよう
もねえなこいつ。

「進め」

「む、ムリーっ」

「じゃあ落ちろ」

「じゃあ?! じゃあって何!? って言うか落ちろってわたし死
んじやうよお!!」

「冒険家なら冒険で死ぬのは本望だろうが」

「わだじ冒険家じゃばいもんっ、わあああああん!!」

あああああ、めんどくせえ。

わんわん泣き出した朝賀幸高校三年生。今更だが、朝賀って来年
大学生か。講義をちゃんと受けられるか心配だ。いや、その前に迷
子になる。朝賀なら絶対なる。

震えの振動がこっちにまで伝わってくる。朝賀がどれだけの恐怖を味わっているか物語っていた。

こっちはこっちで、さっきから筋肉が軋んで何度も落ちかけてたりするし。

「おがあざああああん、だずげでえええええっ」

「や、お前の母親ならまず一目散に逃げると思う」

「そうでしたあああああっ」

自分の母親がそんなだと、自覚はあるらしい。

「……何やってのよ、あんたら」

——虎女神が降臨なされた。

第二関門、なだらかな山。

誰だ、誰がいったいこれをなだらかなんて言う嘘吐きやがった。なだらかか？ はっ、ふざけんなよゴミツカスの味噌っカスが。

みしみしいう筋肉をどうにかこうにか動かしつつ、隣に立つ朝賀の肩に手を置く。

「……うわあ」

流石の朝賀さんも嘖然としている様子だった。あんぐりと開けた口が間抜けさを更にレベルアップさせている。間抜け面だ。典型的な間抜け面だ。

大河は大河で、胸の下で腕を組みぶすつとした表情のまま虚空を見つめていた。大河の目には何かしらの幽霊体が見えるのだろうか？　と思ってしまうくらいぶすつとしている。

ホテルの裏手。人の手によって作られた、自称なだらかな山。これがなだらかなら富士山だってへっちゃらさ。

延々と続く階段。俺の予想では、ゆったりとした登りの坂道を思い浮かべていたんだが、どうやらそれすら違ったようだ。ざつと見——いや、ざつと見えない。頂上が見えない。なだらか？　はっ、ふざけんなよ以下略だこの野郎。

「よし、大河帰ろうっ」

「行くわよ」

何で貴女はそんなにやる気満々なのですか？

「う、うん。がんばろっ」

のっしのっしと先陣を切る大河に続いて、朝賀がちょこちょこ歩いて歩く。

ああ、ダメだ。今の俺にはキツすぎる。運動不足の塊みたいな俺

が、しかもはち切れそうな全身筋肉痛を大河より賜っている状態でどうしろと？

「悠！ さっさと来なさい！」

「穂村くんっ、置いてっちゃうよー！」

「……うい」

いっそ置いて行っって欲しいです。

いっそ置いて行っって欲しいです。

意を決して、小歴史的第一步を踏み出す。千切れるんじゃないかと思うほどの激痛が、太股からふくらはぎにかけて爆走した。

歯を食いしばって痛みに耐え、一歩進む事にこれを作ったどこぞのキチガイに一発拳を叩き込む想像を巡らせる。

「……穂村くん、わたしやもうダメだよ」

「はやっ！ おま、もう少し頑張れよっ。つか頑張ろうとしろ！」

登り初めて十分。ノロノロと歩く朝賀の背を見ながら進んだ結果、朝賀からギブアップの声。ちなみに大河の姿はもう無い。遙か先に行ってしまったのだろう。

いつの間にか肩を並べ、気付けば俺の後ろに。

このクソ暑中、一滴の汗も浮かべていないくせにぜえぜえと息

を荒げている。て言うか俺の肩に手を置くんじゃないもたれかかるな重いし痛いだろうが。

「えー、でも疲れたんだもーん」

「……三歳児かてめえは。駄々捏ねんなめんどくせえな」

「疲れた疲れたー。もう歩きたくないー」

ぎゃあぎゃあ喚き出した朝賀幸高校三年生。高校、の前に自称がついても誰も疑わないであろう、この人類一面倒な少女。躰役が居ない為、好き放題我が侂を言っている。殴ったら止まるだろうか。

ぷくうと頬を膨らませ、朝賀がジト目で睨んでくる。

言い出しっぺは朝賀であり、こちらら嫌がってんのに無理矢理連れ出された身としては、睨まれるいわれなんざこれっぽっちもないのだ。

嘆息混じりに、朝賀の小さな背中に手を添えぐいぐいと押す。

「ほらっ、歩け朝賀。大河に拳で語られたくないんだろ？俺だつて嫌だ。だから歩けこのっ」

「うう、足重いー。疲れたー。歯が痛いー」

……歯医者に行け歯医者に。

何やら虫歯を患っているらしい朝賀の背を押しながら、一步一步着実に足を進める。

時計を確認しながら、ゆっくりとろとろ階段を上がる。スタートしてから二十分は経っただろうか。もうそろそろゴールが見えて来ても良いと思うんだが。

人工とは言えど、それなりにしっかりしている山道を進みながら周りに生い茂る木々に目をやる。

一生懸命酸素を吐き出す人類の守り神が、風に揺られてさわさわと音をたてた。

涼しそうにしついた朝賀も俺は勿論汗だけで、服が肌にぴっちり張り付いている。

「そ、そろそろ、ゴール、だろ……」

「う、うんっ。そろそろゴール……だと、思う、よ」

ここまで来たらゴールまで辿り着きたいという、初めの頃じゃ考えられない欲求が生まれてくる。それは朝賀も同じようで、死んでから一週間が経過した魚のような目が、キラキラと輝いていた。

「よっしゃ、気合い入れて行くぞ朝賀！」

「うんっ、穂村くん！」

俺と朝賀の間に、一種の連帯感が生まれる。これは吊り橋効果と言っただろうか。あんなにうざいうるさい煩わしいの三拍子がそろった、ギガンテス級に面倒くさい朝賀が――何でだろう、今はこんなに頑張れ頑張れと応援してしまっている俺が居た。

二人してはあはあと変質者宜しく息を乱し、崩れさった顔面をなんとか持ち直しつつ歩く。ひたすら歩く。

——もう少し、もう少しでゴールに辿り着く……はずだ。ゴールは直ぐそこ……には見えないけどあるはずなんだっ。

もう少し、もう少しと自分を励ます。何が目的でこんな事しているなんて、とうに忘れてしまった。そうだ、俺は山登りに来たんだ。そう、そこに山があるか——。

「……何してんの？」

夢の希望に溢れた汗がさつと引っ込む。

ガクガク震える足を押さえつけ、ゆっくりと首を上げた。

——大河さんがいらっしやった。

「な、何って山をどうにか制覇しよう」と

「もう終わったから。ささっと降りて次行くわよ」

朝賀の言い分をバツサリ切り捨て、涼しい顔でスタスタと階段を降りて行った。

「……朝賀」

「……なあに、穂村くん」

「……降りるか、朝賀」

「……うん。疲れたしね、穂村くん」

………帰ろう。

第三十七項 オマケも終わって…

——ハワイが終わる。

一年を通して見れば、一瞬のような時間。あたしにとって、この修学旅行はそんな時間だった。

三年生にとっては三年だけでの最後の行事。まだ体育祭や文化祭なんかもあるけど、やはり三年のみで行くこの旅行には誰もが特別な思い入れがある事だろう。

あたしも、そんな連中の例外に漏れず、沈み行く太陽を眺めながら溜め息を吐く。

真っ白な砂浜で、水面映る太陽はキラキラと耀く。空は茜色。あんなに騒いでいた人達も、今は恰好を崩して思い思いの表情で太陽を眺めていた。

幸に誘われて始めた宝探し。はつきり言って、乗り気ではない。むしろ面倒なくらいだ。それでも乗った理由は二つ。

幸のきらっきらした笑顔に逆らえ無かったのと、このままこの旅行を終わらせちゃいけない気がしたから。

全く、なんて子供。今更、名残惜しいなんて……本当に今更だ。

テープで囲まれた四角形の中。この正方形の範囲内に埋まった最

後のスタンプを探して、あたし達は膝をつき手で砂を払う。

悠の言う通り、これは子供向けではない。

「ないねえ、穂村くん」

「ないな、朝賀」

妙な連帯感が生まれたらしい二人を視界の隅に入れ、また溜め息。今日一日で何度溜め息を吐いたのだろう。

あの二人は何だかんだ言って仲が良い。お互い気付いていないっぽいけど、周りから見ればいつもいつも、まるで兄妹のようにはほとんど会話している。それが、なんでか——イライラしてしまう。イヤだ。何が？ 何がイヤだ 何かがイヤで……。分からないけど、イヤなんだ。

——このままじゃ、帰れない。帰ったら、また、きっと、ううん、絶対……。

「大河く、あったー？」

「……無い」

「むう。これ、夕御飯までに見つかるかな？」

「さてな。俺なら第一関門の時点で止めてるから分からね」

ない、ない、ないない何にもない。

自分の心が空白になるようだ。この感覚は多分、あの時の同じ。すっぱりと抜けて、いつの間にか居なくなってしまう気持ち。

夏が来ると、いつも嫌な雰囲気が身体にまとわりつく。まだ春だけど、この気温と日差しが夏を連想させ、憂鬱とは違ったどんよりとした空模様のような気分になってしまう。

「……？」

ふと視線を感じ、その方向へと目を向ける。慌てて逸らしたが、一瞬しっかりと目が合ってしまった。悠、と。気まずそうに眉を潜め、ちらちらとこちらを伺っている。

「……なに？」

「いや、なんつーか、なるほどなと思って。ああ、そうか、近いからだよな」

——近いから。

あたしの顔を見て、一瞬で理解してくれたのだろうか。だとしたら嬉しい、かもしれない。うん、悪い気はしない。

そう、近いんだ。あたしの父親。お父さんの命日だ。

夏は好きじゃない。お父さんが死んだ季節だから。

夏になると、いつも頭がぼーっとする。あたしにとって一番大切な時期なのに、どうしても空手の練習に身が入らない。

夏は嫌いだ。あたしの家族の命が、あっさりと刈り取られた季節だから。

交通事故とか言う、別段珍しくも何ともない事故に巻き込まれた。そして、死んだ。この間にぽっかりと抜け落ちた様々な感情は、最早意味を成さない。もう忘れてしまった。だって、あたしがまだ小学校低学年の話だし。

憶えているのは、辛いと表現する以外何者でもない感情と、誰よりも真っ先に泣いてくれた悠の泣き顔だけだ。

あたしは泣けなかった。お母さんは泣けなかった。我慢していたんだと思う。悠のご両親はいつもふざけているけど、あの時は大泣きする悠を必死で慰めていた。

だって悠、実の父親よりあたしとお父さんの事慕っていたから。

泣くのは辛い。悲しいのが辛いのではない。悲しいから泣くのは確かだけど『泣く』という行為そのものが辛いのだ。だって、泣くって事は悲しんで居るって認める事になるから。悲しいって事は何かがあったって事で、何かって言うのがそういう事で。

——あたしが泣けなかったのは、死を認める勇気が無かったから。あたしは臆病者だから。

夏は嫌いだ。いつもあたしを困らせる。

だからその時、その夏で日本一強くなれば泣けるかなと思った。

強くなれば、泣く強さを持てるかなと思った。

葬式が終わった後、悠とあたしは部屋に戻り二人向かい合って座っていた。何を喋るでもなく、まだぐすぐすいつてる悠を前にしながら。

『大河、なんで平気なんだ……？』

『分かんない。けど、平気じゃない、よ……』

『だってお前、葬式の時だって』

『……じゃあ、あたしの代わりに悠が泣いてよ』

悠が泣いた。わんわん泣いた。赤ん坊に戻ったと錯覚させるほど号泣した。

夏は嫌いだ。でも、一生大切にしたいと思った気持ちに気付けた季節でもあるから。

——だからその時、その夏で一番強くなれば伝える勇気が持てると思った。

「大河っ」

「……う？ え？ ご、ごめ——きやつ？」

悠の声に我に返って、顔を上げると予想以上に近かった顔に身を引く。どうやら無視してしまっていたらしい。そのせいかどうなのか、少し怒ったような表情をしている。

「もう日が暮れるけど、どうするよ？」

「え……？」

周囲を見回すと、空に星が見え始めていた。そんなに長い事思考の海に浸かっていたのか。

「大河？」

「あ、うん。そうね……、幸は？」

「朝賀は、折角ここまで来たんだから最後までやりたいてよ。まあ、俺と朝賀はほとんど何もしてないが」

苦笑する悠に、そんな事ないと思いつつ口には出さない。言えるはずがないから。悠の前で、これ以上弱い自分で居たくないなんて。

「なら、やるわよ。ううん、あたし一人でもやるって今決めた」

「……そうかい。んじゃ、もう一頑張りすっか」

悠を追いかけばかりなのはイヤだ。逆に追い越して、悠にあたしを追いかけさせてやろう。惚れさせて、好きになった弱味を持たせて、それで。

——それで、沢山たくさん好きだと言って貰おう。拒否なんてしたら、一発殴ってなる。

「さて、今日はもう解散となる訳ですが――」

担任の長ったらしいお言葉を賜りながら、生徒一同気だるい表情で虚空を見つめる。

ハワイから日本へ。空港から学校へ。

全員がはしゃぎ回ったのは明らかであり、その顔からは疲れが隠しきれていない。翌二日が代休として休みなのは体力に自信があるあたしでも有り難い。

「……ふう」

ポケットから携帯を取り出し、チリンの鈴の音が良く響くストラップに目を向ける。

サニーくんが居た。正確にはレッドサニーくんだ。

赤い球体に、子供の落書きのような猫目と鼻と口を書き、球体の周りに鬣を生やした謎の生物。太陽とライオンを模したらしい。あまりにもベタな組み合わせだった。

このサニーくん。実はあのスタンプの景品なのだ。非売品の特別仕様なんだとかで、従業員の人に沢山誉められてしまった。

今までクリアした人が居なかったらしく、そりゃもう盛大な拍手

だ。まあ、はっきり言ってあれをクリア出来る——しようとする暇人が居ないだけなんだろうけど。最後のスタンプなんて、夕飯ギリギリまで探してやあつとだったし。

ちなみに、悠はオレンジサニークン。幸はイエローサニークンを貰っていた。悠は『これ、携帯につけんのか……？』とか言っていたが強制的に装着。ついでに結び目を瞬間接着剤で貼り付けてやろうかと思った。泣きそうな顔で首を振るからやめてあげたけど。

今思えば、あんなに張り切ってやったのはこう言う思い出の品が欲しかったからなのかもしれない。ううん、かもじゃなく絶対そう
だ。

「つう事で、解散ー」

口々に、お疲れーなんて言いながら思い思いのグループを作って家路につく。

「大河」

「ん、あ、悠」

「……帰るか」

あたしと悠——とベルチェさんの家は近い。一緒帰っても自然ではあるだろう。

こう言う時、家が近い事が妬ましくなってしまう。近いと、一緒に帰っても何ら不自然さは無く。むしろ、真逆なのに一緒に帰る方が何かしらの意図が発見出来るのだから。前者は自然であるが故に

分かり難く。後者は不自然であるが故に好意があるのは歴然。

あたしと悠は、肩を並べて歩き出す。

校門を出て、十歩も歩かない内に、やはりと言うか何というか。

金色の髪。小さな身体をぴしっと伸ばし、両手をヘソの前で丁寧に合わせにつこりと笑う。

「おかえりなさい、悠さま——」

すぎりと痛む胸を抑え、あたしは彼女から目を逸らした。

……なんて、幸せそうに笑うんだ。

何年も会えなかった恋人に再会したかのように。

ベルチェさんは戸惑う悠に駆け寄り、背中に手を回す。悠は悠で、動揺してはいるが嫌がついている訳ではない。ふらふらと宙を漂う両手がその証拠だ。

「あ、ああ。ただいま……」

何故だ。あたしの方が付き合い長いのに。なんでこんなに居づらいのだ。

「あたし、先帰るから……」

何故だ。何故ずっと一緒に居たあたしが逃げているんだ。

第三十七項 オマケも終わって…（後書き）

これにて大河編終了。

第三十八項 お勉強しましょ

修学旅行も無事終わり、そろそろ期末テストが迫って来た。修学旅行が終わってすぐ勉強し始めなきゃならない罨にハマりつつ、俺は一人部屋で机に向かう。

ベルチェと共用ながらも、あいつはしっかりと学生である俺の事を考えてくれていたらしく、勉強する環境は万全だった。

エアコンに電気スタンド。勉強机の近くには窓もあり、開け放てば座っている横から風が吹きつける。

環境としてはまさに極上だ。

日々、クソ両親の下でまともに集中出来る環境に居なかった分嬉しさ倍増ではある。まあ、ぶっちゃけまともに勉強しようって気はなかったけど。

「悠さまー、お茶持って来ましたよー」

カチャリと静かにノブを回し、ベルチェが部屋に入ってくる。トレーを器用に片手で持ち、これまた静かにドアを閉めた。

勉強机とは別に、寝室なのに何故かある小さなちゃぶ台な上にトレーを置いた。トレーには、涼しげな青みのかかったコップと、赤いコップの二つ。

「おう、さんきゅ」

答えながら、視線は机の上へ。どうにも俺は、一度集中するのに時間がかかるタイプらしい。集中すれば結構な長さは保てる。目を放したら散漫してしまいそうで怖いのだ。典型的な、やり始めるのに時間がかかってしまうタイプ。

背中にベルチェの気配を感じながら、数式に目を通す。つか、こんな訳分かんない数学がいったい人生のどこで何の為にどのようにして役に立つんだ、なんてやさぐれてしまうベタな俺がここに居る。

ほうっと嘆息し――刹那、首に回った柔らかい感触に身体が強ばった。それは決して俺を墮とそうと企む邪なモノではなく、いやある意味では邪な愛と書いて純愛と読む欲望丸出し大サービスなモノだった。苦しく無い程度に絡み付いたそれは、夏の蒸し暑さに少し汗ばんでいる。背中に当たるやーらかい感触はアレなんだろう。耳元に吹き掛ける切なげな吐息も生々しい。なんかハアハア言ってるけどスルーが懸命だ。別に今の俺は集中モードに入ってるから冷静なんじゃない。むしろ冷静ですらない。言うなれば、うおおおと吹き出しそうな間欠泉を必死で抑えている状態なのだつかもう我慢ならねえ。

「暑苦しいっ、引っ付くなベルチェ!」

「はあはあ、悠さまの香り……」

「何興奮してんだてめっ。ちょ、耳に息吹きかけんな!」

「しつとりと汗ばんだ首筋がせくしーですう」

顔を見なくても声で発情してるのが分かってしまう俺バンザイ。

「あゝ、悠さま？」

「ダメ」

「まだ何も言ってますんよう。て言うかもう限界近いんですけど」

「……適度な運動で発散してこい」

「いやん、適度な運動なんてそんなっ。適度で済ませられるなら最初からこゝんな事しませんっ」

「何の話ですか!？」

ああ、やっぱり会話が噛み合っていない。そもそもベルチェは人間と会話してるって自覚があるのだろうか。完全に一方通行。ヒトの頭撫でんじゃねえ! て鳴いてる猫に対して、もう甘えた声出しちやって可愛いゝとかなんとか言ってる勘違い野郎みたいだ。こちらら言語は同じはずなのに、どうしてこんなにも会話してるって感覚がないのだろう。

「あ、悠さま。その問題、足し算間違ってますよ？」

「あ？」

突如として素に戻ったベルチェの指した問題は……おおうつ、本当に足し算間違ってるし。まさかこんなアホな子に間違いを指摘されるとは。まあ、俺より歳上な訳だが、なんか屈辱だ。普通に流したけどベルチェって俺より歳上なんだよなあ。ならこの発育もげふ

んげふん。

ベルチェの指摘通り、間違っていた部分を修正。お世辞にも頭が良いとは言えない俺だけど、基礎には自信があるほうだった。応用になった途端ワケわからーんになっちゃう困った脳をしていて、故に足し算を間違えるのは自分自身でも驚きなのだ。しかも間違えたのは最後の最後の細かい計算。ここに気付くベルチェが凄いのか否か。

「もう、悠さまの困ったちゃんっ。こんな簡単な問題を間違えるなんて。これはもう、私が手取り足取り腰取りナニ取りで教えてあげ……」

「――断る！」

「――ない、と言おうと思ったんですけど。断られちゃ仕方ないですよね。わかりました！ 私がみっちり教えてあげましょう！」

なんか一人で自己完結したー！？

しかも今時小学生でもやらないような引っ掛けで。引っ掛かった俺も俺だがやる方もアホだ。

「では問題です」

恰好はともかく、これがどうしてなかなかにもな問題を出してきた。問題の流れるには、基礎計算を幾つか繰り返しそれらを更にどう計算していくか、である。耳元で囁くような甘ったるい声は無視して、折角出してくれた問題に取り掛かる。

「……」

えと、ここはこうで。これが……こうか？　む、何か違うような。

「んふふふふふ。ああ、久しぶりの悠さま臭。脳が覚えるくらい
沢山吸って置かないと」

ああ、なるほど。こっちとこっちを逆に計算したんだな。ほう、
ベルチェのくせに生意気な。ま、俺より歳上だが。

「すうううう、はああああっ。すうううう、はああああっ」

「……ベルチェうるさい。犬かお前は」

「あれ？　悠さまはそちらがお好み？」

「そちらってどっちだ。うるさくするなら居間に行ってる邪魔だから」

溜め息を吐きながらも、了承の声を聞きつつ再び問題に目を通す。

ありゃ、ベルチェに構ってたせいかどこをどう計算していて、これからどう計算しようと思ったのか忘れちゃったよちくしょう。

相変わらず蛇のように巻き付いている腕を忌々しげに擦る。マブラーにしては季節外れ且つ生暖かい。ぷにぷにとした天然の人肌は心地良く、それがまた集中力を霧散させるのだ。女の子らしい、細いながらもきめ細かい柔肌。年頃の青年には色々な意味で辛く、耳、背中、首の三段攻撃。感触、声、体温がダイレクトに感じ取れてしまい理性的によろしくない。

「……放置ですかそうですか」

「なんかお前、変な勘違いしてるだろ」

更に荒くなった息遣いを頬に感じ、普段の数倍は重く長い溜め息を吐いた。

第三十九項 ドロドロで粘着質なコイ

「ふう、さてどうすっかな……」

今日やる分のノルマを終え、昼食を食べたままの恰好で一息吐く。

ちやぶ台を挟んで目の前には、ベルチェが行儀良く正座で緑茶をすすっている。金髪碧眼とのミスマッチ度と言ったら凄まじいものがあった。

今日明日と、修学旅行の代休として休みが設けられている。九割方勉強に時間を費やすのだろうが、流石に一日集中力が保つかと言えどNOであり、お隣の瑞池さん家の大河さんも勉強に励んでいる事だろう。こうして漠然とした時間が余るのは、この家に来て初めなのだ。何をどうして良いのか分からない。大河は勿論、ああ見えて雄也も成績が良い。遊びに誘えるほど俺もトチ狂っていない。

「悠さま、今日のご予定は？」

「今日？ んー、特にねえなあ」

「ほう」

意味深な笑みを浮かべ、何故かぽうつと頬を紅潮させる。少しだけ目を細め、流し目を送ってきてるのは故意だろうか。もしそうなら、お前には似合わないとはつきり言ってやった方がベルチェの為である。

「あのー、じゃあ今日は瑞池さんのお宅に行きませんか？」

「……大河ん家？」

「いえ、瑞池さん家です」

……何が違うんだろう。

つか、大河ん家？ こいつが？ ベルチェイン大河？ ニトロに
火炎放射器向けるようなもんだろ。危険過ぎる。

「ほら、この間悠さま言ってたじゃないですか。暇なら瑞池さんのお宅にお邪魔させてもらえって」

「……ん、ああ」

そういえば、ベルチェが捨てられた仔犬みたいにくんくん鼻を鳴らすもんだから思わず言っちゃったんだっけ。大河母はたいへん気さくな性格で、ベルチェにもすっかり相手をしてくれると踏んだのだ。嬉しそうな声色からして結構仲良くなったと見る。

昔から俺や大河をからかうのが生き甲斐みたいな人ではあるものの、うちのバカ母に比べたら幾分かマシだった。ああ、我が家族は生きているのだろうか。なんて無意味な思考に陥ってしまう事が無いのは、隣に大河母が居ると言う安心感からなのだろう。そうでなければ、俺は両親を身内として考えていないって事になってしまう。

「瑞池さん、凄く優しい方で。この間も昼ドラの話で盛り上がってしまったのですよ」

両手を頬に当て、何故かかぶりを振る。

ベルチェが昼ドラねえ。地味だが着実にレベルアップを果たしている家事のおかげで、ベルチェも立派な主婦になって来ている。

それにしても、昼ドラの話で現役バリバリの主婦と盛り上がる二十代新婚ってどうよ？ 個人的には俺の今現在の状況がドロドロすれすれだからシャレにならんのだが。五箇条がなきやもつとこう、上手い具合に話が進むのに。更に言うと、ベルチェが鏡もそっぽを向く不細工で傲慢チキの変態——いや変態なのはまさにだけど概ねこーんな感じなら良かったのに。良くねえか。んなのと結婚させられる俺よ……。

「菱形三十面体関係の恋ってタイトルなんですけど。凄いドロドロなんですよっ」

「——だろうよっ。俺の想像の遙か上空を飛び越えて行きやがったさ！ ドロドロつか、もういつそ死んだ方が幸せになれるんじゃないかね？！」

ぐちゃぐちゃで訳分かんなくなりそうだなそのドラマ。主要登場人物もやたらと多そうだし。ああ、三角関係とか四角関係とかが可愛く思える。なんて愛しく幼稚なものか。菱形三十面体関係に比べたら遊びみたいなものだ。

「そうなんですよー。二話に一回くらい、貴方を殺して私も死ぬわっ、みたいな展開があって」

「……最早サスペンスだろそれ。いつか絶対誰かが断崖絶壁に追い

込まれるって」

「バタバタと登場人物が死んでいく中、脇役だった登場人物が片っ端から関係に飛び込むですよ。もうそれが怖くて怖くて、藁人形に釘は常用ですからねえ」

……サスペンスホラーでした。

子供が見たら直ぐ泣くな。良かった、がきんちよどもが登校してる真っ昼間に放送されてて。もしゴールデンなんかには、しかも平日毎日放送なんかされてみる、そこで子供の泣き声が聞こえてくるぞ。

しかしまあ、今時のドラマは凄いなあ。菱形三十面体関係なんて、誰が考えついたのか。作家に向けて厳しいご意見を送りつけてやりたい気分だ。

「もし悠さまがそんな関係の中に居たらどうします？」

「真っ先に自殺する。そりゃもうドラマの一話が始まって十秒もしないうちに」

「えへへ、大丈夫です。わ、た、し、が、守って差し上げますから。ふふふふ……」

いや、お前から一番逃げたいんだが。なんか差し上げ、が刺死上げに聞こえてしまう恐怖。上ると書いて逝くと読む、だな。

「……は、はははは、そ、そっか」

「ええ。うふ、うふふふ」

「あら、いらっしやい。今日は悠くんも一緒なのね」

「はいっ。悠さまがどうしても私と一緒に居たいって言うので」

「……一言も言ってねえ」

「何か言いましたか？」

別に、と返し、にこやかに迎え入れてくれた瑞池母の後に続いてリビングに向かう。

三人は座れそうなソファと、一人用のソファが二つ並んで向かい合い、ソファの間を挟んでテーブルが鎮座している。家のとは比べ物にならない大型テレビはいつ見ても圧巻だった。瑞池母の趣味がテレビ、映画鑑賞だからそのせいなのだろう。

リビングに大河の姿がないのを見ると、大河は部屋で勉強してるようだった。同級生の母親と遊ぶ野郎ってのは俺くらいなものだ。ま、ベルチェも一緒だけど。

瑞池母に促され、長座のソファに腰を沈める。隣にはベルチェが。

相変わらずの快適感だった。魔性と言っても過言ではない。脳味噌が動くなと電気信号を30ワットくらい出してるような気がする。

とんだ超人だった。

「まあ、悠くんは気持ち良さそうな顔して。昔から家に来ると真っ先に座ってたわよねえ」

「……ええ、まあ」

「悠さまって、ソファがお好きなんですか？」

ベルチェの言葉に、瑞池母がくすりと上品に笑う。大方ガキの頃の俺でも思い出しているのだろう。ベルチェに話されるのは嫌だが、このソファのふかふか感と言ったら。思考能力を著しく低下させる。

テーブルに並べられたコップを手に取り、くいつと飲み干す。

「あら、もう飲んじゃったの？ おかわりは？」

「あ、はい。お願いします」

瑞池母にコップを渡そうと手を伸ばし――。

「……!!」

一瞬手が触れビクリと肩を震わせる。瑞池母は何でも無かったようにコップを受け取り、麦茶をトクトク注いでいた。

瑞池母の反応は正常なものだ。俺が大袈裟過ぎるのだろう。俺が一般人と同じ立場に居るのなら。

最近は修学旅行に行っていたからすっかり忘却の彼方だが、俺にはハンブラヒ法典とは違った路線でも、俺にとっては同じくらい凶悪な五箇条があるのだ。

恐る恐る、隣に座るベルチェの顔色を伺う。

「――わあ、良い笑顔」

「悠さま？ 分かってますよね？」

「……はい」

流石に、学校の時みたいな膝の上に横座りとか言う、前頭葉がバグった行動はおかさなかった。俺の横から、ヘビのように腕を首に巻き付け、きゅっと抱き寄せられる。肩にあたるふにやっとした感触はもうお馴染みの化していた。とは言っても、容姿だけなら平均以上、100人に聞けば100人が可愛いと返すほどののだ。馴染みとは言え、感触と精神的ダメージは別物であり。

ベルチェから漂う甘い香りが鼻を擽る。密着状態は今日で二度目。いや、寝ていた時の事を考えれば三度目か。こいつの肉体的スキンシップ――所謂お触りは異常だった。触ると言うか撫でつけると言うか、セクハラされてる気分なのだ。

「はい、むぎ――ま、まあ、仲良しねえ」

瑞池母も、困ったように微笑を浮かべる。そりゃ目の前でこんな状態のバカカップルが居たら困惑もするだろ。

「もう、悠さまったら。約束を破るなんていけない子ですねっ」

とか言いながら、表情はすげー笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5148e/>

結婚奴隷五箇条 ～独妻者と暴れ虎に花束を～

2010年10月10日15時34分発行